

長野県下諏訪町

黒曜石原産地遺跡分布調査報告書

— 和田峠・霧ヶ峰 —

I

2001

下諏訪町教育委員会

長野県下諏訪町

黒曜石原産地遺跡分布調査報告書

— 和田峠・霧ヶ峰 —

I

2001

下諏訪町教育委員会



東 俣 遺 跡 (凹み分布の最北から撮影、手前が18号凹み)



東 俣 遺 跡 (凹みの密集部分を北側から撮影)



東 俣 遺 跡 6 トレンチ 鉢床の 黒曜石



東 俣 遺 跡 2・6 トレンチ 黒曜石 採掘址 土層 断面



東俣遺跡 5トレンチ全景



東俣遺跡 5トレンチ黒曜石採掘址土層断面



星ヶ塔（霧ヶ峰ビーナスラインより撮影）



星ヶ塔（星ヶ塔林道のりこし峠頂上より撮影）



星ヶ塔遺跡 Mピット南壁土層断面



星ヶ塔遺跡 Mピット東壁土層断面



星ヶ塔遺跡 Mピット西壁土層断面



星ヶ塔遺跡 Iトレンチ南壁土層断面



星ヶ塔遺跡 Iトレンチ南壁土層断面

例 言

- 1 本書は、平成5年度から平成12年度に実施した、町内遺跡（黒曜石原産地遺跡）分布調査の報告書である。
- 2 本調査は、国庫補助金（国宝重要文化財等保存整備費補助金）及び県費補助金（文化財保護事業補助金）を受け、下諏訪町教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、長野県遺跡調査指導委員会黒曜石原産地遺跡分布調査指導特別委員会の指導を受け、実施している。
- 4 本書の作成は宮坂清と田中慎太郎が行い、執筆は、第IV章、第V章の縄文土器の記述について田中が分担したほかは、宮坂が行った。編集は宮坂が行った。
- 5 本書にかかわる写真撮影は宮坂が行った。
- 6 本調査の出土品、諸記録は下諏訪町教育委員会が保管している。
- 7 現地調査から報告書作成の過程で、以下の方々、機関から御指導・御協力を得た。御芳名を記して厚くお礼申し上げる次第である。（敬称略）

| | | | | | |
|----------|-------|-----------|-------|-------|-------|
| 青木 正洋 | 安蒜 政雄 | 伊東 才治 | 市沢 英利 | 鶴飼 幸雄 | 大竹 幸恵 |
| 大竹 憲昭 | 岡村 秀雄 | 小野 昭 | 織笠 明子 | 織笠 昭 | 勝見 譲 |
| 北沢 深 | 功刀 司 | 小池 岳史 | 小平 和夫 | 小林 克次 | 小林 深志 |
| 五味 一郎 | 五味 裕史 | 酒井 潤一 | 島田 和高 | 大工原 豊 | 高見 俊樹 |
| 田中 総 | 田中 薫 | 谷 和隆 | 堤 隆 | 戸沢 充則 | 野口 淳 |
| 野沢 誠一 | 羽生 淳子 | 原 明芳 | 平口 哲夫 | 平林 彰 | 廣瀬 昭弘 |
| 藤森 英二 | 三木 陽平 | 水野 哲郎 | 宮坂 光昭 | 村崎 孝弘 | 望月 明彦 |
| 森嶋 稔（故人） | 守矢 昌文 | 森山 公一（故人） | 吉谷 昭彦 | 藁科 哲夫 | |

諏訪考古学研究会 鷹山遺跡群調査団 長野県教育委員会

南信森林管理署諏訪事務所（旧諏訪営林署）

目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| 卷 頭 図 版 | |
| 例 言 | |
| I 調査の概要 | 1 |
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 調査組織 | 2 |
| 3 調査の方法と経過 | 3 |
| II 和田峠・霧ヶ峰における黒曜石原産地遺跡の研究略史 | 10 |
| 1 星ヶ塔の調査・研究史 | 10 |
| 2 黒曜石原産地周辺の周知の遺跡 | 14 |
| III 黒曜石の分布調査 | 29 |
| IV 東俣遺跡の調査 | 36 |
| 1 遺跡の位置 | 36 |
| 2 周辺の遺跡 | 37 |
| 3 調査の経過 | 37 |
| 4 黒曜石の分布について | 38 |
| 5 凹み・マウンドについて | 41 |
| 6 試掘調査 | 46 |
| 7 まとめにかえて | 65 |
| V 星ヶ塔遺跡の調査 | 67 |
| 1 遺跡の位置 | 67 |
| 2 調査の経過 | 67 |
| 3 凹み・マウンド地形の広がりについて | 67 |
| 4 試掘調査 | 69 |
| 5 黒曜石原石 | 72 |
| 6 出土遺物 | 72 |
| 7 調査のまとめと課題 | 74 |
| VI 黒曜石原産地の鉱山化について | 75 |
| VII 結 語 | 78 |
| 引用・参考文献 | |
| 写 真 図 版 | |
| 報 告 書 抄 録 | |

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

(1) 歴史資料としての黒曜石

和田峠・霧ヶ峰周辺は、ガラス質火山岩である「黒曜石」の産出する場所が数多く存在しており、本州最大の黒曜石原産地といわれている。この黒曜石は、打ち割ることによって、容易に鋭い刃をもつカケラを得ることができ、さらにそのカケラに、細かな打ち割りによる細工を加えることで、さまざまな形に変形することが可能である。このような特性から、黒曜石は、石器時代の道具の原料として盛んに用いられた。

そして、この黒曜石は、原産地周辺のみならず、本州中央部の広い範囲において、石器時代における石器の材料として盛んに使用されていたことが知られている。考古学では、こうした遠隔地石材としての黒曜石に注目し、黒曜石の消費地にあたる各地域において、黒曜石の利用、消費のあり方から、当時の集団の動きや集団同士の交流、あるいは地域間の結びつきなど、黒曜石の移動の背後にある、社会組織や生活形態を読み取ろうとする試みが行なわれている。一方、黒曜石原産地である和田峠・霧ヶ峰周辺では、山麓部を中心に、黒曜石を利用した石器製作を集中的に行なったと考えられる遺跡や、黒曜石の原石を多量に保有している遺跡が多数発見されており、原産地と消費地をつなぐ「中継基地」として注目され、当時の社会を考えるうえで重視されている。

このように、黒曜石は石器時代の石器の原料として盛んに利用されたということと、遠隔地に多量に運ばれて利用されているということの二つの歴史的特性をもっている。そして、そうした特性は、集団の動態、あるいは集団と集団、地域と地域との関わりといった、当時の社会的な諸関係を解明するうえで、歴史研究上重要な役割を果たすものと認識されている。

こうした黒曜石を題材にした研究が活発になってきたのは、黒曜石の産地推定法が確立されてきたことに大きな要因がある。1960年代後半から、フィッシュトラック法、電子スピン共鳴法、蛍光X線分析による産地推定法が開発され、1980年代後半に至り、方法として確立された。1990年代以降は、各地で分析例が急増し、旧石器時代や縄文時代の黒曜石流通の実態が解明されつつある(金山1992)。

また、産地推定法の確立と同時期に、考古学の方法論にも新たな動向が生じた。それは「石器石材の獲得を、旧石器時代社会の集団形態や物資交換の類型を動的に捉えるなかで、欧米考古学の諸理論や文化人類学の研究成果を援用しつつ、その社会的側面から理解しようとする方向と、石材環境が石器生産に及ぼす影響を経済的側面から理解しようとする方向」の、二つの方向性としてまとめられている(絹川1995)。ここではこれら研究動向の詳細には触れないが、石材獲得に対する関心の高まりと産地推定法の確立とが相俟って、石材原産地へ関心を向けることになり、そうした研究動向が、黒曜石原産地に対する研究の必要性や重要性を再認識することになったといえる。

長野県でおこなわれている黒曜石原産地遺跡分布調査は、次に述べる大規模開発への対応が直接の契機ではあるが、黒曜石原産地の歴史的特性を再認識する研究の潮流が、もう一つの契機となっているこ

とはおさえおかなければならない。

(2) 黒曜石原産地と大規模開発

黒曜石が歴史研究上有効な資料であるという認識が高まる一方、黒曜石原産地一帯では、原産地の分布や遺跡の分布、各遺跡の内容が部分的に明らかになっていたに過ぎず、わずかの限られた情報からでは、黒曜石のもつ歴史資料としての有効性を十分に発揮できる状況ではなかった。

そのようななか、多数の黒曜石原産地を有し、黒曜石原産地遺跡群が形成されている中信高原において、1980年代後半から大型リゾート開発の計画が各地でもちあがり、黒曜石原産地や原産地遺跡の保護を図るための基本的な資料整備が急務となった。

こうした状況を踏まえて、長野県教育委員会及び関係市町村による、長野県黒曜石原産地遺跡分布調査が計画され、「長野県黒曜石原産地遺跡分布調査指導委員会」が設置された。そして、この委員会の指導のもと、和田村男女倉遺跡群、長門町鷹山遺跡群、諏訪市ジャコッパラ遺跡群の調査が実施され、これまで知られていなかった、黒曜石原産地や黒曜石原産地遺跡の状況が明らかになってきた。

下諏訪町では、平成4(1992)年末、東俣川流域において計画されていた、砥川総合開発事業(下諏訪ダム)が正式に事業化されることになり、開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るための基本データとなる、遺跡分布図の再整備が急務とされた。開発事業予定地は、黒曜石原産地の直下に位置する場所であり、すでに開発事業予定地にかかるとされていた溜沢遺跡は、縄文時代の「黒曜石採取の前進基地」と予測されていた。そのような状況を踏まえ、この地域における遺跡分布調査は、黒曜石原産地と密接な関わりをもつ調査であるという認識のもとから、開発事業予定地を含む遺跡詳細分布調査を、黒曜石原産地遺跡詳細分布調査と位置づけ、取り組むこととなった。

そこで、下諏訪町教育委員会では、黒曜石原産地、黒曜石原産地遺跡の保存と活用を図るための基礎資料を得るという目的をかね、平成5年度より国庫及び県費補助事業として、試掘を伴う遺跡詳細分布調査を行なうこととなった。

2 調査組織

長野県黒曜石原産地遺跡分布調査指導特別委員会

委員長 森嶋 稔 (平成8年まで、長野県遺跡調査指導委員)(故人)

戸沢 充則 (平成8年から、明治大学文学部教授)

委員 安蒜 政雄 (明治大学文学部教授)

小野 昭 (新潟大学文学部教授、平成7年度より東京都立大学人文学部教授)

酒井 潤一 (信州大学理学部教授)

平口 哲夫 (金沢医科大学人文科学教室助教授)

宮坂 光昭 (長野県遺跡調査指導委員)

堤 隆 (御代田町教育委員会)

事務局 下諏訪町教育委員会社会教育係、平成9年4月から生涯学習課生涯学習係

北村 勝郎 (教育長 平成8年3月まで)

川口 實 (同 上 平成8年4月から)
中村 勝彦 (教育次長 平成7年3月まで)
小原章博 (同 上 平成7年4月から平成9年3月まで)
今井規矩夫 (生涯学習課長 平成9年4月から)
小林 孝 (社会教育係長 平成6年3月まで)
小山 敦久 (同 上 平成6年4月から平成7年3月まで)
中村 大二 (同上、生涯学習係長 平成7年4月から平成12年3月まで)
小島英太郎 (生涯学習係長 平成12年4月から)
小松 正則 (社会教育係 平成8年3月まで)
山田 道宏 (社会教育係、生涯学習係 平成8年4月から平成12年3月まで)
小口 和好 (生涯学習係 平成9年4月から)
宮坂 清 (社会教育係、生涯学習係)
田中慎太郎 (生涯学習係 平成9年4月から)

調査員 宮坂 清 田中慎太郎

調査参加者 牛山 敏子 小口 明子 土橋 豊一 新村 節子 西山 寛子
浜 和子 (故人) 宮坂ひで子 宮坂 美樹 八代ひさ子
吉澤 幸人 (故人) 森村 鈴子 山田 勝義 山田今朝人 山田 盛夫
古田 富治 古田 泰偉 田中 利夫 小沢 逸郎 藤森 喜作
蟹江 文吉 高木 正幸 小野梅三郎 小口知与吉 長谷川秋男
粟沢 実 山田 秋男 河西 正浩 有賀 勝一

整理作業参加者 (調査参加者以外) 伊藤 明美 中野 直子 山崎 裕子 東城久美子
田中 敏文 千野 昌彦

3 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

本調査の対象地域は、大半が東俣国有林に属しており、現況は山林がほとんどである (第1図)。したがって、遺物の表面採集による遺跡の確認は困難であり、男女倉遺跡群や鷹山遺跡群、ジャコッパラ遺跡群で行なわれ成果をあげている、試掘を行い、遺構・遺物を確認するという方法を採用した。

現地における作業は、まず、踏査により地形を把握し、遺跡が存在する可能性がある地点を選定し、試掘を行なうという手順を踏んでいる。試掘坑の規模は、2 m×2 mの4 m²を基本としている。深度はそれぞれの状況に応じている。

黒曜石採掘遺跡については、黒曜石原石の分布と凹み地形の有無などを目安に調査に踏み込んでいる。この黒曜石採掘遺跡の調査では、地形をこまかく観察するために下草刈りが最初の作業になる。急な斜面では安全性を考慮し、基本的に手作業としているが、緩やかな斜面で安全性が確保できる場合には草

刈機を使用している。今のところ下草刈りを行なっているのは東俣遺跡と星ヶ塔遺跡である。

黒曜石の分布調査は、林道などの黒曜石の転石が露出している場所を確認し、それをもとに転石の分布範囲を把握している。黒曜石の分布については、町の調査とは別に、長野県教育委員会が調査を実施しており、その調査に同行し、分布状況や分布範囲を確認しているところも多い。

(2) 調査の経過 (第2図、第1表)

平成5 (1993) 年度

東俣河流域の調査を実施。地形や現状を把握するために一帯を踏査し、その結果をもとに試掘調査を行なった。蝶ヶ沢遺跡・野田ヶ沢上遺跡・東俣遺跡を新たに発見した。東俣遺跡は地表面に黒曜石が分布していること、凹み地形が集中し、雛段状の地形をなしていること、作業道の断面で凹み地形の断面が露出しており、掘り込みをもつ土層堆積が確認できたことなどから、縄文時代の黒曜石採掘址の可能性のあるものととらえられた。また、大平遺跡の範囲が拡大することがわかった。

平成6 (1994) 年度

東俣遺跡の調査を実施。遺跡の地表に散布する黒曜石の、本来の包含層を確認するために試掘調査を行った。目的とした黒曜石の包含層は確認できなかったが、土層断面の観察において、地表面ではわからなかった複数の掘り込みが認められた。出土した石器から縄文時代の遺構と考えられ、本遺跡が黒曜石採掘遺跡である可能性が高まった。

平成7 (1995) 年度

東俣遺跡の調査を継続。黒曜石採掘坑と考えられる掘り込みの続き、黒曜石本来の包含層の確認を目的に、6年度のトレンチを延長した。その結果、硬質ローム層の下層に黒曜石原石を包含する土層があることを確認し、その原石をねらって採掘が行われていると予測された。

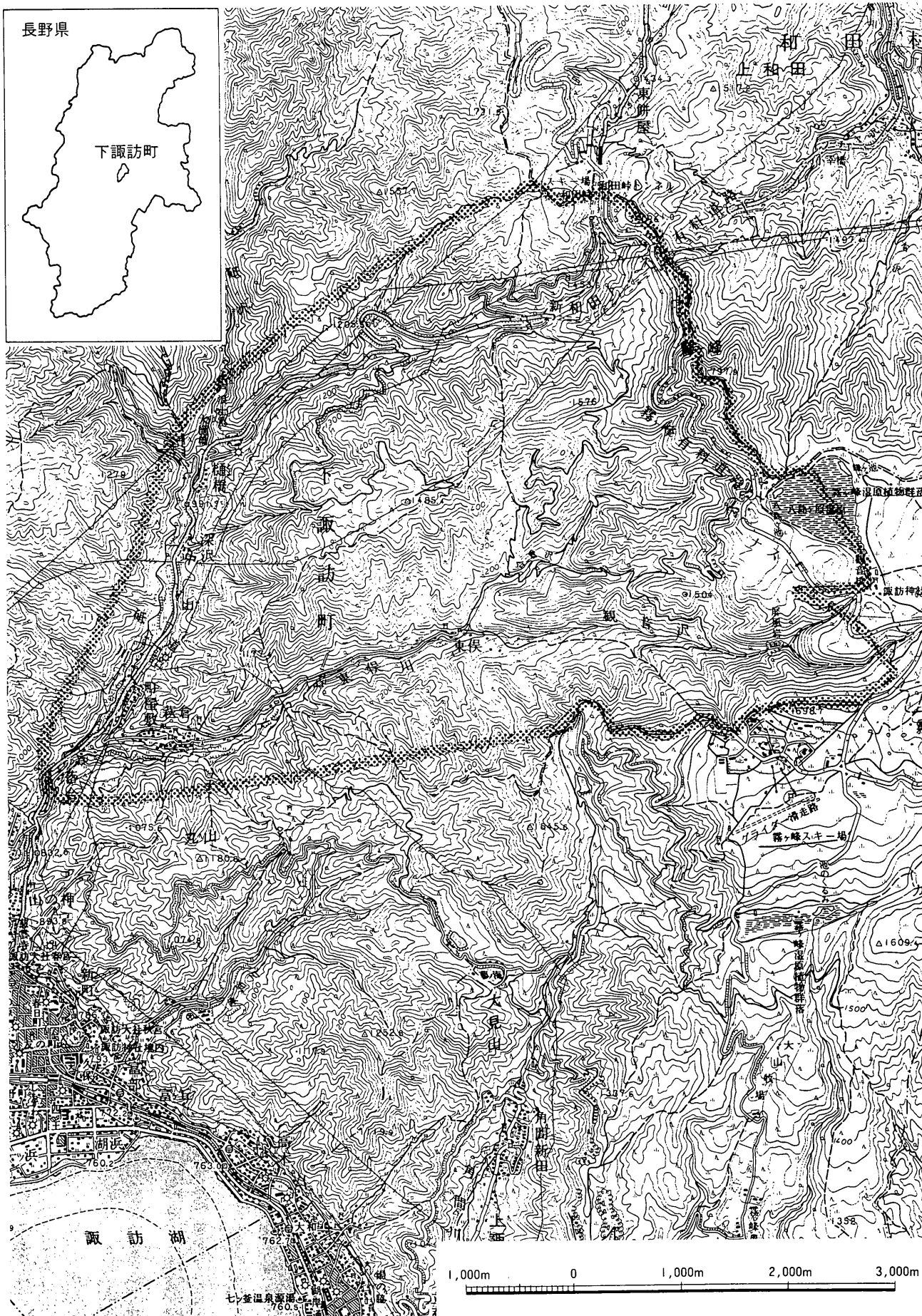
平成8 (1996) 年度

焙烙地域において、民間による開発計画のある地域の調査を実施。周知の遺跡である焙烙遺跡の南側において試掘を伴う分布調査を行った。その結果、旧石器時代から弥生時代の遺物が出土し、焙烙遺跡の範囲が南側に広がることを確認された。

平成9 (1997) 年度

焙烙地域、砥川林道周辺、星ヶ塔周辺の調査を実施。砥川に面する小テラスで丁子沢西遺跡を発見。砥川林道、星ヶ塔周辺で黒曜石原石の分布を確認。星ヶ塔では、藤森栄一氏らがかつて調査した黒曜石採掘址とみられる、凹みとマウンドの密集する場所を確認した。

なお、本年度は、国道改良工事に伴う焙烙遺跡の緊急発掘調査を行い、旧石器時代の石器製作址などを検出した。



第1図 調査地域の位置 1/50,000

第1表 遺物発見地点一覧

| 番号 | 遺跡(地点)名 | 時 期 | 備 考 |
|----|---------|------------------|---------------------------------------|
| 1 | 蝶ヶ沢遺跡 | 縄文早期? | 平成5年度試掘 |
| 2 | 大平遺跡 | 旧石器・縄文草創期・早期・前期 | 平成5年度試掘 |
| 3 | 東俣遺跡 | 縄文時代前期 | 黒曜石採掘址、平成5・6・7・12年度試掘 |
| 4 | 野田ヶ沢遺跡 | 縄文時代早期? | 平成5年度試掘、遺物は表採 |
| 5 | 焙烙遺跡 | 旧石器・縄文早期・前期・中期初頭 | 平成8年度試掘 |
| 6 | 焙烙遺跡 | 旧石器・縄文早期 | 平成9年度踏査 |
| 7 | 丁子沢西遺跡 | 旧石器 | 平成9年度試掘 |
| 8 | 星ヶ塔遺跡 | 旧石器・縄文前期・後期・晩期 | 黒曜石採掘址、平成10・11年度試掘 |
| 9 | 萩原沢 | 縄文 | 黒曜石原産地、敲石採集、平成11年度踏査 |
| 10 | 星ヶ台A地点 | 縄文 | 黒曜石原産地、地表面に凹み群在、剝片等採集、平成5年度から複数回踏査 |
| 11 | 星ヶ台B地点 | 縄文 | 黒曜石原産地、地表面に凹み群在、剝片・石核等採集、平成9年度から複数回踏査 |
| 12 | 星ヶ台C地点 | 旧石器・縄文 | 黒曜石原産地、階段状の地形、尖頭器、剝片等採集、平成10年度踏査 |

平成10(1998)年度

9年度確認した星ヶ塔東斜面の黒曜石採掘址とみられる場所を中心に調査を実施。凹みとマウンドの広がり、土層堆積状況を調べることを目的に調査を進めた。凹みとマウンドの広がりについては、斜面が沢に落ち込む際から山の中腹にかけて、約2万㎡の範囲に広がっていることを確認した。試掘調査では、黒曜石採掘に伴うと考えられる人為的な土層堆積を確認し、縄文土器が出土したことから、縄文時代の黒曜石採掘址の存在を推定した。

平成11(1999)年度

10年度に引き続き、星ヶ塔東斜面において調査を実施。試掘調査と、地形確認調査を行った。試掘調査では、黒曜石の採掘活動に伴って形成されたと考えられる、流紋岩や黒曜石の廃棄ブロックを平面で確認することができた。また、小さな単位の層が重層していること、各層ごとに傾斜の違いがあることなど、土層堆積の状態が確認できた。各層ごとに、黒曜石や流紋岩のサンプリングを行なっているが、

まだ分析をするまでに至っていない。なお、試掘調査では、縄文時代前期の「諸磯c式土器」の破片が5点出土し、黒曜石採掘の時期を知ることができた。石器も多数出土し、とくに敲石が数点出土していることから、採掘と同時に石器製作も行われていることが予測された。また、旧石器時代の尖頭器や尖頭器の調整剥片が多数出土しており、旧石器時代の石器製作址であることも明らかになってきた。ただし、旧石器時代の包含層はまだ確認はできていない。

11年度の調査では、土層堆積や出土遺物から、試掘調査区を含む星ヶ塔東斜面一帯が、縄文時代の黒曜石採掘址であると確信することができ、その黒曜石採掘活動が、縄文時代前期末葉にさかのぼることが明らかになったことが、大きな成果であった。

平成12（2000）年度

本年度までの調査の中間報告書を作成するため、過去の調査において、中途になっていた、東俣遺跡の調査を実施した。5月から6月にかけて、7年度のトレンチを再発掘し、土層断面図作成や、採掘址を立体的にとらえるためのトレンチの拡張を行なった。また、凹み地形がどのように形成されているかを調査するために、新たに1本のトレンチを設定し調査した。さらに10月から11月にかけて、トレンチ調査の継続、凹み地形の分布図作成などを行なった。

7年度のトレンチの拡張調査では、断面で確認された掘り込みが、穴であることを確認し、さらにその穴の覆土から、諸磯c式土器の小破片が1点出土したことで、この穴が、縄文時代前期末葉の所産である可能性が高いことがわかった。さらに、この遺構の下部の採掘坑を掘り下げ、採掘坑の壁面や底面を確認した。

凹み地形に新規に設定したトレンチでは、人為的と考えられる、小さな単位の土層が重層している状況が確認され、また、底面に不整形な土坑状の掘り込みが穿たれていることがわかった。上部の土層からは黒曜石原石が多数出土した。調査で観察された状況を総合すれば、この凹みを、黒曜石の採掘活動によって形成されたものであると考えることができそうである。

本年度の調査成果から、東俣遺跡では、縄文時代前期末葉に黒曜石採掘活動が行われていたと推測することができた。星ヶ塔の調査成果と合わせて考えると、下諏訪側の黒曜石原産地一帯では、縄文時代前期末葉に複数の場所で黒曜石の採掘を行っていたと推定することができ、この時期を、黒曜石採掘活動の一つのピークと想定した。

本年度は東俣遺跡の調査とともに、これまでの調査の中間報告にあたる、本報告書の作成、刊行を行った。本報告書では、黒曜石、黒曜石原産地の分布調査の成果と、縄文時代の黒曜石採掘遺跡である、東俣遺跡、星ヶ塔遺跡の調査について重点的に報告した。そのほかの新発見遺跡などについては以下にその特徴を記すにとどめ、次回以降の報告書で正式に報告することにしたい。

（3） 黒曜石原産地周辺の遺跡について

ここでは、本報告書に収めることのできなかつた、本分布調査で発見された黒曜石採掘遺跡以外の黒曜石原産地周辺の遺跡について、その特徴を列挙しておきたい。

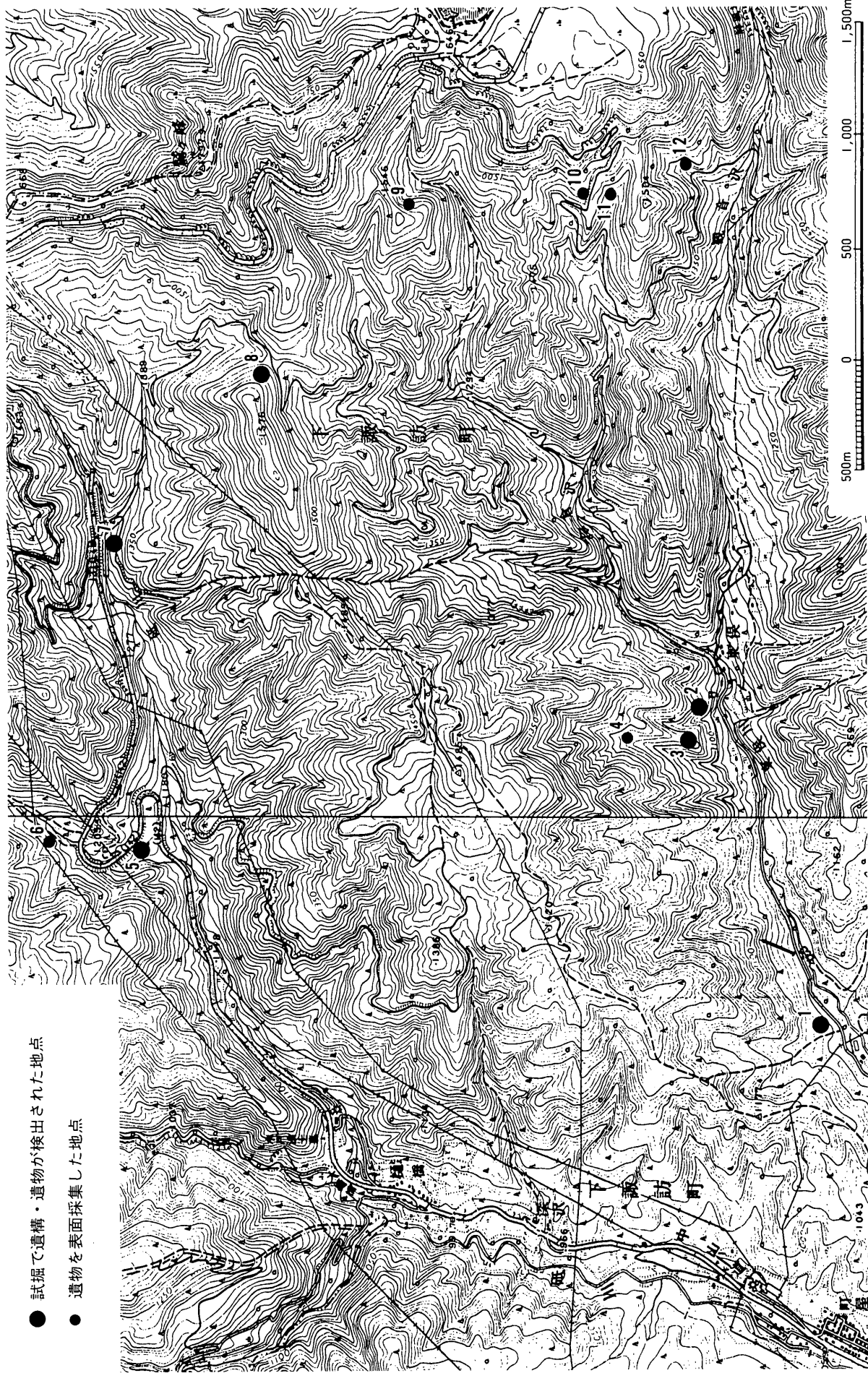
- ① これまで発見されている遺跡は、旧石器時代から縄文時代中期のものである。なお、焙烙遺跡では弥生時代の磨製石鏃が出土しており、弥生時代の遺跡でもあることが確認されたが、黒曜石原産

地との脈絡で考えるより、猟場とのかかわりでとらえるべき性格と思われる。

- ② 遺跡の多くは、河川の合流点に面する、山裾の狭い平坦面に形成されている。
- ③ 出土遺物の量は遺跡ごとに多寡があるが、4 m²程度の範囲で数百点の石器が出土する遺跡がある。
- ④ いずれの遺跡でも、黒曜石を利用した石器製作の痕跡が認められる。丁子沢西遺跡では、旧石器時代の細石核のブランクを集中的に製作したと考えられる資料が多数出土したほか、尖頭器の製作に関わる資料も多数出土している（宮坂2000）。大平遺跡では、縄文時代早期にピエスエスキューが集中的に製作されている。
- ⑤ 縄文時代の遺跡では、黒曜石以外の石材がごくわずかに認められる。大平遺跡では、下呂石の石鏃が出土している。

黒曜石原産地周辺の旧石器時代、縄文時代の遺跡にはこうした特徴がみられ、いずれの遺跡も黒曜石との関わりをうかがうことができる。しかし、原産地との関わりの深さは、遺跡ごとあるいは時期によって違いがあると推察される。石器が多量に出土している、石器を集中的に製作した遺跡と、石器製作の痕跡はあるが遺物量の少ないキャンプサイト的な遺跡とでは、原産地との関わりの深さに違いがあると考えられる。したがって、各遺跡の内容を吟味し、原産地とどのように関わっているのかを明らかにしてゆくことが必要である。そうした検討を重ねることで、いわゆる石材原産地遺跡の実態が明らかになってくるであろう。

今後の調査ではさらに遺跡の発見に努めるとともに、各遺跡と原産地の関わりを追求してゆきたいと考えている。



第2図 分布調査で遺物が発見された地点 (1/25,000)

II 和田峠・霧ヶ峰における

黒曜石原産地遺跡の研究略史

平成5年度から開始した黒曜石原産地遺跡分布調査は、全くの遺跡の空白地帯を対象としているのではなく、調査対象地域には、すでに幾つもの遺跡が確認されている。今回の調査では、新たな遺跡の発見だけでなく、そうした周知の遺跡において、範囲、内容を再確認することも目的としている。そこで、ここでは、これまでどのような遺跡が知られているのかを整理しておく。それはこの地域の調査・研究の歴史を整理することにもなる。

また、黒曜石原産地、黒曜石原産地遺跡として学史的に著名な「星ヶ塔遺跡」については、その学史的意義についても触れておこうと思う。

1 星ヶ塔の調査・研究史

(1) 『諏訪史第一巻』にともなう調査

和田峠・霧ヶ峰の黒曜石原産地における考古学的調査は、「諏訪史第一巻」(鳥居1924)の刊行にともなう、鳥居龍蔵氏らの調査がその嚆矢であろう。鳥居氏らの調査以前にもなんらかの調査を行なった人たちがいたかもしれないが、正確な記録を残している点で、鳥居氏らの調査を最初の考古学的調査とすることができよう。

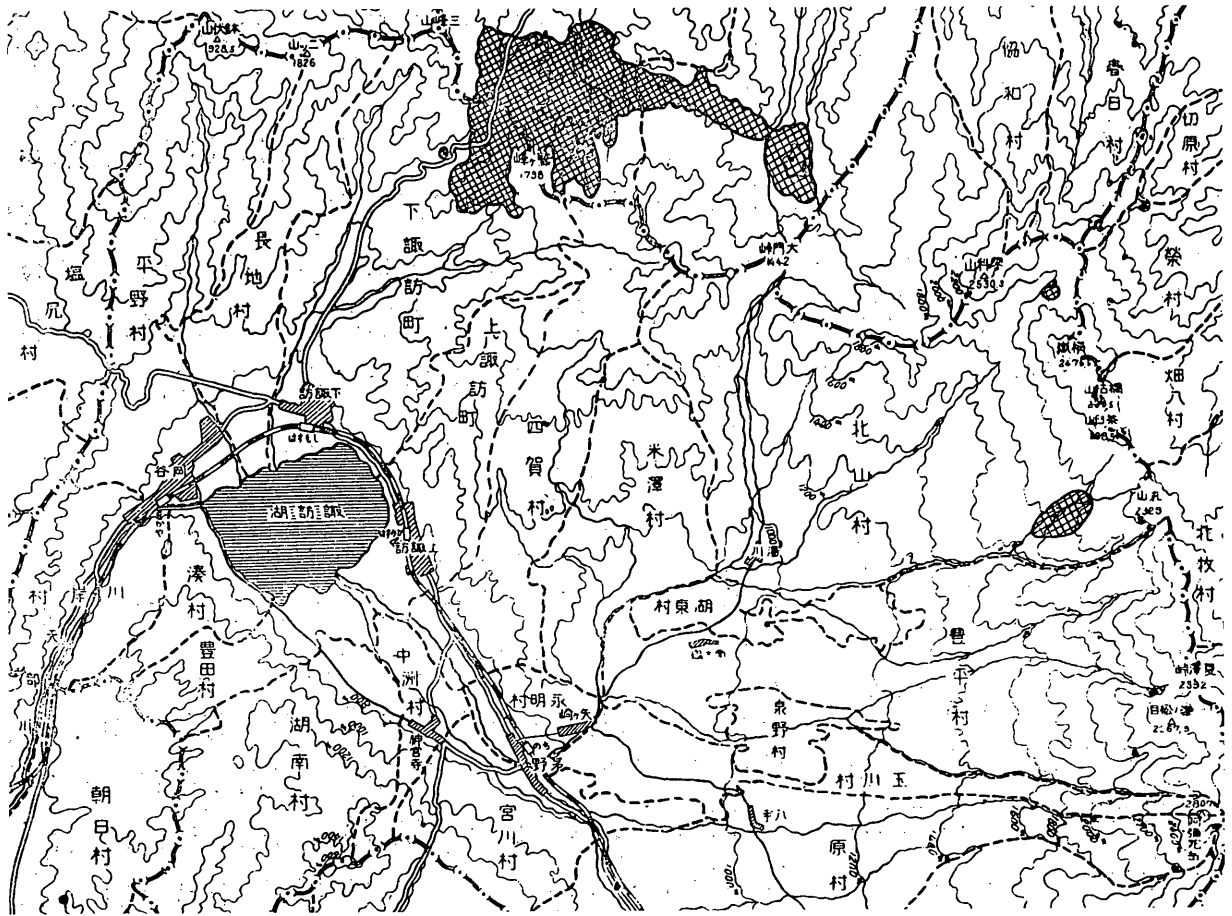
鳥居氏らが調査を行なった場所は、和田峠周辺の黒曜石原産地を代表する、「星ヶ塔」である。星ヶ塔が調査地点に選定されたのは、「本邦には黒曜石の産地としては冷山、播鉢山、和田峠、星糞峠等があるが、和田峠が最も有名になつてゐる。恐らくこの和田峠及び星糞峠のものが最も多く石器時代に関係を有つてゐたであらうと云うことが一般の意見である」(鳥居1924、114頁)ということを背景にしているようである(第3図)。

星ヶ塔の調査では、つぎのようなことが観察され、写真による記録が残された。①星ヶ塔は「黒曜石が全山を掩つて」おり、「黒曜石が地上に露出して居る」こと、②「土器片一箇を得た事」、③土器片を得た「辺りから少し上の所には地面が少し窪んだところがある」こと、である。そして③の地面が少し窪んだところについては、「これは当時の民衆の作業場か、さなくば假小屋の跡でもあろうか。未だ学術的の発掘を遂げて居ないから何んとも云うことは出来ない」と慎重な意見が述べられている(鳥居前掲、115頁)。

しかし、同じ写真の同じ場所の説明ではあるが、別の箇所では「星ヶ塔の山頂の所に人が二人立つて、凹みを呈してゐる所は、之、楕円形の穴で二間と八尺位の割合となつてゐる、此処はまさしく竪穴の跡らしいが恐らくこのところに住まつていたもの(或は年中の或る時期か)は黒曜石の採鉱と大に関係を有つてゐたであらう。黒曜石とその竪穴何だか深い関係を有つているものではなからうか」と述べられており(鳥居前掲、379頁)、115頁の慎重な意見とは異なっている。ここではなぜそのような異なる意見が出されているのかを詮索するのが目的ではないが、諏訪史第一巻の「黒曜石」の項の記述は八幡一郎氏

諏訪地方黒曜石産地分布地図

二之分万十二



第3図 「諏訪史 第一巻」に掲載された黒曜石産地分布図

によるといわれており、八幡氏と鳥居氏の見解の差であると考えるのが妥当であろう。

いずれにせよ、地表面に観察された凹みが、先史時代の黒曜石の採取活動と関係があるのではないかと推測が立てられたのは重要なことであった。だがそれは、採取活動に従事した人の居住に関するものにとらえられ、黒曜石の採掘と結び付けられることにはならなかった。それは、いわゆる「典型学派」(戸沢1987) 的な考え方に束縛されていたからと思われる。

鳥居氏は、「彼の新石器時代に於けるベルジャムにあるフリント鉱坑はその深さ地下に四十英尺も掘りこまれてある事実」を紹介し、星ヶ塔では、そのような地下深くまで「掘り込んで採った跡は認められない」ことから、「各所に広く露出散在してゐた」黒曜石を採取していたと考えている。ここで鳥居氏は、ヨーロッパのフリント採掘坑を典型例と考えたために、黒曜石の採掘に関する思考を閉じてしまった。それ以上突っ込んで考えることができなかつたのである。

諏訪史第一巻の調査は「原産地研究の端緒を開いた」という点で高く評価されるべきである(高見1998)。しかし、そうした評価とともに、当時の研究の限界もわれわれは知っておかねばならない。なぜならば、「典型」の呪縛はいつの時代でも起こりうることであり、なにより、ようやく開拓され始めた黒曜石原産地遺跡の調査では、「典型」に縛られては前に進むことはできないと感じているからである。

(2) 黒曜石採掘址の発見

『諏訪史第一巻』の調査のつぎに、星ヶ塔で考古学的な調査が行なわれたのは、工業用の黒曜石採掘にともなって、縄文土器が出土したことを契機にはじまった藤森栄一氏らの調査である（藤森・中村1962、藤森1963）。1958年、パーライトの原料としての黒曜石採掘がはじまり、翌1959年、工事担当者により縄文土器が発見され、その報を受けた、藤森栄一氏、中村龍雄氏らによる調査が開始された。なお、中村氏は、そのときの「工業の総担当責任者は諏訪考古学研究所の藤森栄一の義弟長井敏氏であり、現場の監督は私の遠縁にあたる小林猛男氏が掌握していた。この横の連絡があったため、調査の遂行ができた」と云っても過言ではないのである」と回想している（中村1977）。

藤森氏らの調査では、つぎのことが確認されている（第4図）。

- ① 星ヶ塔には12ヶ所の凹みがあること。
- ② その凹みには、黒曜石採掘坑と考えられるものがあること。
- ③ 黒曜石採掘坑のうちの一つは、「約1メートルの黒曜石破片を多量に含んだ黒土層から、真珠岩層を掘り抜き、黒曜石岩脈を平坦に削って止っている」こと。
- ④ 黒曜石採掘坑からは縄文晩期の土器が出土すること。
- ⑤ 星ヶ塔山では、「黒曜石ズリの露出地点には土器らしいもの、又はその原石として加工されたいものは全く発見されない」こと。

こうした調査所見から藤森氏は、「星ヶ塔の原石は無土器時代、縄文時代を通して、おそらくズリの石塊を採集して下山して居ったものであろう。そして、これが、大がかりな採掘を用いるようになったのが、縄文晩期に入ってからと云う考え」を示し、「星ヶ塔の黒曜石が鉱山化してきた経済的理由」として、次の4つの事柄を取り上げた（藤森・中村前掲）。

1点目は、星ヶ塔と「原石消費地」との距離である。無土器時代から縄文時代中期の遺跡は一日で往復できる距離であるが、後晩期の遺跡は距離的に「一日行程外の場合が多く」なり、「これは作事小屋(マ)と大がかりな採掘の行われた理由」にもなるのではないか。

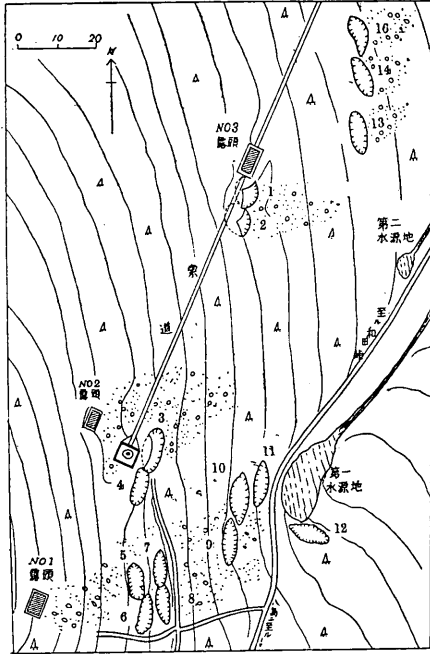
2点目は、原石のサイズである。「無土器・縄文を通じてズリからの採石で充分であった」が、「縄文晩期になって、とくに大型石材を多量に必要」としたのではないか。

3点目は、石材の趣向性の変化である。縄文後晩期では、「チャート・サヌカイト硬砂岩などより、黒曜石が好まれる理由があった」のかもしれない。

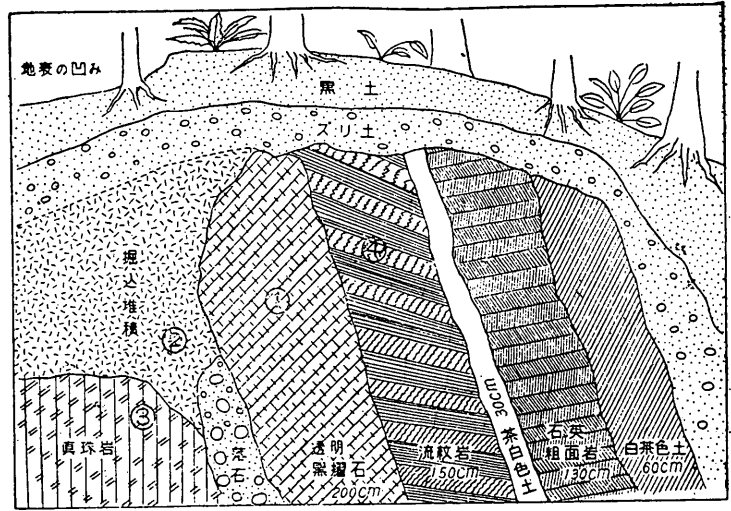
4点目は、石器の重要の増大である。「縄文晩期に、特に石器が沢山作られる事情が発生したか」。

藤森氏はこのうちの1点目と2点目が「鉱山化」の理由であろうと推測した。

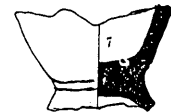
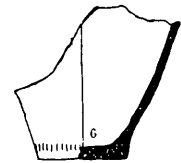
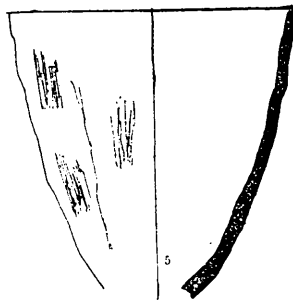
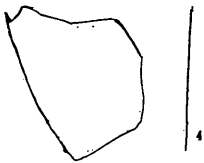
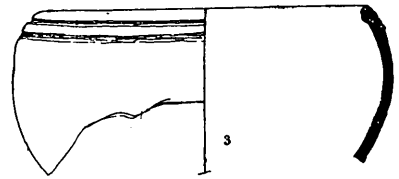
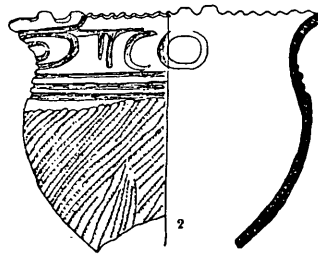
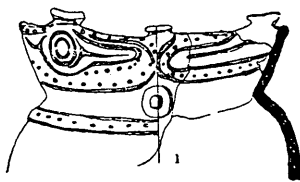
ここでは、藤森氏が、縄文時代に黒曜石の採掘活動が行われていた、という事実を認識しただけでなく、なぜ、黒曜石の採掘活動が行われたのか、すなわち「鉱山」の発生というところまで踏み込んだことに注目しておきたい。先にみたように、藤森氏は星ヶ塔の「鉱山化」を、縄文晩期の経済の問題としてとらえ、その社会の連関のなかで考察しようとしている。藤森氏の「鉱山化」の認識は、黒曜石原産地と消費地との関係を一体化してとらえたものであり、原産地と消費地を統一的にとらえる方向性が示されているといえる。そこからは、黒曜石原産地が、集落遺跡などとともに社会を構成しているものであり、だからこそ、黒曜石原産地は歴史的に把握すべきものであることを知ることができる。



凹み地形の分布図



黒曜石採掘址の断面図



黒曜石採掘址出土土器 (約1/5)

第4図 星ヶ塔遺跡黒曜石採掘址調査資料 (『下諏訪町誌 上巻』より)

われわれはこうした学史を引き継ぎ、縄文時代の黒曜石鉱山の実態を解明するとともに、人類の歴史の中で、鉱山化の過程や歴史的な位置づけを考察してゆかねばならない。

2 黒曜石原産地周辺の周知の遺跡

ここでは、平成5年度からの黒曜石原産地遺跡詳細分布調査以前に、下諏訪町の黒曜石原産地周辺で確認されていた、旧石器・縄文時代遺跡について、昭和61年に刊行された下諏訪町の遺跡詳細分布調査報告書『下諏訪町の埋蔵文化財』をもとに、整理しておく。記載の順番は遺跡番号順である。当該遺跡の報告にかかわる文献については、文献名を遺跡ごとに掲げたが、当該遺跡の資料を用いた研究論文などは割愛した。

1 和田峠頂上遺跡（第3図・第8図）

本遺跡は、下諏訪町と和田村にまたがる遺跡である。1968年、霧ヶ峰有料道路の建設に伴って発掘調査が行なわれた。この調査では3つの地点の調査が行なわれているが、発掘調査が行なわれたのは第I地点であり、第II地点、第III地点では切り通しの断面で遺物の採集が行なわれている。

第I地点の発掘調査では多量の旧石器時代遺物が出土しており、遺物分布図をみると、いくつかの遺物集中地点が認められる。石刃や石核が多い点は原産地遺跡の性格をよく表している。

第II地点では多量の石器が採集されている。第I地点と同じく石刃や石核が多いが、横長剝片を素材とするナイフ形石器がまとまって採集されており、そのなかには国府型ナイフ形石器に類似したものがある。また、和田峠周辺では数少ない、細石刃核が1点採集されていることも注意を要する。

第III地点では石刃や搔器、尖頭器が採集されている。

文献 鈴木 誠編 1969『和田峠遺跡緊急発掘調査報告書』長野県企業局

2 和田峠口遺跡（第3図）

昭和30年頃、工業用の黒曜石採掘の際に、縄文土器が出土し、黒曜石採掘址の存在が指摘されている。

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

3 古峠口遺跡（第3図・第9図）

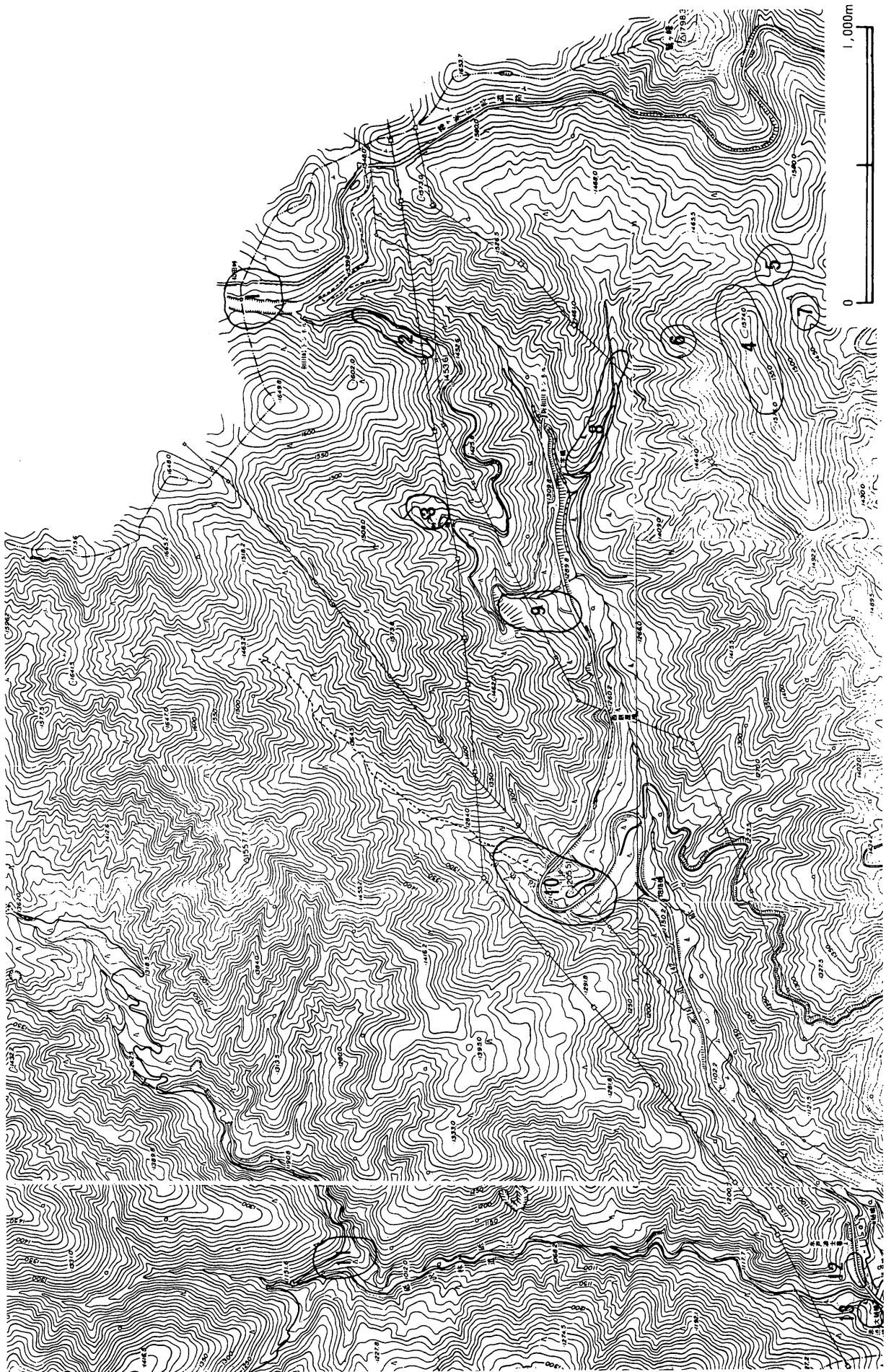
旧中山道の古峠口と呼ばれている地点付近で、黒曜石製の剝片などが採集されており、旧石器時代の遺跡として登録されている。

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

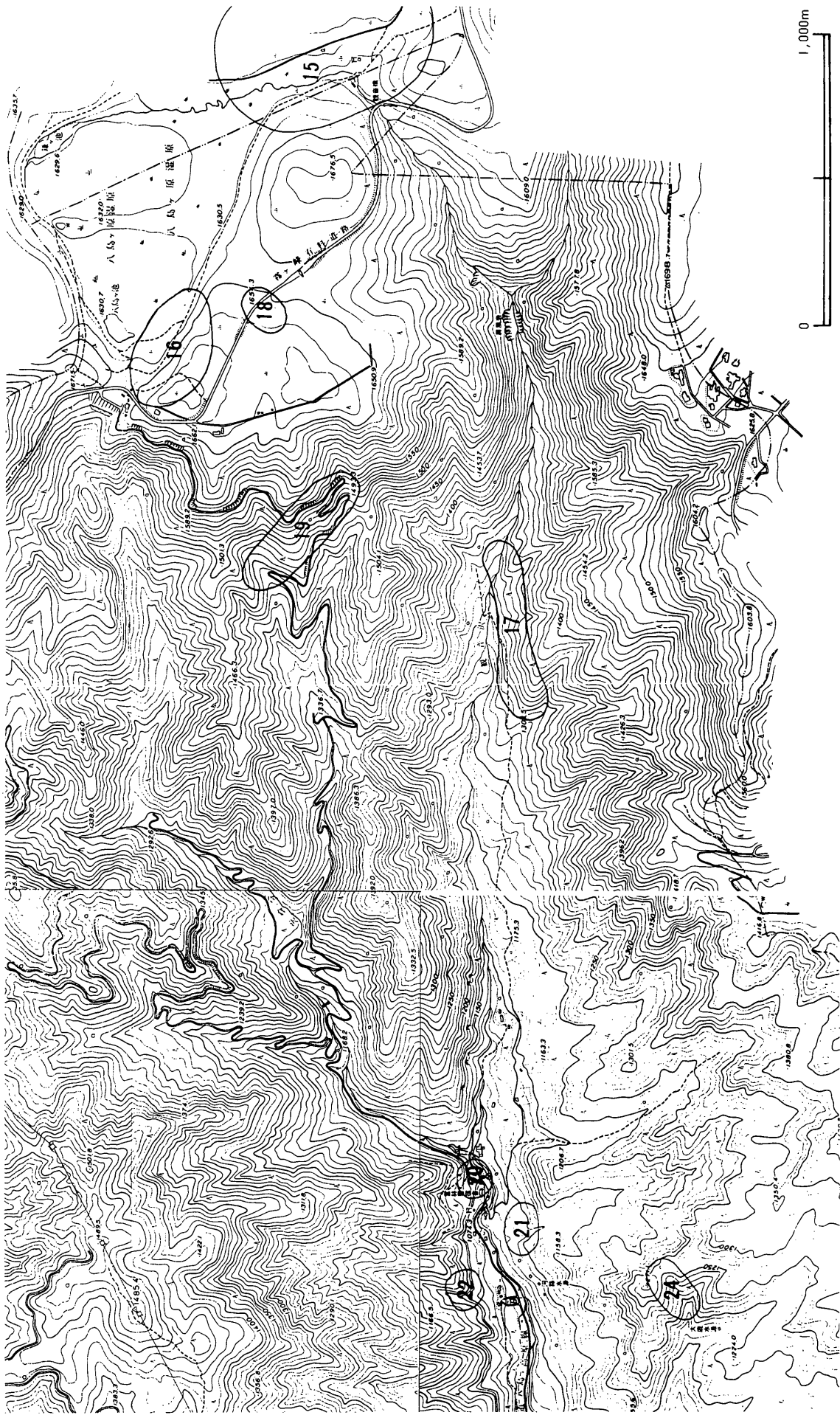
4 星ヶ塔遺跡（第3図・第7図）

先述のとおり、大正時代に、『諏訪史第一巻』にともなう鳥居龍蔵氏らの調査が行なわれ、昭和30年代に、工業用黒曜石の採掘にともなう藤森栄一氏と中村龍雄氏の調査が行なわれている。縄文時代の黒曜石採掘址が確認されている。

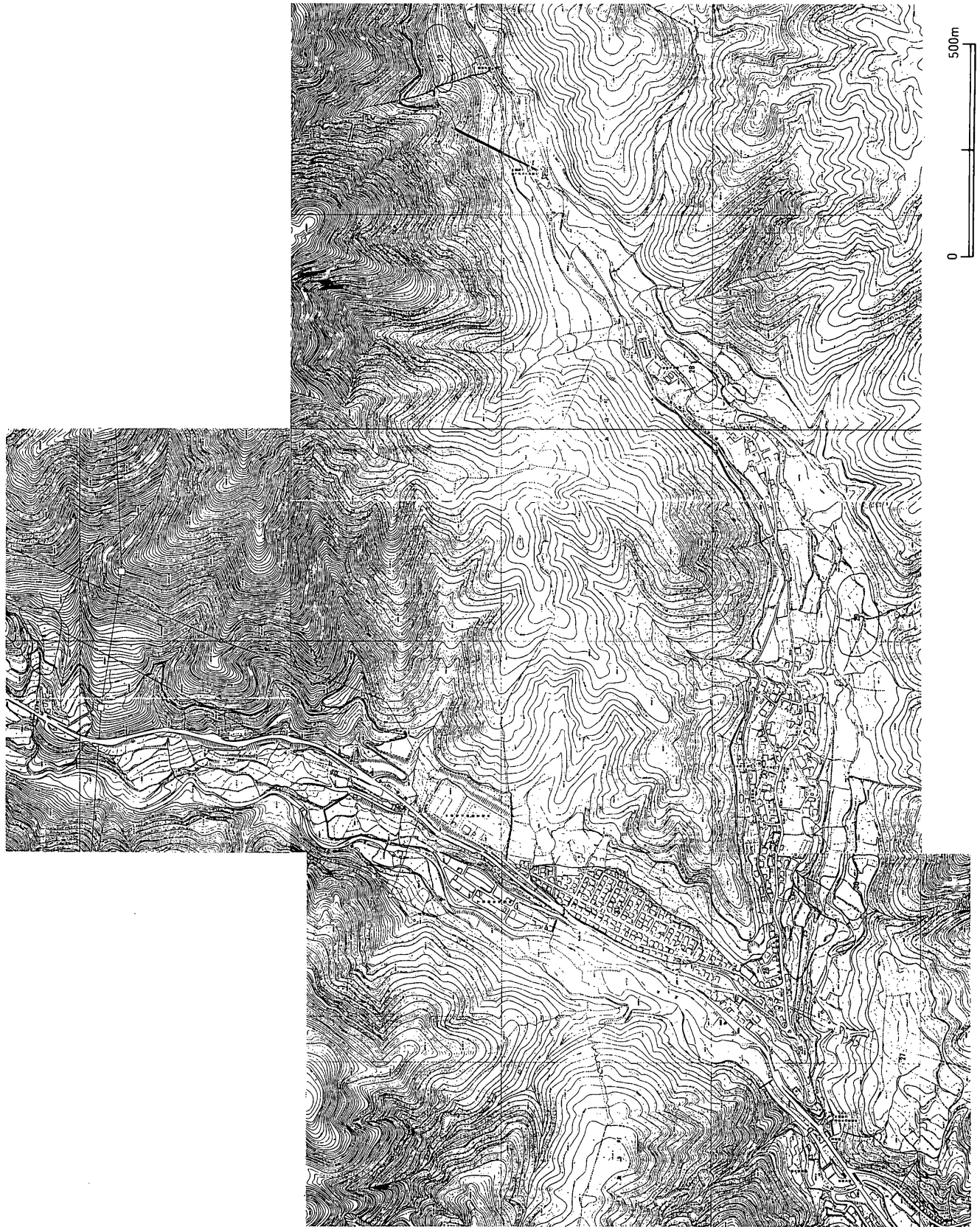
文献 鳥居 龍蔵 1924『諏訪史』第一巻



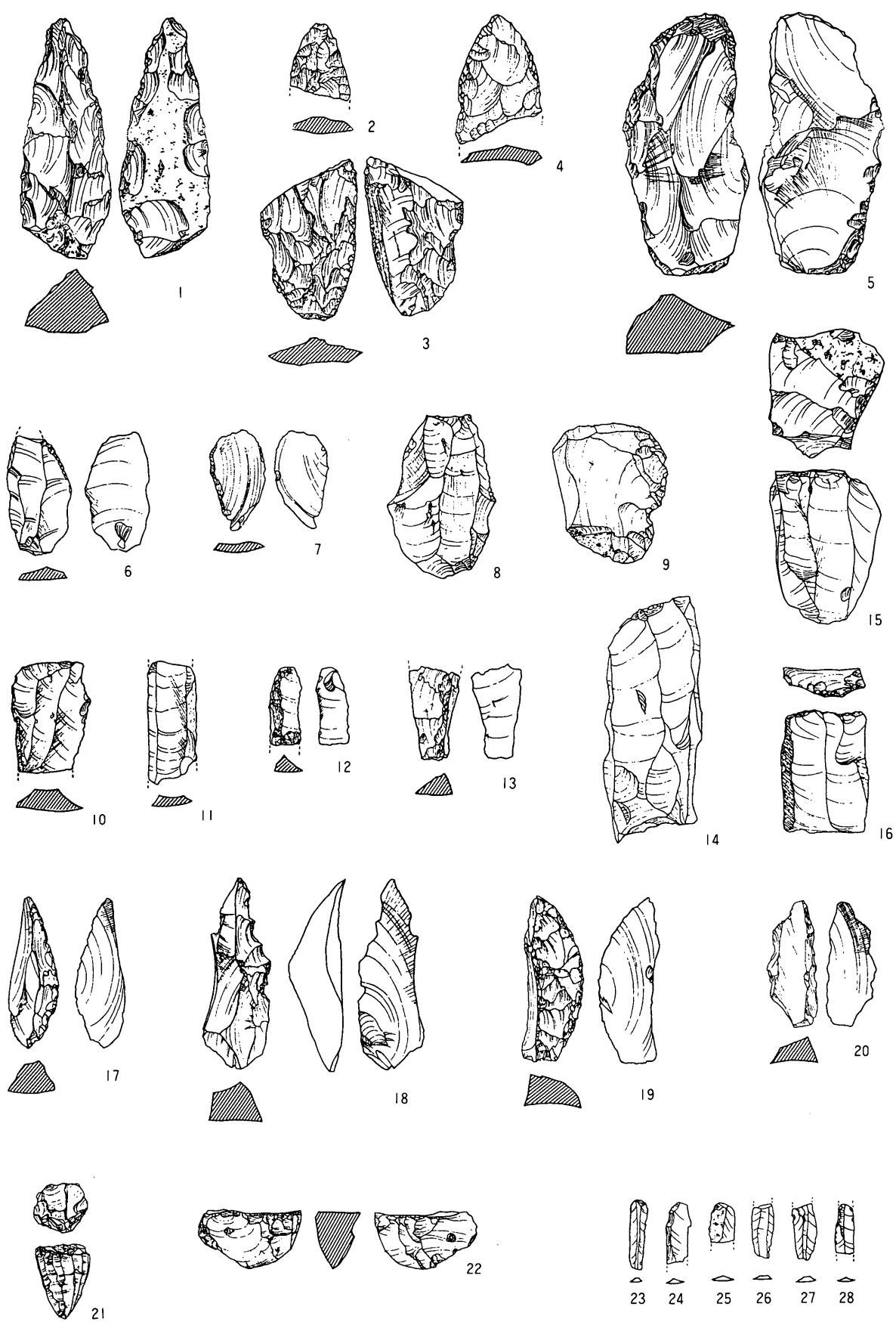
第5図 調査地域における周知の遺跡— I — (「下諏訪町の埋蔵文化財」より)



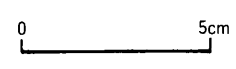
第6図 調査地域における周知の遺跡—2 (「下諏訪町の埋蔵文化財」より)



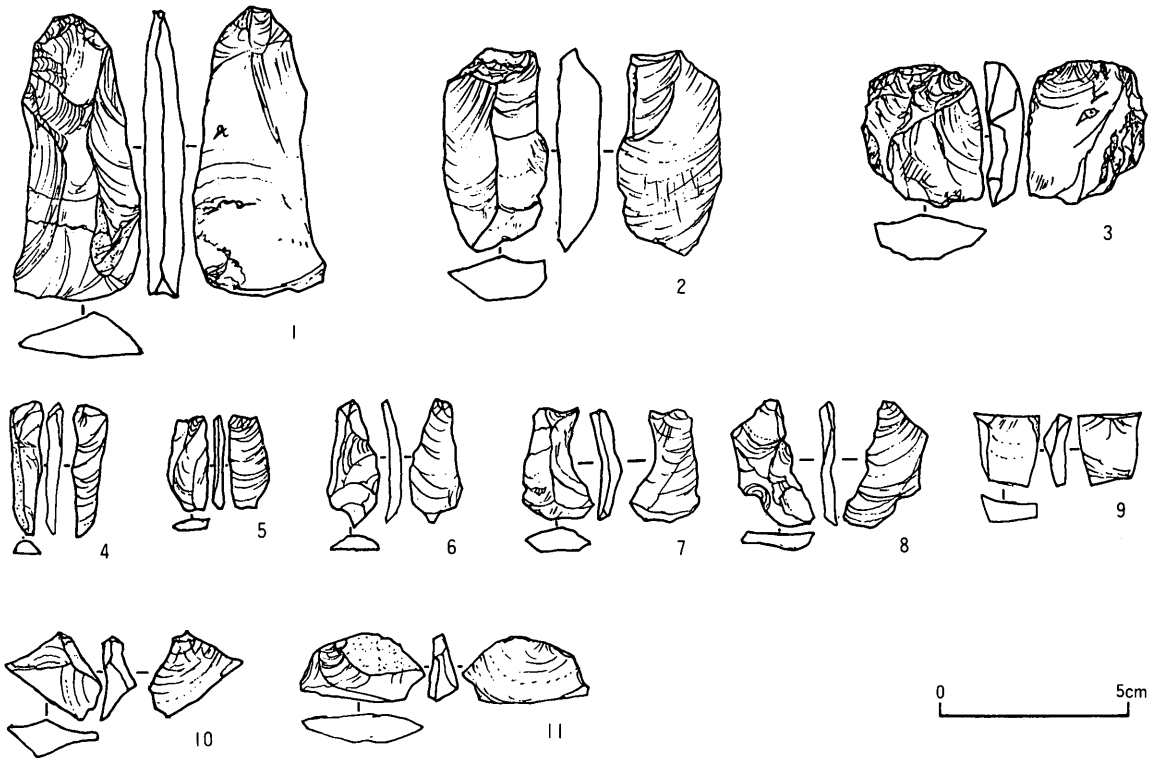
第7図 調査地域における周知の遺跡—3（「下諏訪町の埋蔵文化財」より）



1～16は第I地点、17～28は第II地点



第8図 和田峠遺跡出土遺物 (1/2)



第9図 古峠口遺跡採集遺物 (1/2)

藤森 栄一・中村龍雄 1962「星ヶ塔黒曜石採掘址」『古代学』11-1

藤森 栄一 1963「原始時代」『下諏訪町誌』上巻

中村 龍雄 1977『黒曜石』上巻

5 星ヶ塔のりこし遺跡 (第3図・第10図)

星ヶ塔と鷲ヶ峰との鞍部の、のりこし峠といわれている場所に位置する。縄文時代の黒曜石採掘址が発見されている場所に隣接した場所である。1982年、星ヶ塔林道建設に伴って緊急発掘調査が行なわれ、尖頭器、石刃、石核など多量の旧石器時代遺物が出土した。黒曜石原産地に密着した文字通りの原産地遺跡である。

文献 中村 龍雄 1983『星ヶ塔のりこし遺跡』下諏訪町教育委員会

6 星ヶ塔中央部遺跡 (第3図)

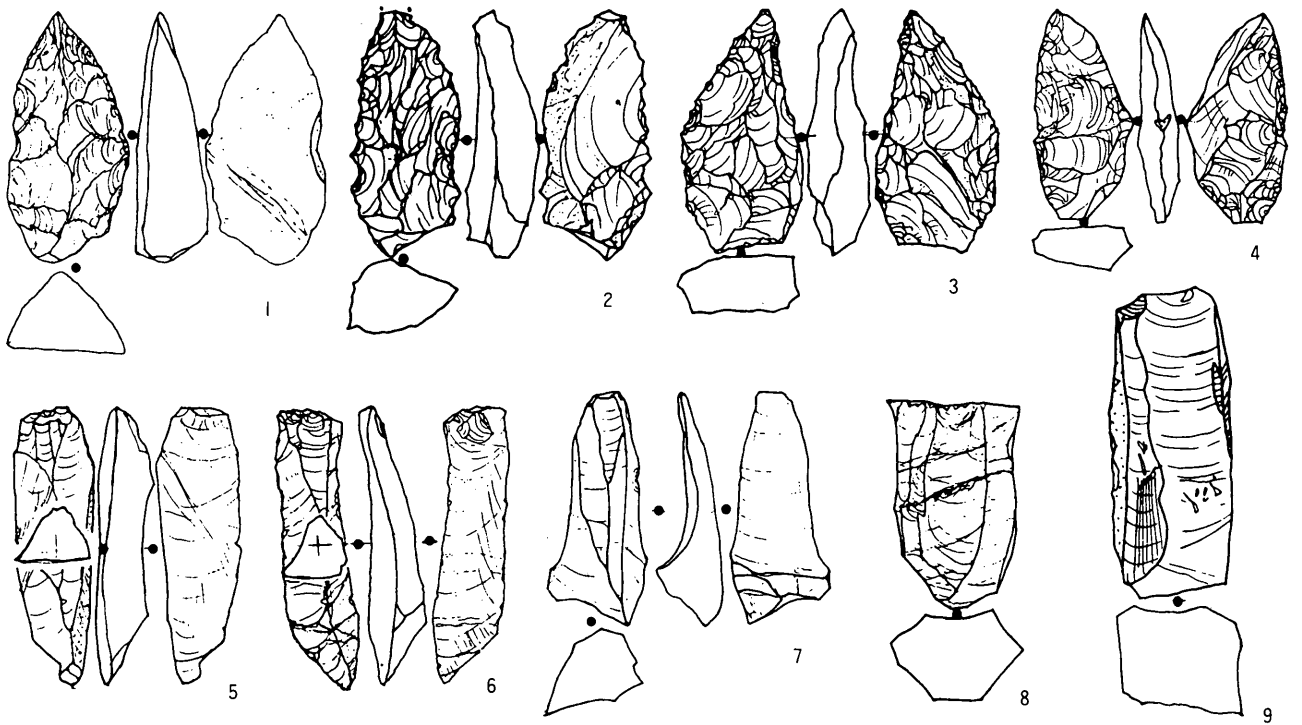
星ヶ塔山の北側斜面で、黒曜石採掘址が認識されているという記述があるが、詳細は不明である。

7 星ヶ塔南西部遺跡 (第3図)

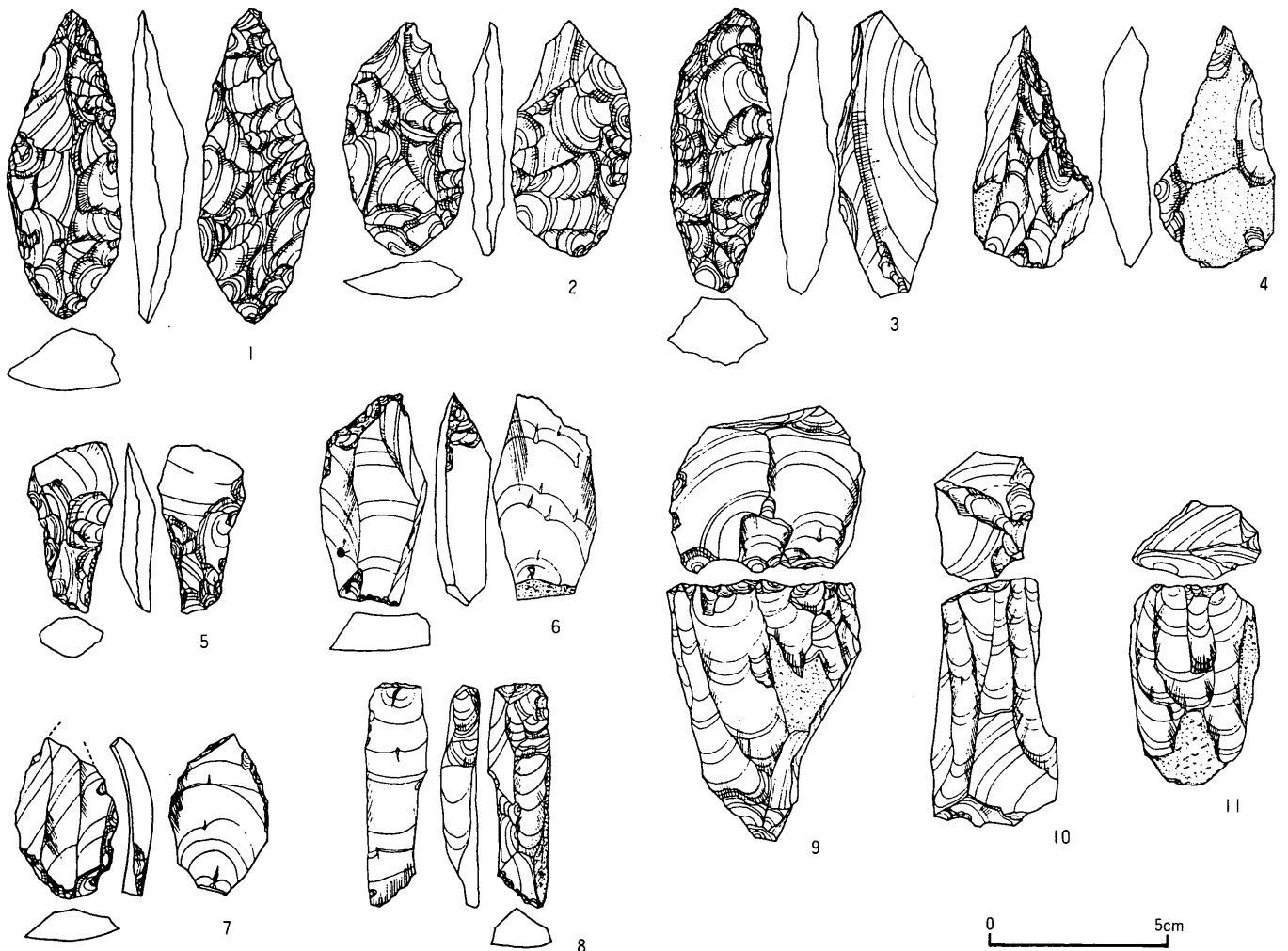
星ヶ塔山の南側斜面に黒曜石が分布しており、遺跡の存在が推定されているが、詳細は不明である。

8 丁子沢遺跡 (第3図・第11図)

鷲ヶ峰の山麓部から流下する丁子沢と、和田峠から流下する砥川とが合流する地点を望む地点に立地する。1963・1964・1966年に発掘調査が行なわれ、旧石器時代の尖頭器・剝片・石核などが多量に出土している。



第10図 星ヶ塔のりこし遺跡出土遺物 (1/2)



第11図 丁子沢遺跡出土遺物 (1/2)

文 献 中村 龍雄 1977『黒曜石』上巻

10 焙 烙 遺 跡 (第3図・第12図)

砥川と焙烙側の合流点に面する小盆地状の場所に立地する。1975年、国道拡張に伴い発掘調査が行なわれ、縄文時代早期から中期の以降、遺物が多数出土した。その後、1998年には国道改良工事に伴い町教委による発掘調査が行なわれた。旧石器時代の石器集中が6ヶ所検出され、尖頭器を主体とする石器群・石刃を主体とする石器群・ナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。縄文時代では、早期の押型文期に属する土坑が4基検出された。

文 献 下諏訪町教育委員会 1998『焙烙遺跡』

12 浪人塚下遺跡 (第3図・第13図)

砥川と砥沢川との合流点に面する台地上に立地する。1974年、国道改修工事に伴い発掘調査が行なわれた。旧石器時代の石器集中ブロックが3ヶ所検出され、尖頭器・ナイフ形石器を中心に多量の石器が出土している。縄文時代では、早期の土坑が15基検出されている。

文 献 藤森 栄一 1963「原始時代」『下諏訪町誌』上巻

下諏訪町教育委員会 1975『浪人塚下遺跡』

会田 進・高見 俊樹 1983「浪人塚下遺跡」『長野県史考古資料編』1-3

13 センノウ遺跡 (第3図)

浪人塚下遺跡からみて、砥沢をはさんだ対岸の山麓に立地する。縄文時代早期・前期・中期の遺物が採集されている。

文 献 藤森 栄一 1963「原始時代」『下諏訪町誌』上巻

14 深 沢 遺 跡 (第5図)

樋橋区の南側、砥川左岸の山麓斜面に立地する。開墾の際に石剣が出土しており、縄文時代の遺跡として登録されている。

15 旧御射山遺跡 (第4図・第14図)

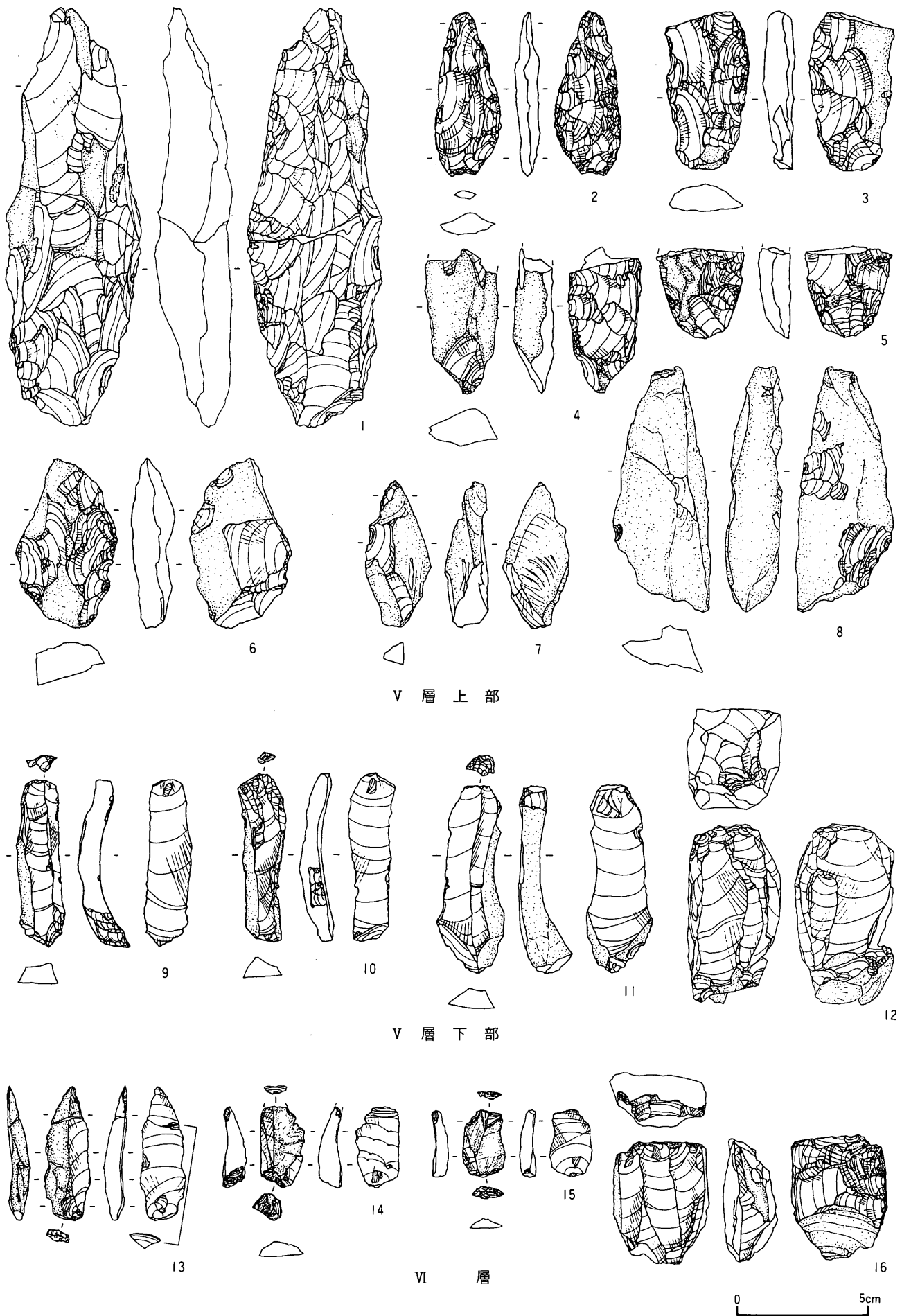
大部分が諏訪市に属しており、下諏訪町には北側の一部が属する。中世の祭祀遺跡として有名な遺跡である。諏訪市域で1959～1960年に早稲田大学主催の発掘調査が行なわれている。下諏訪町側では、1989年に山小屋の改築に伴う発掘調査が行なわれている。これらの調査では、旧石器時代、縄文時代の遺物が出土している。

文 献 金井 典美 1983「旧御射山遺跡」『長野県史考古資料編』1-3

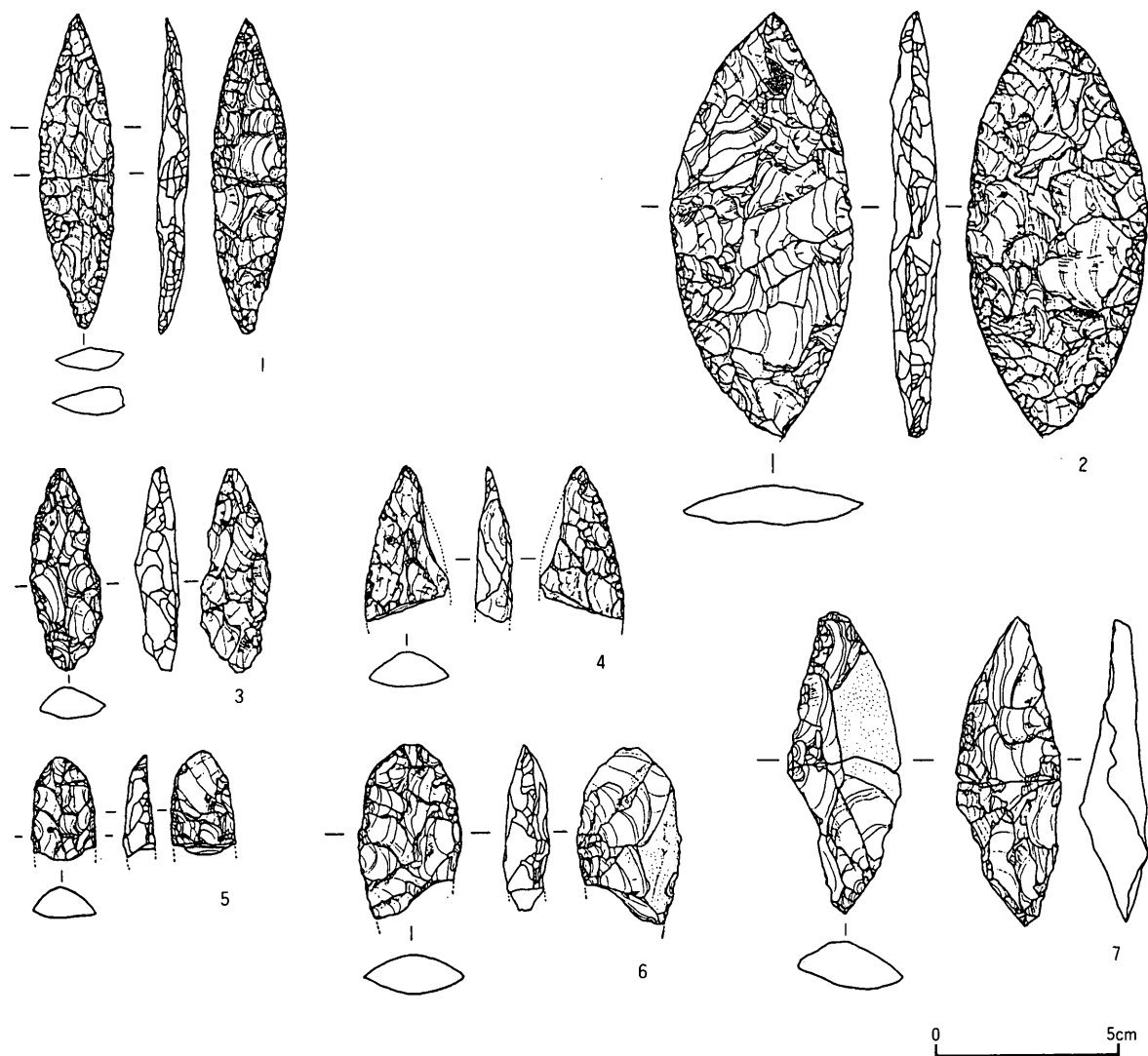
下諏訪町教育委員会 1989『旧御射山遺跡』

16 八島ヶ池つつじヶ丘遺跡 (第4図・第15図)

八島ヶ原湿原南西の丘陵に立地する。山小屋建設の際に黒曜石製の剝片などが出土しており、旧石器時代の遺跡として登録されている。



第12図 焙烙遺跡出土遺物 (1/2)



第13図 浪人塚下遺跡出土遺物 (1/2)

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

17 観音沢遺跡 (第4図)

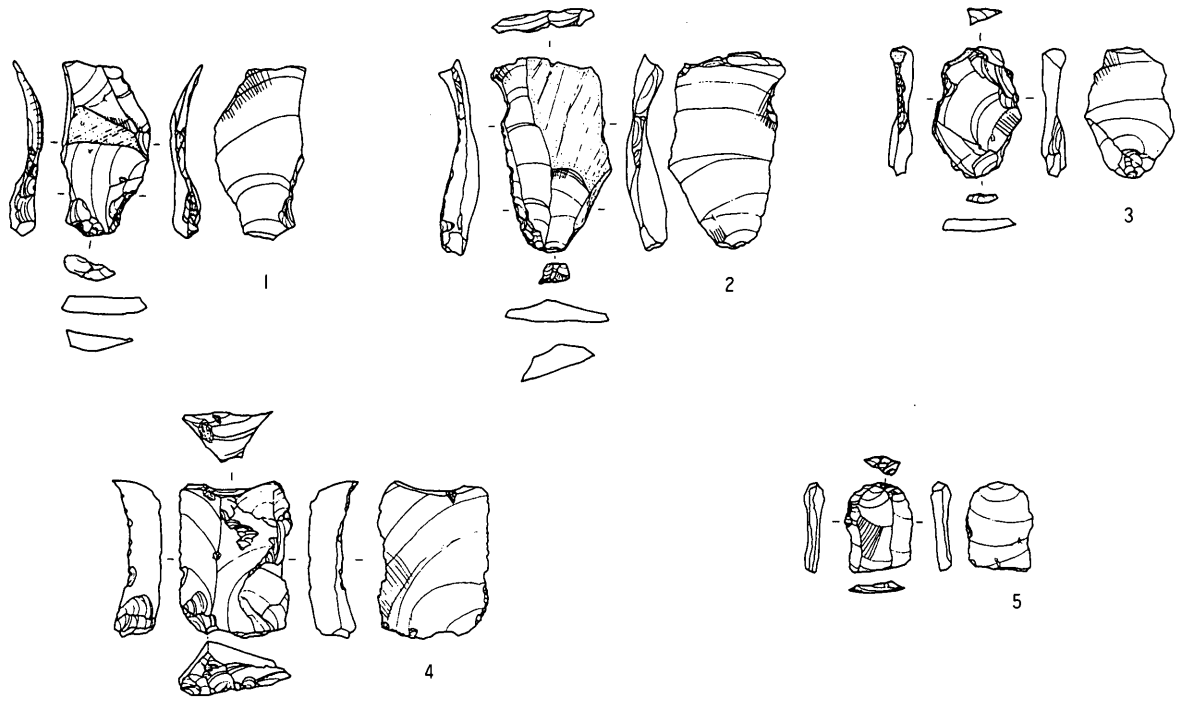
八島ヶ原湿原を水源とする観音沢の左岸に立地する。1983・1984年、観音沢林道延長工事に伴い、黒曜石の分布調査が行なわれ、黒曜石原石が分布することが確認されている。剥片などが採集され、旧石器時代の遺跡として登録されている。

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

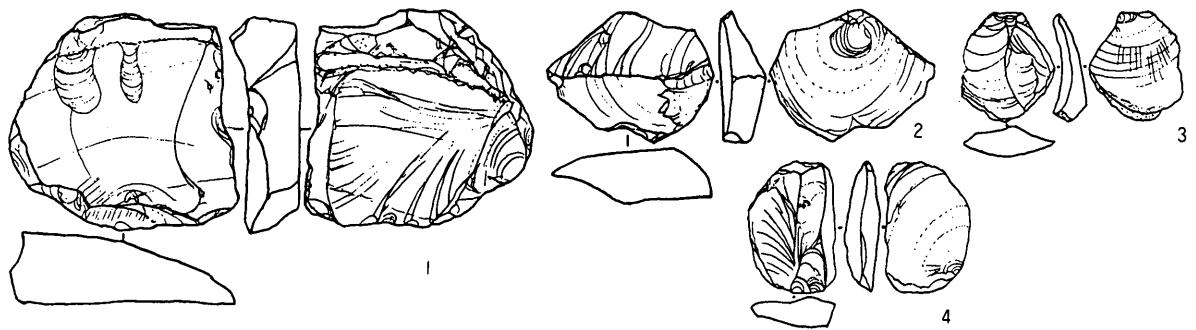
18 観音沢上限遺跡 (第4図・第16図)

八島ヶ池つつじヶ丘遺跡のある丘陵の、南側に広がる平原に立地する。剥片などが採集されており、旧石器時代の遺跡として登録されている。

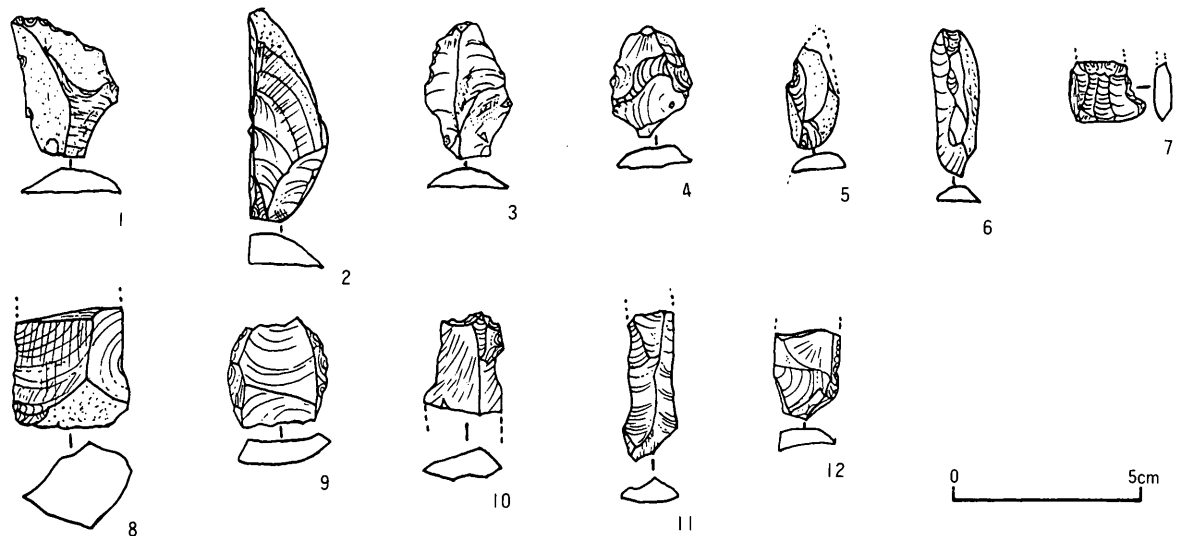
文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻



第14図 旧御射山遺跡出土遺物 (1/2)



第15図 八島ヶ池つつじヶ丘遺跡採集遺物 (1/2)



第16図 観音沢上限遺跡採集遺物 (1/2)

19 星ヶ台遺跡 (第4図)

八島ヶ原湿原の南西、県道八島高原線沿いに夥しい黒曜石が露出している場所があり、旧石器時代から縄文時代の遺跡として登録されている。道路建設の際に土器の胴部破片が出土したといわれており、また、昭和58年度から60年度の遺跡詳細分布調査の際に、縄文時代前期の諸磯C式土器と敲石が採集されている。

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

20 大平遺跡 (第4図)

東俣川と合倉沢との合流点を望む山麓に立地する。剥片などが採集されており、縄文時代の遺跡として登録されている。

21 鍵掛沢遺跡 (第4図・第17図)

東俣川左岸の、鍵掛沢が合流する地点に立地する。1963年からの開墾の際に遺物が出土し、遺跡として登録された。出土遺物は、旧石器時代に属すると思われる黒曜石製の大型の尖頭器、縄文時代中期・後期・晩期の土器、晩期の耳栓などがある。

文献 中村 龍雄 1966「長野県諏訪郡下諏訪町東俣溪谷遺跡」『信濃』18-10

22 野田ヶ沢遺跡 (第4図・第18図)

東俣川右岸の山麓斜面に立地している。1965年、開墾により遺物が出土したことを機に、中村龍雄氏が発掘調査を実施し、縄文時代前期末～中期初頭の竪穴住居址が検出された。この調査では97点の該期土器片、11点の石器、92点の黒曜石片が出土したと報告されている。

文献 中村 龍雄 1966「長野県諏訪郡下諏訪町東俣溪谷遺跡」『信濃』18-10

23 瘤沢遺跡 (第5図・第19図)

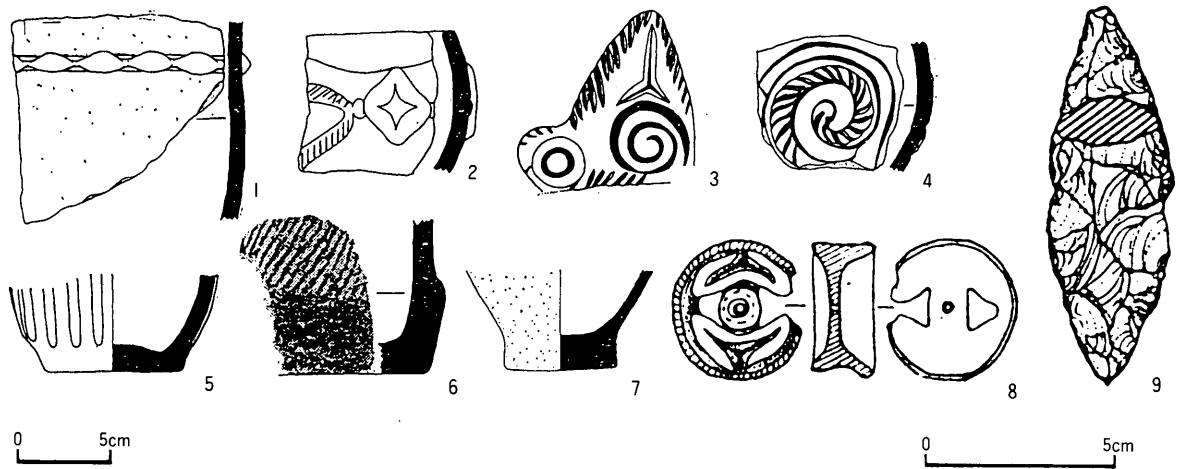
東俣川右岸の、瘤沢と東俣川が合流する地点をのぞむ、段丘上に立地する。大正時代に鳥居龍蔵氏らが諏訪史第一巻の調査で訪れており、その後諏訪考古学研究所による調査が行われているが、両調査とも詳細は明らかではない。下諏訪町誌には、諏訪考古学研究所所蔵の、本遺跡から出土した縄文時代前期末～中期初頭の土器が掲載されている。

文献 鳥居 龍蔵 1924『諏訪史第一巻』
藤森 栄一 1963「原始時代」『下諏訪町誌』上巻
中村 龍雄 1966「長野県諏訪郡下諏訪町東俣溪谷遺跡」『信濃』18-10

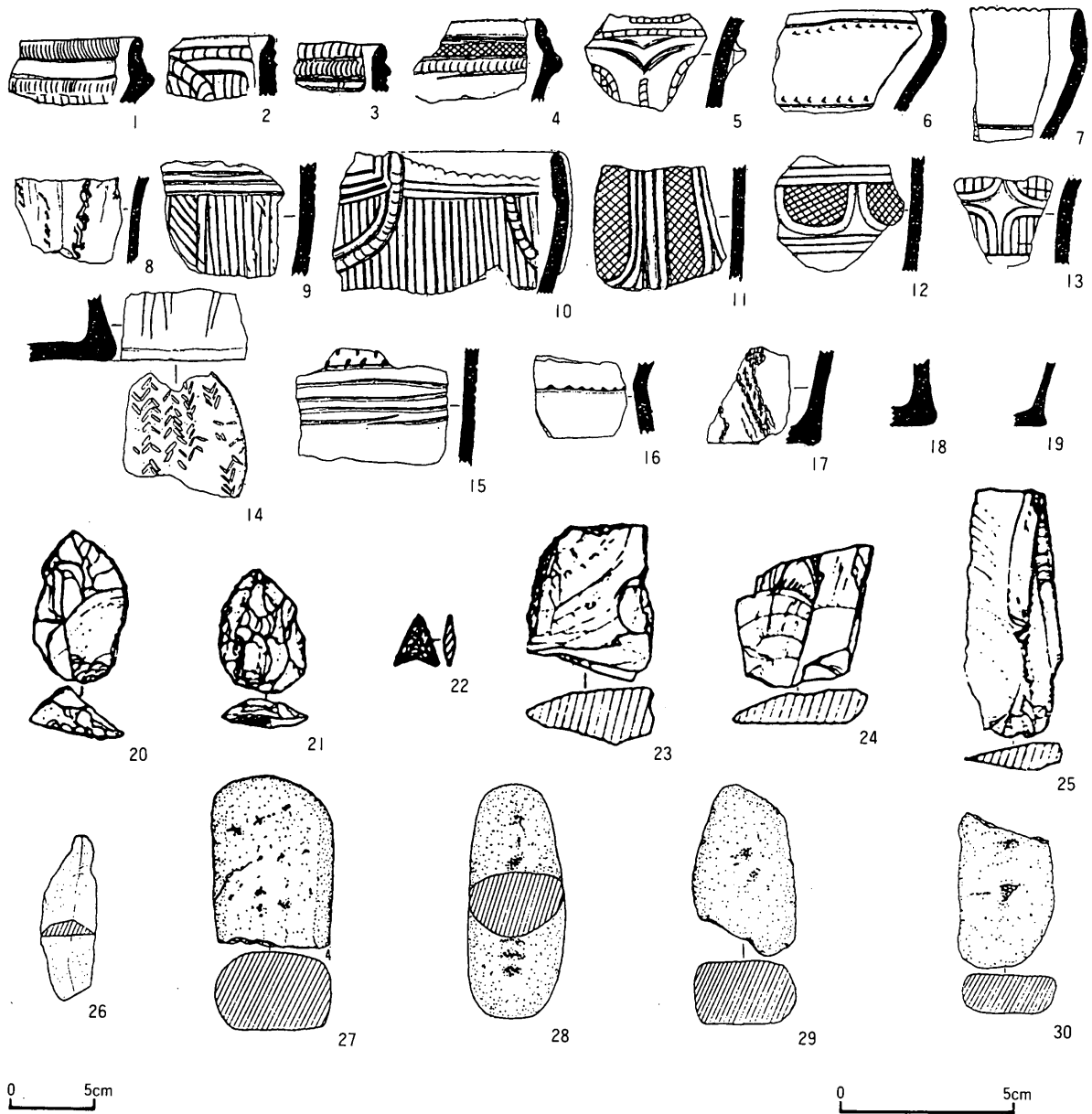
24 東俣大鹿遺跡 (第4図)

東俣川左岸側の山中に、大鹿と呼ばれる場所があり、開墾時に土器が出土したという記述がある。縄文時代の遺跡として登録されている。

文献 中村 龍雄 1966「長野県諏訪郡下諏訪町東俣溪谷遺跡」『信濃』18-10



第17図 鍵掛沢遺跡出土遺物 (1~7=1/4、8・9=1/2)



第18図 野田ヶ沢遺跡出土遺物 (1~19・26~30=1/4、20~25=1/2)



第19図 瘤沢遺跡出土遺物

25 シシバ岩遺跡 (第5図)

東俣川が砥川に合流する手前の右岸側、河岸段丘が東俣川に張り出している場所に立地する。多数の石鏃などが採集されており、縄文時代の遺跡として登録されている。なお、本遺跡の周辺では、白色の砂層から、拳大以下の黒曜石が産出するという記述がある。

文献 中村 龍雄 1978『黒曜石』下巻

26 クツウチ遺跡 (第5図)

東俣川と砥川の合流点に向かって北東からのびる尾根の先端に立地する。縄文時代の遺跡として登録されているが、出土遺物などは不明である。

27 菰川平遺跡 (第5図)

東俣川と砥川の合流点の、東南側の台地上に立地する。地形の状況から遺跡の存在が推定され、縄文時代の遺跡として登録されているが、出土遺物などは不明である。

28 平ヶ沢遺跡 (第5図)

東俣川左岸の段丘上に立地する。縄文時代の遺跡として登録されているが、出土遺物などは不明である。

29 ヤセヲ遺跡 (第5図)

東俣川左岸の沢が合流する地点に立地する。縄文時代の遺跡として登録されているが、出土遺物などは不明である。

30 川向う通り遺跡 (第5図)

東俣川左岸の沢との合流点で、川に向かって張り出したやや開けた地形に立地する。1984年に整地された際に、縄文前期の土器片や黒曜石片が採集されている。

31 町屋敷遺跡（第5図）

砥川左岸の山麓斜面に立地する。送電線鉄塔建設の際に土器片や石鏃が出土したという記述があり、縄文時代の遺跡として登録されている。

III 黒曜石の分布調査

今回の黒曜石原産地遺跡詳細分布調査では、遺跡の分布を調べるとともに、黒曜石の分布についても調査を行なっている（第20図）。ここでは、これまでの調査で黒曜石を採取することができた地点について、地点ごと記述する。東俣遺跡と星ヶ塔の黒曜石については各遺跡の報告に記述する。なお、この黒曜石分布調査の内容については、県教育委員会の調査に同行した際の成果を含んでいる。

1 砥川林道地点（第21図・写真78）

砥川林道地点については、平成6年度に第1回の踏査を行い、林道の法面に露出している黒曜石を採集し、平成9年度に第2回の調査を行い、黒曜石の採取できる範囲を確認した。

黒曜石は、砥川林道の最終地点一帯の山側の切り通し面で採取されることが確認され、流紋岩や安山岩の転石が見られるところで採取できることがわかった。また、砥川と丁子沢の合流点で、河床の黒曜石を採取した。

林道沿いの山側の切り通し面で採取された黒曜石は、石器石材として手頃な大きさのものが多く、形状は角のある角礫である。表面はざらざらした表皮に覆われている。この地点は星ヶ塔の山裾にあたり、星ヶ塔からの転石とみてよいだろう。

砥川と丁子沢の合流点における河床転石は、角が取れた亜円礫とでもいうべきものである。1 cm 大のものから5 cm 大の大きさのものが多く、全体として小ぶりである。丁子沢ではかつては人頭大程度のものが多数採取されたという情報もあるが、現在は小ぶりなものがほとんどである。なお、丁子沢には以前の工業用の採掘坑からこぼれた黒曜石が流れ込んでいると考えられ、かならずしも自然の状態ではないので注意が必要である。

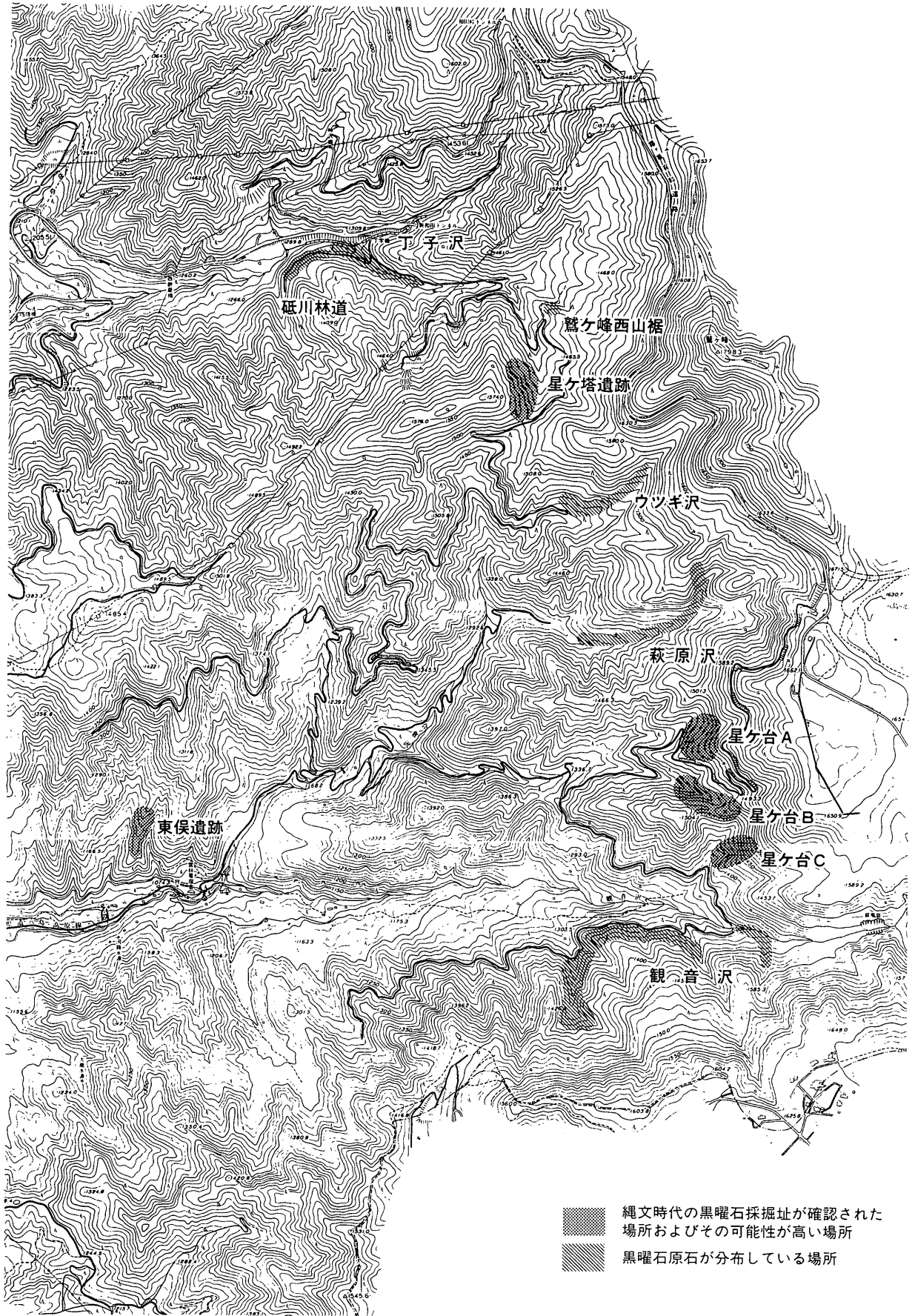
2 鷲ヶ峰西山裾（第21図）

平成9年度の踏査で確認した地点である。鷲ヶ峰西側の山裾にあたる、星ヶ塔林道沿いを中心に黒曜石を採取している。切り通し面に露出している黒曜石は、総じて小ぶりの粒状であり、石器石材に適する大きさのものは少ない。なお、赤い縞が入る黒曜石が多いのが特徴である。

3 ウツギ沢（第21図・写真80）

平成10年度の踏査で確認し、平成11年度、県教委の調査に同行し黒曜石の拡がり把握した。鷲ヶ峰の西南の山裾に位置する。この地点については、これまで黒曜石が採取できる場所として文献で紹介されたことはないようである。「ウツギ沢」という名称は、合倉沢の支流であるウツギ沢の中流にあたる場所であることから名付けた。

この地点では、星ヶ塔林道の切り通し、ウツギ沢の河床、ウツギ沢北側の山裾の表土層や、露出している白色土層で黒曜石が採取できる。黒曜石は1 cm 大から10 cm 大の大きさのものが多く、白色土層から出土するものの中には、小児頭大の大形のものもある。形状は角礫から亜角礫である。石器の石



第20図 黒曜石分布調査地点 (1/25,000)

材として十分な大きさである。

この地点の黒曜石の特徴であるが、無色透明という点では星ヶ塔や星ヶ台・観音沢のものと一致するが、それらにはほとんど見られない、点状の不純物を多く含む（写真80の上2段）。質感とすれば、男女倉方面の黒曜石に似た感じである。肉眼による判定ではおそらく霧ヶ峰産と判断されないであろう。ただし、この地点のすべてのものが不純物を含むものというわけではなく、黒曜石の分布している上限付近の転石は、不純物を含まない良質の黒曜石で占められる（写真80の下2段）。場所により、質の異なる黒曜石が存在するようである。

この地点の不純物を多く含む黒曜石が、石器石材として利用されているかどうかということであるが、手ごろな大きさのものが多くあり、試しに割ってみたが、剥片剥離もし易い。石器石材として十分なものと考えられる。ちなみに、肉眼観察ではあるが、ウツギ沢産の黒曜石を石材としていると考えられる大形の石核を、平成10年度の焙烙地域の踏査で採集している。ウツギ沢産の黒曜石が石器石材として出回っている可能性は十分に考えられる。ただし、質感が男女倉方面のものに似ており、肉眼判定では霧ヶ峰産と判断されていないことも予想される。なお、ウツギ沢の黒曜石を分析した藁科哲夫氏のご教示によれば、ウツギ沢産の黒曜石の元素組成は、「和田峠第5・第6群」と似ており、「霧ヶ峰群」とは区別されるようである。和田峠産と判定される黒曜石が、必ずしも和田峠で採取されたものではないという可能性があるということは、黒曜石の産地推定の結果が、ただちに採取場所を限定するものとは限らないことを示している。信州産という大きな枠組みの中ではさほどの問題にはならないが、霧ヶ峰産の黒曜石と和田峠産の黒曜石が伴出しているといった場合、星ヶ塔と、近接するウツギ沢で採取したものである可能性がでてくる。とすると、距離の離れた複数箇所での採取ではなく、より狭い範囲内で黒曜石を採取していたということになり、石材採取活動の範囲、あるいは石材の搬出方向などに関して微妙な問題を生ずることになる。今後の課題として以上の点を指摘しておきたい。

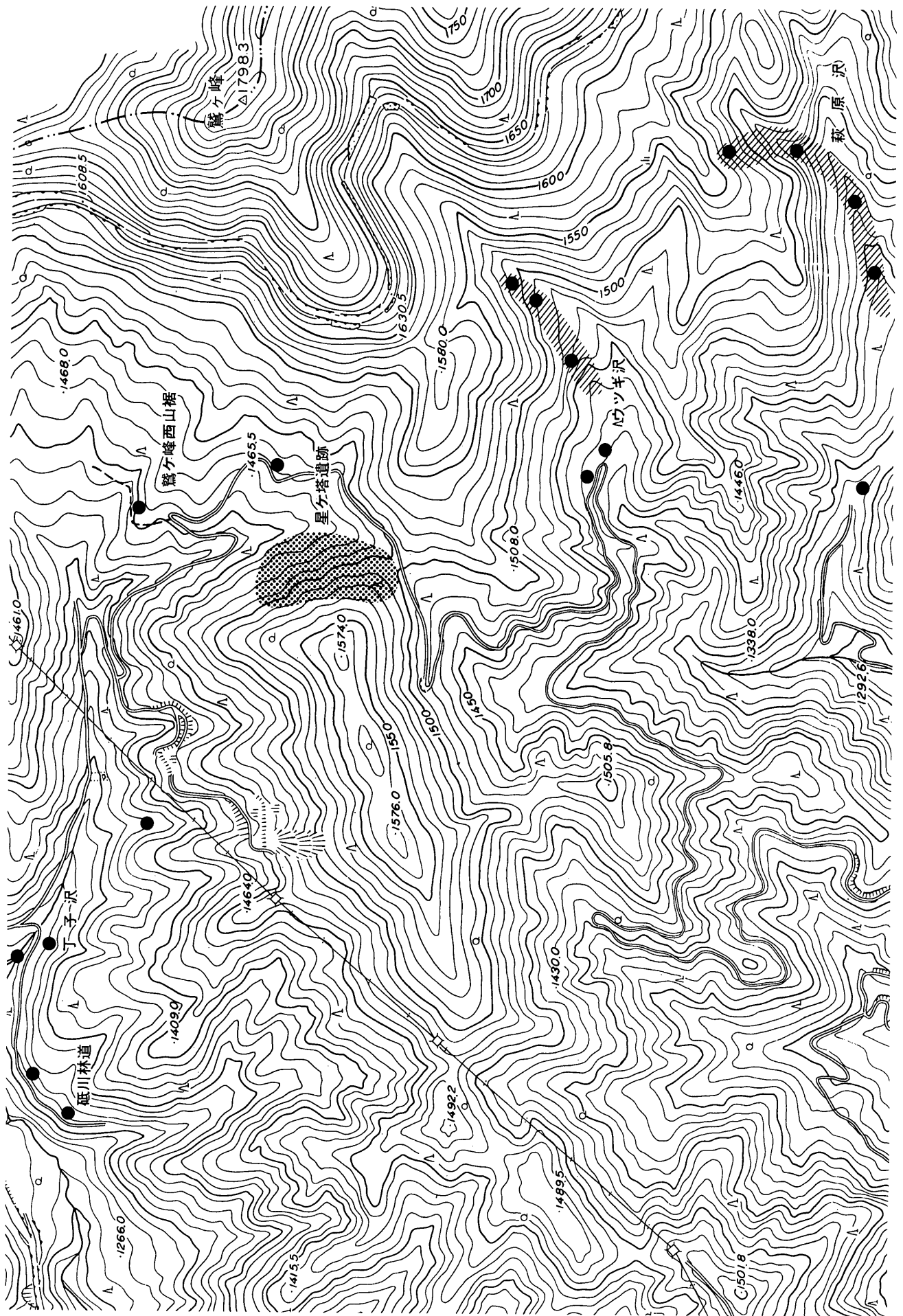
この地点では遺物の採集はないが、星ヶ塔に近接する場所で多量の黒曜石が得られるということを検討すると、黒曜石採掘址が存在する可能性もあろう。今後さらに調査をすすめてゆく予定である。

4 萩原沢（第21図・写真81）

平成10年度の調査で、八島ヶ原湿原の西端側から流下する萩原沢の中流域を踏査し、萩原沢の河床、沢周辺の山林の表土層で黒曜石を採取した。この時点で採取された黒曜石は、1～3 cm程度の小粒のものであり、量的にも少量であった。しかし、この黒曜石の採取が、より上流に転石の供給源があることを予測させ、翌11年、県教委の調査に同行し、予測どおり上流域で夥しい量の黒曜石が分布する場所を確認した。

萩原沢では、上流に上るにしたがい転石の大きさが大きくなり、上流の、転石供給源に近いとみられる支流の沢筋では、小粒のものから10cmを超える大形のものが採取できる。質的には、不純物を含まない良質なもの（写真81上段）と、不純物を多く含むものの両者がある（写真81下段）。こうした傾向は、ウツギ沢と似ている。

転石供給源に近い沢筋で、敲石を1点採集しており、石器時代の人がこの場所に訪れていたことが推測される。一帯は密集する笹に覆われており、地形を細かく観察することはできないが、多量の黒曜石が得られるという条件からすれば、黒曜石採掘址が存在する可能性もある。



第21図 黒曜石採取地点一 (1/10,000)

5 星ヶ台A・B・C地点 (第22図・写真82、83、84)

県道八島高原線を八島ヶ原湿原に向かって上って行くと、道路の切り通しに夥しい量の黒曜石が露出している場所がある。ここでは黒曜石の分布範囲が、沢を挟んで北側の尾根と南側の尾根に区分できることから、北側をA地点、南側をB地点と呼び区別している。そして、平成10年度、県教委の調査に同行した際、B地点の南側の尾根や沢筋でも黒曜石の濃密な分布が認められたことから、この地点をC地点と呼ぶことにした。

A・B地点とも地表面に夥しい量の黒曜石が分布しており、小ぶりの転石がほとんどであるという点で共通する。しかし、B地点のものは灰色がかった縞が多く入り、質があまりよくないという感じを受け(写真83)、A地点(写真82)と異なるように思われる。そしてA・B地点とも地表面にクレーター状の凹みが群在しており、縄文時代の黒曜石採掘址の可能性が高い。あるいは、両地点の黒曜石が小粒であるということと、採掘址であるということに関係があるかもしれない。

本地点については、まだ本格的な調査を行っていないが、今後詳細な調査を実施する予定である。C地点も、A・B地点同様、地表面に夥しい量の黒曜石があるが、ここではそれらの黒曜石の供給源とみられる地層を確認することができた。それは、尾根の斜面の裾が沢で扶られた場所に露出している白色粘土層であり、その白色粘土層中に黒曜石が含まれていることがわかった(写真75、76)。

C地点の黒曜石は、不純物を含まない良質なもので、無色透明か、白い縞が入り全体が灰色に見えるものが多い。大きさは、小粒のものから幼児頭大程度のかかなり大きなものまで様々である(写真84)。ただ、大きなものも節理面で割れるものが多い。また、量的には少ないようであるが、不純物を多く含み、少し力を加えるとグシャグシャに割れるものもある。

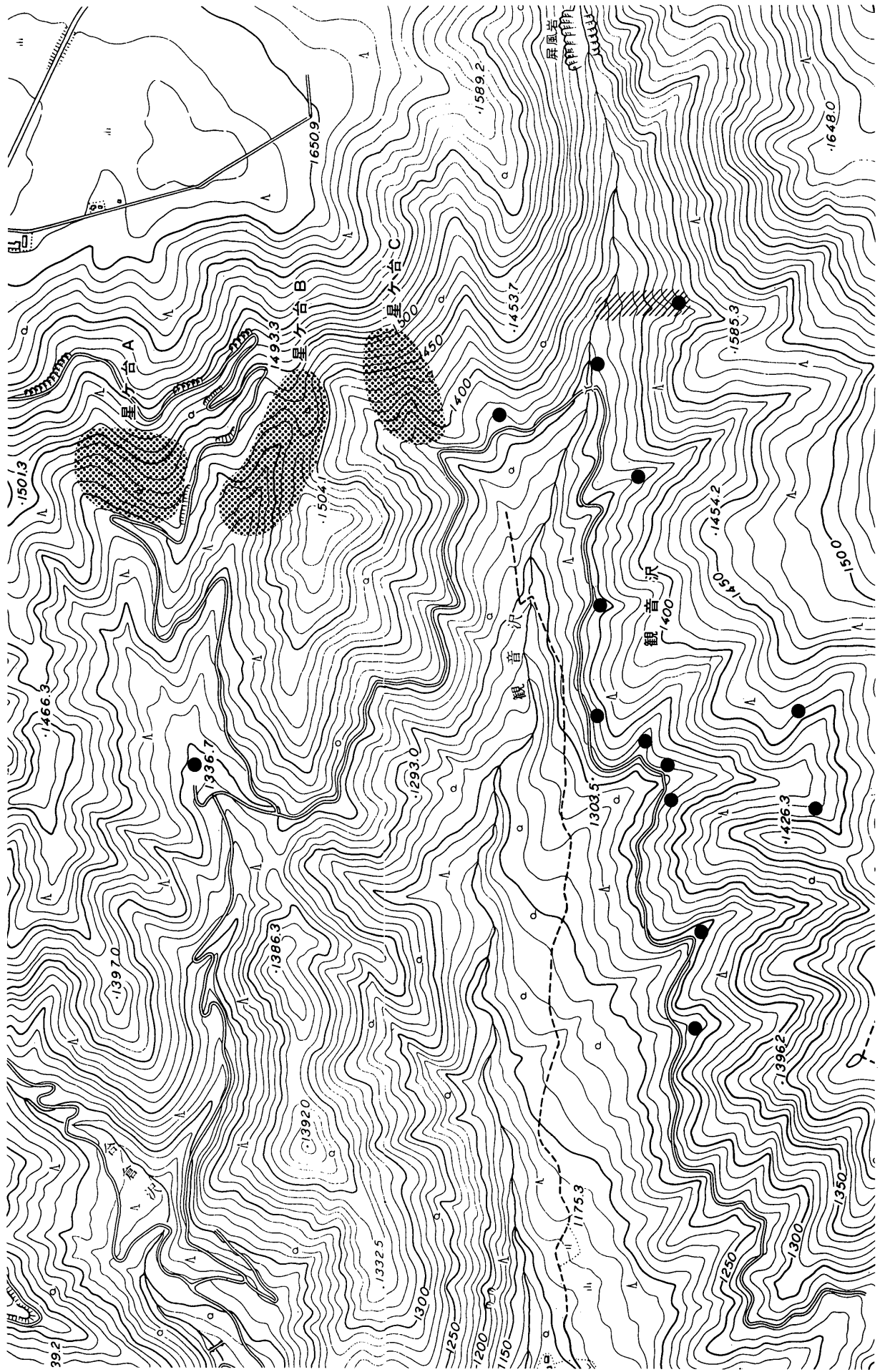
10年度の調査では、沢に挟まれた狭い尾根上の地表面に、転石とともに多量の石器が散乱していることを確認した。石器や、転石の分布範囲はかなり広い。これまで、尖頭器1点、ピエスエスキューユ6点、石核6点、剥片47点を採集している。剥片の中には尖頭器の調整剥片と考えられるものもある。

こうした遺物から、すくなくとも旧石器時代の尖頭器文化以降、この場所が黒曜石採取の場所として利用されていたと同時に、石器製作の場所としても利用されていたと推測することができよう。

ところで、遺物の散乱している尾根は、不自然な階段状の地形となっている。こうした地形はA・B地点も共通するが、縄文時代の黒曜石採掘遺跡である東俣遺跡や星ヶ塔遺跡とも共通しており、C地点も縄文時代の黒曜石採掘遺跡である可能性が高い。

6 観音沢〈観音橋上流左岸〉(第22図・写真77、85上1段)

観音沢にかかる観音橋からやや上流へ上った左岸側に、強清水方面から観音沢に流れ込む沢があり、その沢の河床や沢の周辺で黒曜石を採取することができる(写真77)。1 cm大の小粒のものから5 cm程度のやや大きいものがある。ほとんどが無色透明のもので、不純物を含まず良質である。天然ガラスの典型ともいべき質感である。形状は、稜が鋭くない亜角礫や、より丸みを帯びた亜円礫である。この地点のものは表面がツルツルしており、ザラつく表皮をもつものはあまりないようである。



第22図 黒曜石採取地点一 2 (1/10,000)

7 観音沢〈観音沢林道沿線〉(第22図・写真85下2段)

観音沢にかかる観音橋よりやや下流の左岸、観音沢へ注ぐ沢やその周辺、及び林道の切り通しに黒曜石が露出している。1 cm 大から6 cm 大のものが採集されている。場所によって大きさに偏りがあり、大きいものがまとまっている地点もある。質も場所によって少し異なるようである。無色透明のものが多く、ほかに黒色や赤褐色の縞が入るもの、黒色不透明のものなどが混在する地点、赤褐色の縞が入るものが多く、無色透明のものは少ない地点、ほとんどが無色透明のものである地点などに区分される。

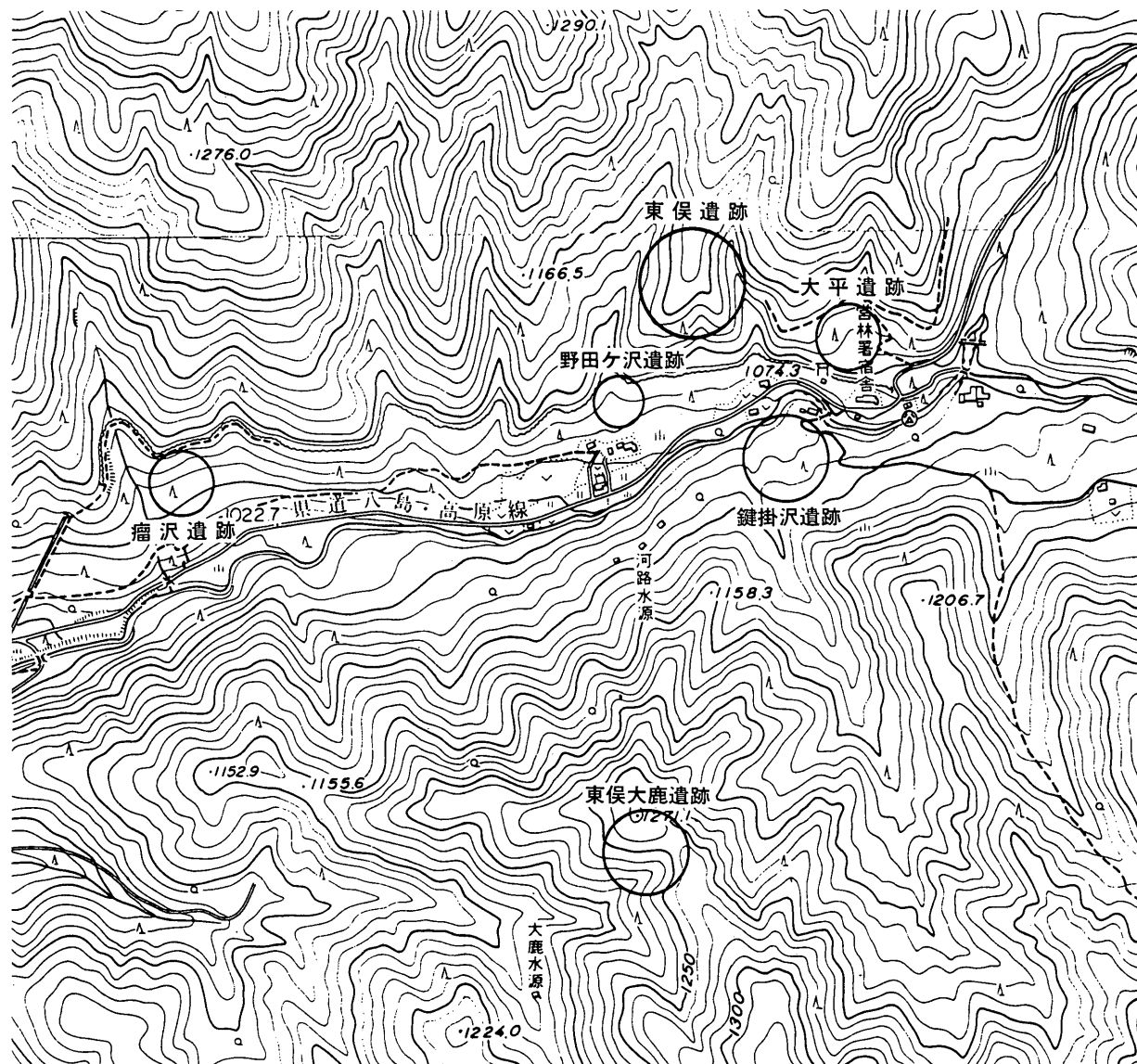
全体としてこの地域のものは不純物をほとんど含まず、手頃な大きさであれば石器製作に適している。

IV 東俣遺跡の調査

1 遺跡の位置

東俣遺跡は、下諏訪町東俣大平地籍の西側の山林に所在し、北方の山塊から東俣川に向かって南北にのびる、細長い尾根の先端に位置する。標高は約1,150mである。この尾根の東西は、深い谷になっており、遺跡のある尾根上との比高差は20~30mである。また、尾根の先端も浅い谷に刻まれており、先端が二又に分かれるような地形となっている。

平成5年からの調査では、この場所で黒曜石採掘遺跡を発見したが、本調査以前にはまったく知られていなかった遺跡のようであり、この遺跡のことを記した文献は見当たらないことから、新発見の遺跡ということになる。今回発見された黒曜石採掘遺跡は、この細長い馬の背状の尾根の、背にあたる部分



第23図 東俣遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/10,000)

から東西の斜面にかけて存在している。現在、南北約120m、東西約40mの範囲で採掘址を示す「凹み」を確認している。

2 周辺の遺跡

大平地区周辺では、東俣川をのぞむ山裾の緩斜面に遺跡が集中している（第23図）。各遺跡の内容についてはII章で触れているが、野田ヶ沢遺跡と瘤沢遺跡は、縄文時代前期末葉から中期初頭の遺跡であり、東俣遺跡との関わりが予想される。また、大平遺跡では、平成5年度の調査で、わずかではあるが諸磯c式土器が出土しており、東俣遺跡と関わっている可能性が高い。このようなことから、東俣遺跡は山中の孤立した遺跡ではなく、周囲の小規模遺跡と関わりをもって存在していたと考えることができそうである。

3 調査の経過

東俣遺跡は、平成5年度の分布調査で発見し、6・7年度および12年度に遺跡の範囲確認、試掘調査を行っている。

まず、遺跡の発見の経過について記しておきたい。平成5年10月20日、われわれは大平の営林署宿舍裏側の平坦な山裾で試掘調査を行っていたが、その昼休み、調査に参加していた（故）吉澤幸人氏が、調査地点の西側の沢で大きな黒曜石の原石を採集してきた。おそらく沢を転落してきたものであり、沢の上流にその供給源である原産地があるものと予測し、さっそく沢を登ったところ、沢の西側の尾根を取り巻くように作業用道路があることがわかり、それを登り始めた。すると、地表に黒曜石が散らばっており、この場所から黒曜石が転落したと思われた。翌日、この場所の調査にとりかかり、道路の切り通しを精査したところ、掘り込みと見られる土層の落ち込みが検出され、さらにそれが、地表の凹みと対応することがわかった。本報告の1号凹みがそれである。黒曜石の散乱、地表の凹み、それに対応する土層の落ち込み。こうした状況が、長門町星糞峠の黒曜石採掘址と酷似することから、この場所が黒曜石採掘遺跡であると予測し、さらに調査を続けることになった。

以上が、発見の経過である。もし、吉澤氏が黒曜石を見つけなければ、東俣遺跡は発見されることはなかったであろう。このあたりに黒曜石の採取できる場所があるということは知られていなかったからであり、まさか黒曜石採掘遺跡があるなどとは予想していなかったからである。東俣遺跡の発見は、黒曜石採掘遺跡の発見という大きな意義があるが、意外な場所に未知の遺跡があることを知らしめたということで、分布調査をはじめたばかりのわれわれにとって、先入観を払拭させる大きな意義をもつ発見であった。

さて、5年度の調査では草刈りを行った後の地表面の観察により、

- ① この尾根に黒曜石原石が分布すること。
- ② クレーター状の凹みが群在することがわかり、林道の法面に現われていた凹みの断面の観察から、
- ③ 凹みが深い掘り込みを伴うことが明らかになった。

これらの状況が、長門町鷹山星糞峠にある、縄文時代の黒曜石採掘遺跡の状況と良く似ていることから、この場所が黒曜石採掘遺跡であるという仮説を立てた。

6年度は、徹底した草刈りと、凹みからやや離れた場所でトレンチ調査を行ない、

- ④ 凹みのない斜面にも複数の重複する掘り込みが存在すること、
- ⑤ 炭化物を多量に包含する層群が存在すること、
- ⑥ 黒曜石製の剥片や石核、安山岩製の凹石が掘り込みの覆土中から出土することから、
- ⑦ 本遺跡が縄文時代の遺跡であることがわかった。

7年度は、6年度のトレンチを延長し、

- ⑧ 地表下1.5mから2m程度の深さにある、白色粘土が混じるローム質土層に黒曜石原石が包含されていること、
- ⑨ 採掘坑と考えられる掘り込みが、この白色粘土が混じるローム土層を掘り抜いていることが観察された。

以上の5～7年度の調査で、この場所が縄文時代の黒曜石採掘遺跡であるという確信を得たが、しかし、それが縄文時代のどの時期の所産であるかは依然不明であった。

12年度は7年度のトレンチを再発掘し、中途であった土層断面図の作成を実施し、さらに採掘址を立体的にとらえるためにトレンチの拡張を行なった。また、凹み地形がどのように形成されているのかを把握するために、単独で存在している凹みでトレンチ調査を行った。また、トレンチ調査とは別に凹み地形の分布図作成なども実施した。

トレンチの拡張調査では、

- ⑩ 断面で確認されていた重複する掘り込みが「穴」であることを確認した。
- ⑪ 多量の炭化物を包含する土層が堆積する上部の掘り込みからは、「諸磯C式」土器の小破片が出土し、本遺跡の形成時期に目安を得ることができた。
- ⑬ 採掘坑の掘り方を確認することができた。

単独の凹みに設定したトレンチでは、

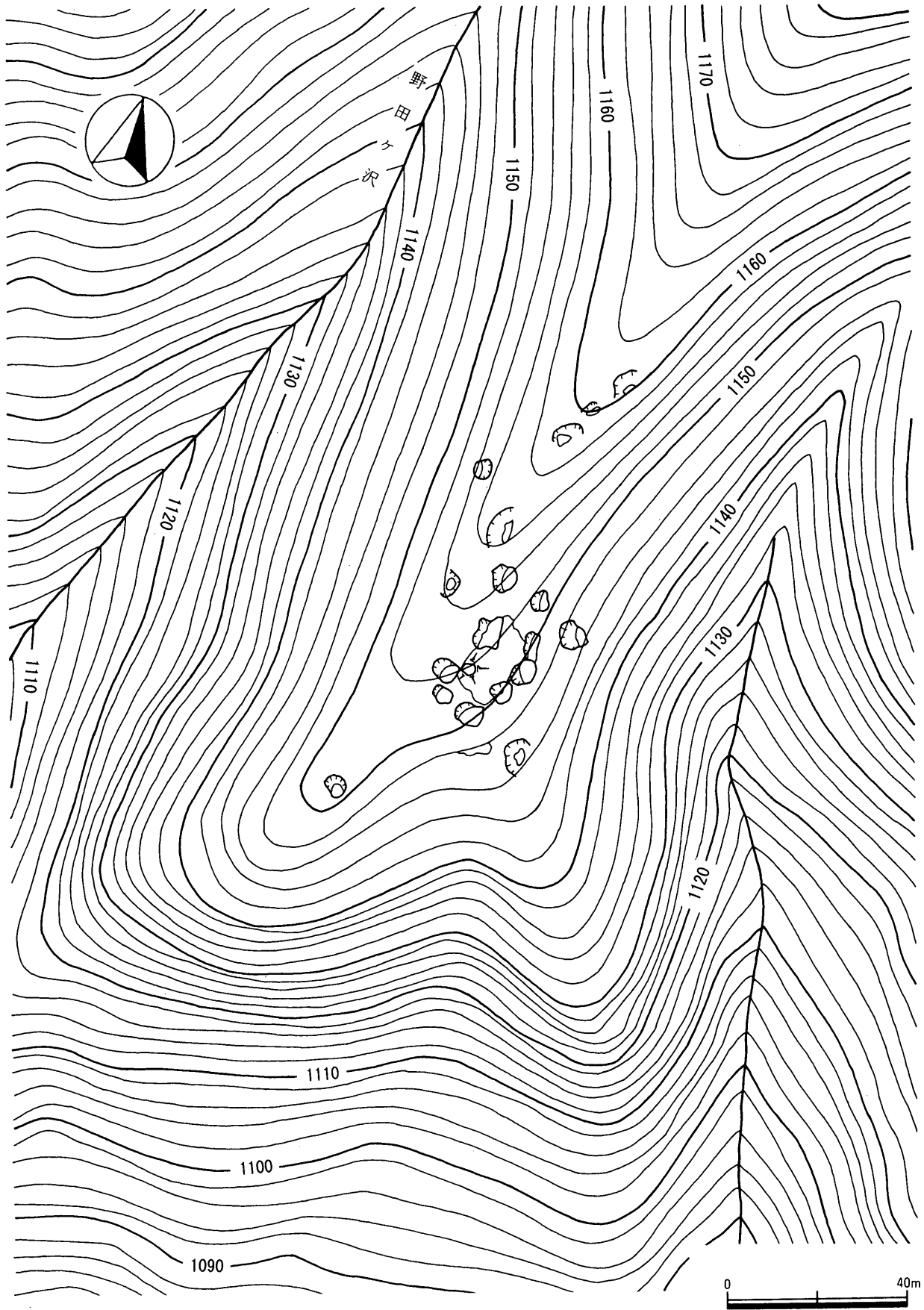
- ⑭ 人為的と考えられる小さな単位の土層が重層している状況が観察され、
- ⑮ 底面に不整形な土坑状の掘り込みが穿たれていることがわかった。

なお、凹み地形の形成過程については現在も検討中であり、今後の課題である。

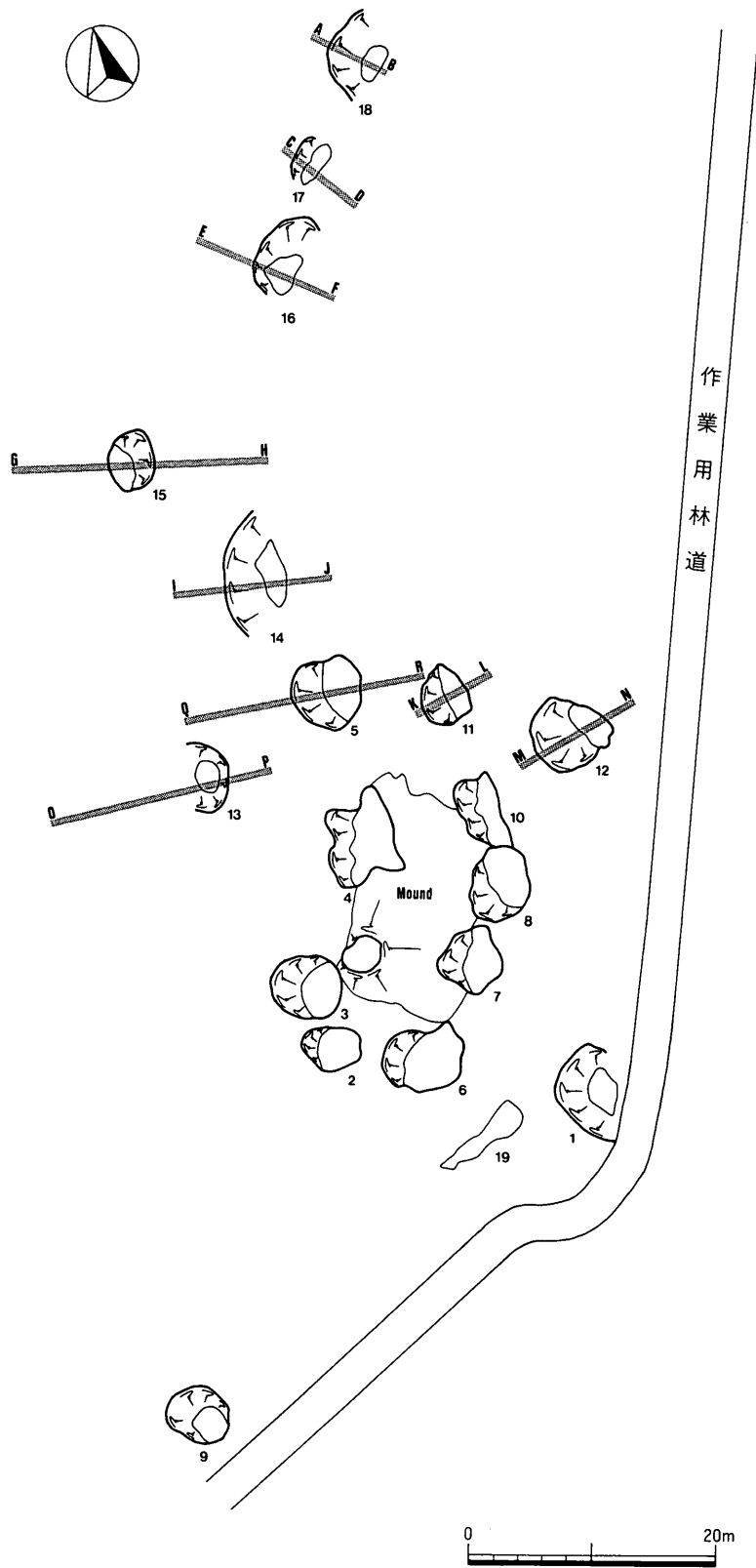
凹み地形の分布図作成では、18基の凹みを確認し、位置関係を図化することができた。

4 黒曜石の分布について

東俣遺跡のある尾根には、地表面に多くの黒曜石が分布している。ただし「多く」と入っても、星ヶ塔や星ヶ台のように、バラスを敷き詰めたような状況ではなく、「散らばっている」といった表現がされている。そのような黒曜石の分布範囲は、第24図に示した凹みの分布範囲とほぼ重なっており、尾根の頂部から東西の斜面の中腹辺りにまで広がり確認されている。凹みの分布範囲から離れると、黒曜石もみられなくなり、両者には関連があると考えられる。東俣遺跡の黒曜石は、地表下1m以上の硬質ローム層と地山の間にある、白色粘土が混じるローム質土層に包含されており、自然の状態で地表面

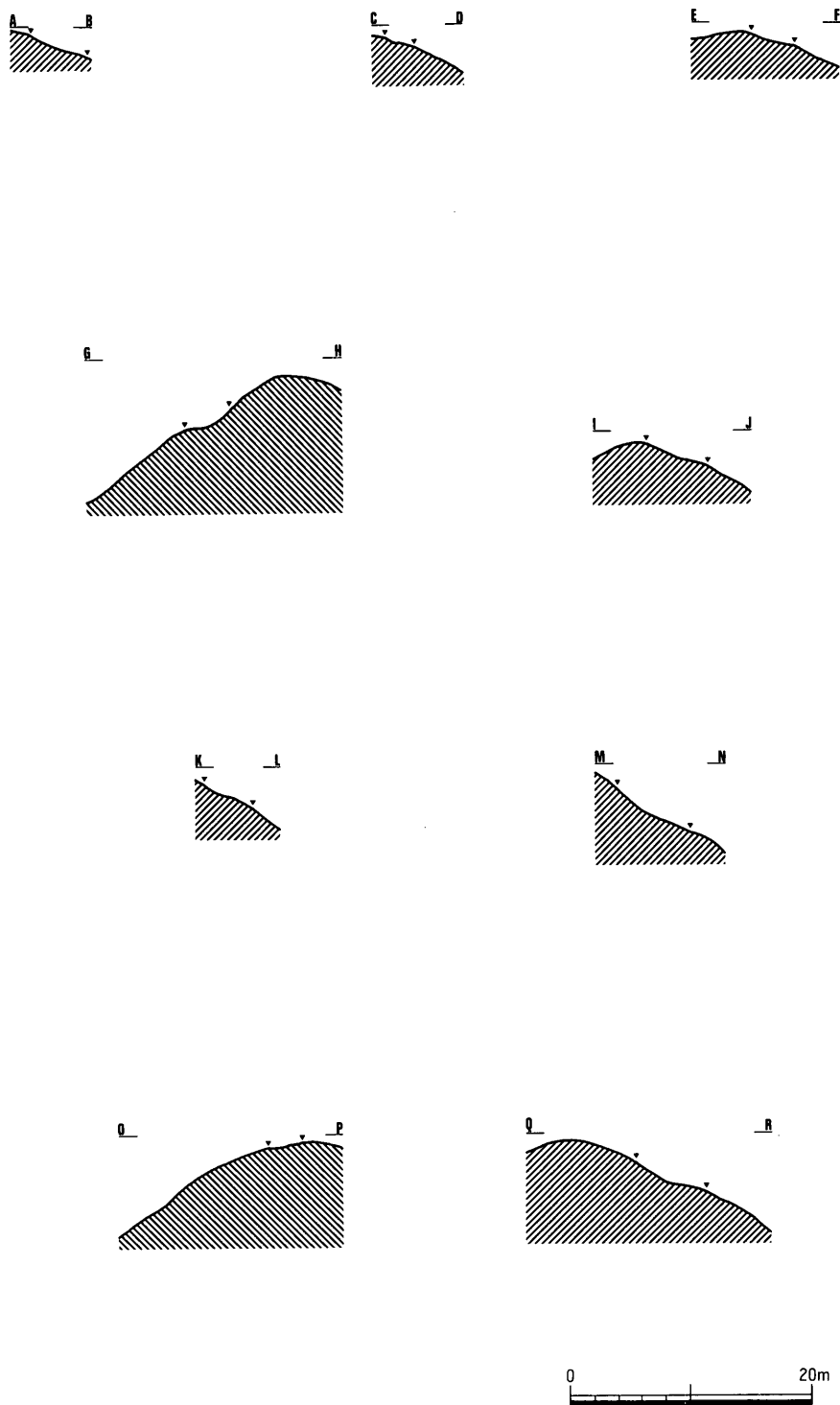


第24図 東俣遺跡凹み分布図 (1/1,250)



第25図 凹み・マウンドの分布とエレベーション位置図一I (1/600)

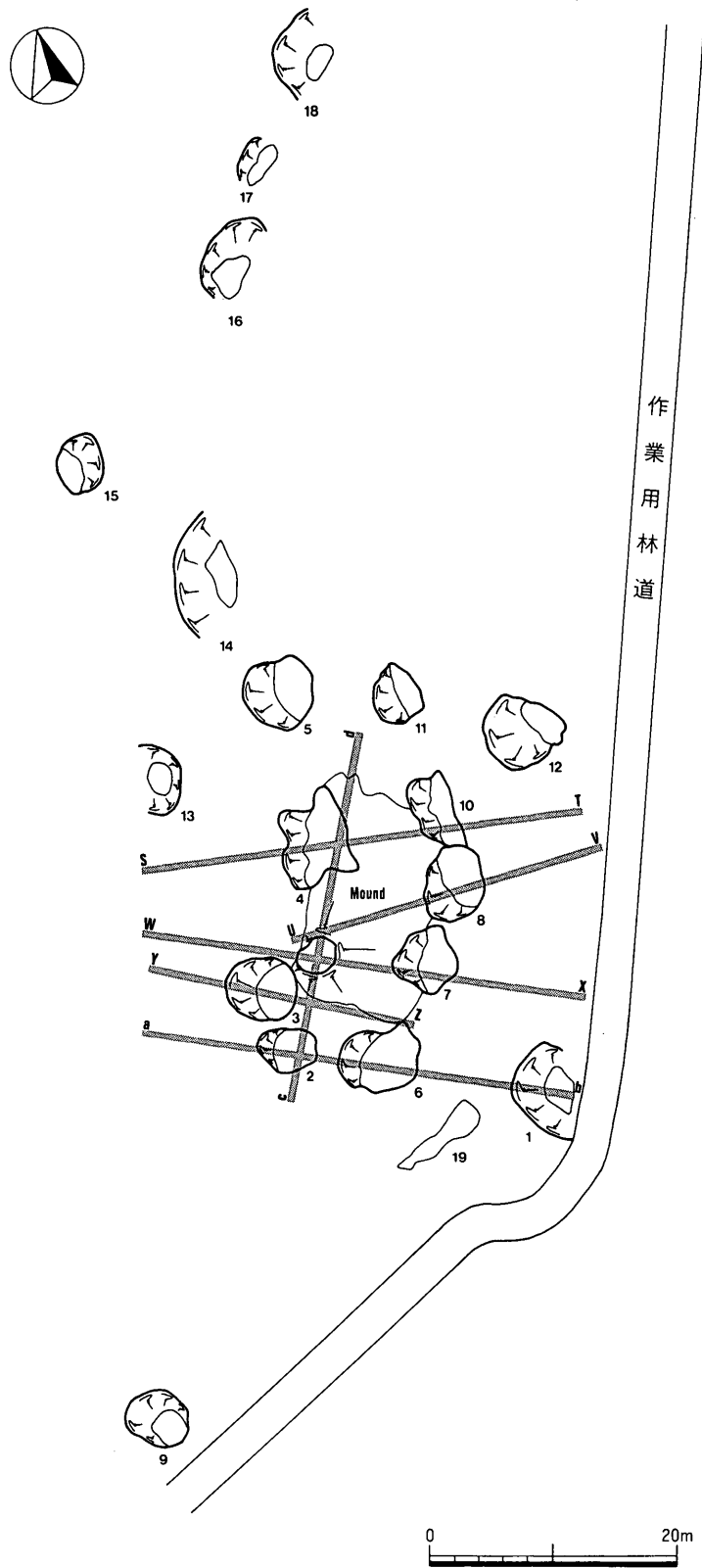
に露出することは考えにくい。したがって、東俣遺跡の地表面に露出している黒曜石は、採掘活動によって掘り出されたものである可能性が高い。



第26図 凹み・マウンドエレベーション図一 (1/600)

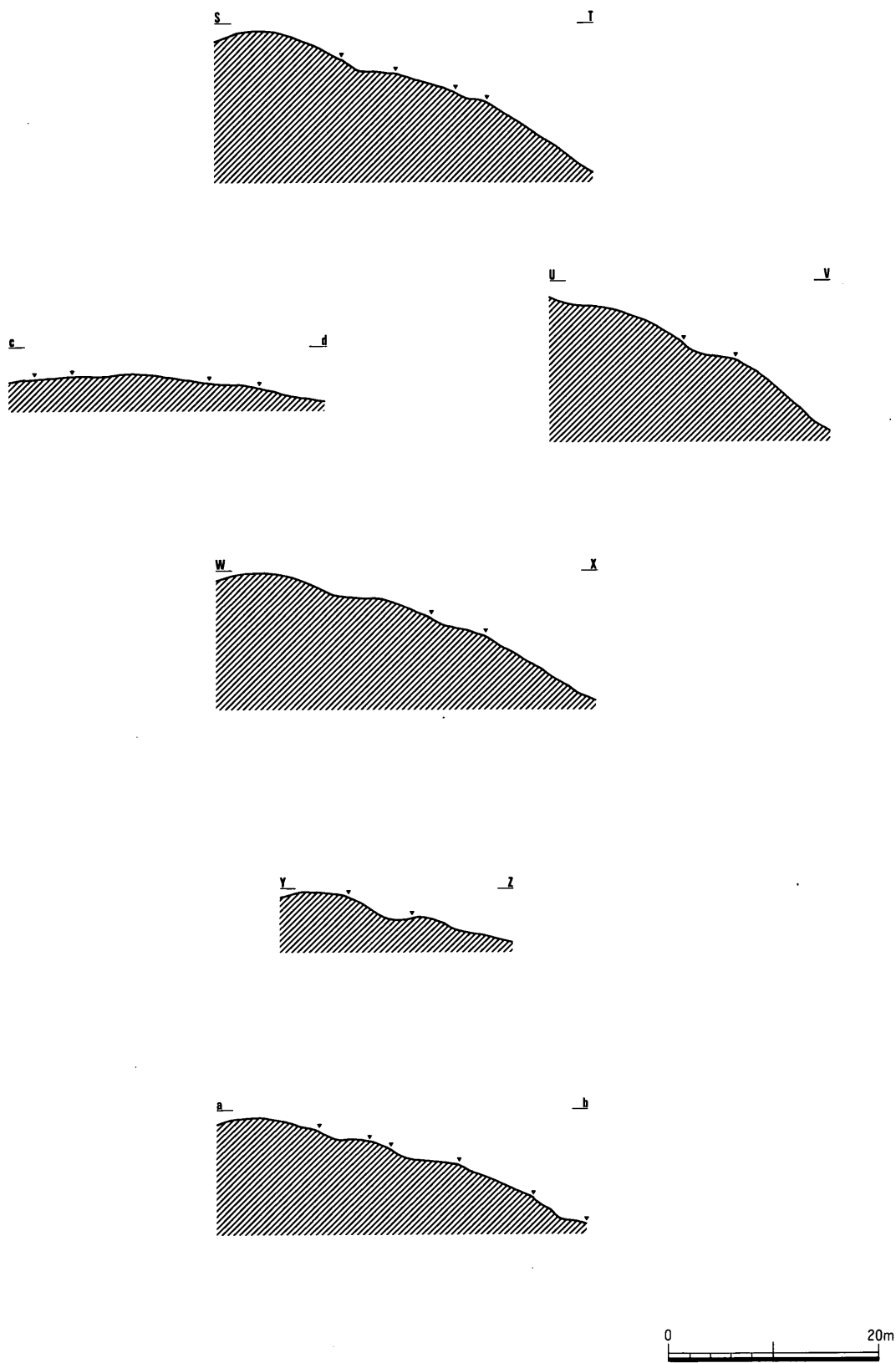
5 凹み・マウンドについて

東侯遺跡で確認されている「凹み」とは、地表面がクレーター状に窪んでいる地形をさす（写真10・13）。規模は、直径約3～10mである。凹みの深さはまちまちであり、浅い皿状のものから、明確な穴をなしているものまで様々である。この凹みの形態については、第25～28図に示した。平面図は、視覚



第27図 凹み・マウンドの分布とエレベーション位置図-2 (1/600)

的に認識できた凹みの上場と下場を図化している。断面図は、基本的に斜面に沿った長径を軸にレベルを計測し、図化した。現在までに凹みは18ヶ所確認されている(第24図)。なお、第24図は、地形図に凹み分布のおおよその位置を当てはめたものであり、絶対的な位置を示すものではない。詳細な測量については今後実施する予定である。



第28図 凹み・マウンドエレベーション図-2 (1/600)

クレーター状の凹みは、単に地表面が窪んでいるだけでなく、第26・28図の断面図や、9号凹地に設定した5トレンチの土層断面図に見られるように、斜面の上部側が窪み、斜面の下側は逆にやや盛り上がっている。東侯遺跡で「凹み」とよんでいるものは、このように窪んでいる部分と盛り上がる部分と

がセットになっている。特に、2・3・4・6・7・8・10号凹みが集中するところでは、そうした地形が重なり合い、雛壇状となっている（写真7～9）。ただ、凹みとセットになる「盛り上がり」については、本報告のような平面図では表現し得なかった。今後詳細な地形測量図を作成し、この点について明確に説明をしたいと考えている。

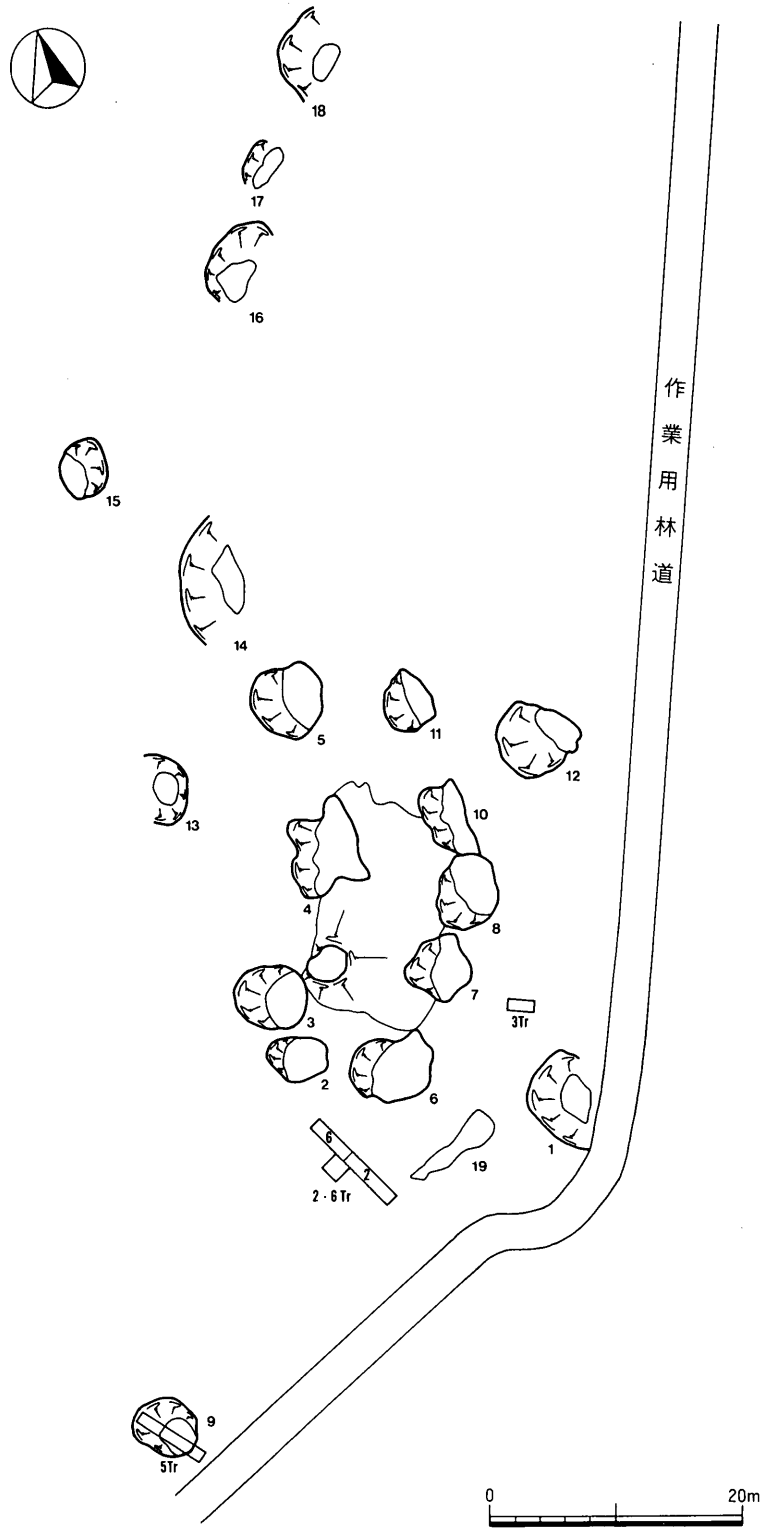
また、凹みとセットなる盛り上がりのうち、凹みが集中する部分のものは規模が大きいため、「マウンド」と呼び、一応区別している（第25図、写真11・12）。このマウンドは、密集する凹みとともに、雛壇状の地形を形成している。凹みが集中することと深い関係があると考えられるが、その形成過程や性格については今後の課題である。

さて、ここで「凹み」という言葉について説明しておきたい。凹みの様子や凹みが群在する様相は、長門町星糞峠の黒曜石採掘址とよく似ていることは先に触れたが、星糞峠を調査している鷹山遺跡調査団では、発掘調査により「凹み」が縄文時代の黒曜石採掘址であると判明したことから、「凹み」を「採掘址」と呼んでいる（明治大学鷹山遺跡群調査団1999）。東俣遺跡でも調査の結果から、「凹み」が黒曜石採掘址であると考えている。だが、2・6トレンチの調査で土層断面にあらわれた黒曜石採掘坑は、地表面が窪んでいるようには見えない。あくまでも視角の上の問題であり、あるいは地形測量をすれば、凹みが認識できるかもしれない。しかし、星糞峠の「採掘址」が「虫倉山斜面を歩く者なら誰もが気づくだろう径数mの「肘掛け椅子」「播り鉢」のような地形の起伏をさしている」ということを考慮すると、地下に黒曜石採掘の痕跡があるとしても、地形の起伏がなく「誰もが気づく」ことが困難な場合は、「採掘址」として認識されないことになってしまう。とすると、見かけの分布と真の分布という状況に陥りはしないか。実際には、星糞峠では測量調査が実施されており、地形の微妙な変化がとらえられており、肉眼ではわからないような凹みも認識されているので、見かけの分布と真の分布といった齟齬をきたす可能性は少ない。しかし、測量調査のできていない東俣遺跡では、そのような懸念があり、「凹み」を「採掘址」と呼ばずに、「凹み」と呼んでおくことにする。

また、本書で報告している星ヶ塔についても、黒曜石が多量に分布している場所で、「凹み」と「盛り上がり」の連続する地形を広範囲で確認しているが、黒曜石があってもそうした起伏がはっきりととらえられない場所もある。むしろ、「凹み」のない部分が採掘址でないと言い切れるかが問題である。

第II章で述べたとおり、大正時代、鳥居龍蔵氏は、「四十英尺も掘り込まれてゐる」ヨーロッパにおける新石器時代のフリント採掘址を典型ととらえ、深い鉢坑のない星ヶ塔では採掘活動は行われていないと考えた（鳥居1924）。「凹み」を典型と考えてしまうと、視覚的に「凹み」がとらえられない場所は「採掘址」と認識されなくなってしまう可能性がある。まだ遺跡の発見途上にいるわれわれは、「凹み」に最大限の注意を払いつつ、凹みのない場所にも深い注意が必要であると考えている。

星糞峠の「凹み」を「採掘址」と呼称することに異議はない。それは発掘調査と測量調査の成果からも明らかであり、星糞峠においては、「すべての凹みは黒曜石採掘址である」という判断が成り立つと考えられるからである。だが、東俣遺跡では仮に、「すべての凹みは黒曜石採掘址である」と判断できたとしても、「すべての黒曜石採掘址が凹みをもつ」とは限らない。それはまた星ヶ塔も同様である。調査途上のいま判断することは困難である。また、われわれは今後いくつかの黒曜石原産地を黒曜石採掘遺跡と認識することになると予測しており、さらに、東俣遺跡のように未知の遺跡もまだあると予想している。そうした未知の遺跡の調査を踏まえた上で、用語の整備を行いたいと考えている。したがっ



第29図 調査トレンチ位置図 (1/600)

て、いまは、「黒曜石採掘址は凹みを伴っている」という「事実」を「手がかり」に、黒曜石採掘遺跡の探索をすすめていきたい。

6 試掘調査

東俣遺跡の試掘調査は、これまで7ヶ所の試掘坑を調査しているが、ここで報告するのは、2トレンチとその延長の6トレンチ、3トレンチ、5トレンチの調査についてである。その他の試掘坑は、試掘箇所を選定のための小規模なものであり、記録も不十分であることから報告を省略した。

(1) 1号凹み周辺の土層断面調査

1号凹みは、平成5年度の調査で地表の凹みと、土層断面の掘り込みを確認した。作業用林道で一部が削られていたが、その削られた部分を利用して、土層断面の調査ができた。1号凹みから南西に向かって、約28mの区間を林道の法面を精査して土層断面を露出し、観察を行った(第30図、写真14・15)。土層観察では、大小の単位の土層が重なり合っていることがわかった。1号凹みの覆土は、表土の下層はローム質土であり、明るい色調の土層と、黒味がかかった暗い色調の土層が交互に堆積していた(第II層群)。黒曜石は、量は少ないが含まれている。最下底部では、地山層に含まれる脆い礫を多量に含んでいる。

1号凹みの西側は、小さな単位の土層が重なり合っている第III層群があるが、白色や黄白色の砂質土を主体とする土層の集合である。こうした小さな単位の砂質土層が重なり合う状況は、5トレンチの土層断面でも確認されており、黒曜石採掘活動に伴うものと考えられる。

第III層群の西隣は、ローム質土を主体とする第IV層群である。このローム質土には小さな黒曜石原石が含まれる。

第III層群と第IV層群の下層は、礫を含むしまりの強い、第V層群が堆積している。上下2層に区分されるが、下層は小形の礫を多量に含み、表面がガサガサしていることから、現場では「かみなりおこし」と通称している。

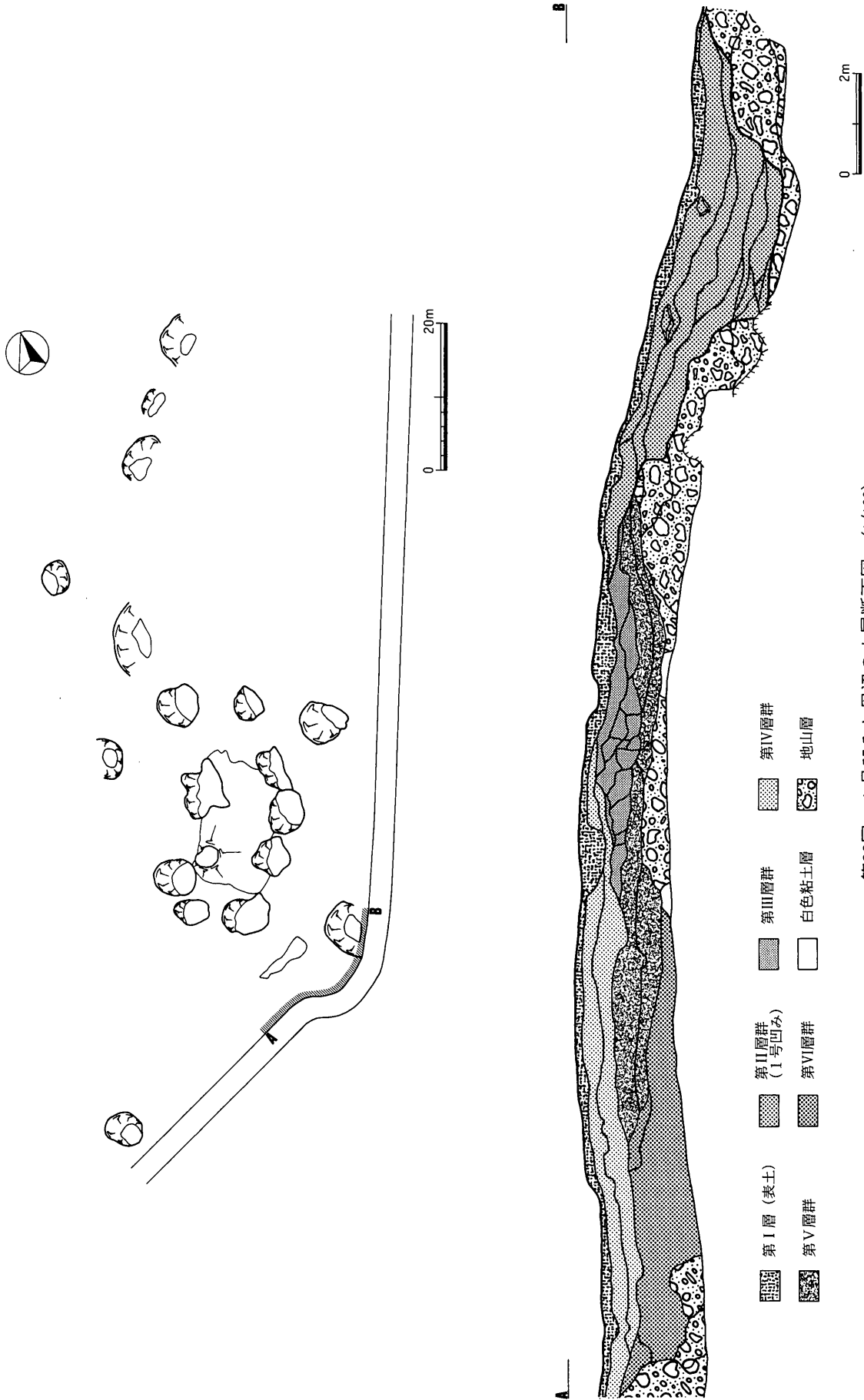
第IV層群と第V層群の下層は、第VI層群が堆積する。黒味が強い硬質のローム質土である。

第III層群から第VI層群のうち、第III層群は人為的な堆積であると考えられる。第IV層群は黒曜石を含んでいることが観察されたが、6トレンチの調査では、自然堆積のソフトローム層に黒曜石が含まれないことから、第IV層群も採掘に関わる堆積と考えられる。第V層群・第VI層群については、現場では自然層と考えた。第V層群は東側で不自然な傾斜をもっており、あるいは掘り込みを示しているともみられるが、この断面の位置が、ノッチ状の谷の谷頭になっており、地形に変化があることからその影響とも思われる。第VI層群も同様である。第V層群と第VI層群についてははっきりしないが、第III層群と第IV層群は、黒曜石採掘による堆積と考えられた。下場のみ認識された19号凹みと近い位置であることから、19号凹みの形成と関わる土層堆積かもしれない。

1号凹みとその周辺の土層観察では、採掘址の掘り込みや、人為的な土層のまとまりなどを確認することができた。しかし、黒曜石の供給源はこの段階では不明であり、更なる調査が必要となった。

(2) 2・6トレンチの調査

2トレンチは平成6年度に調査し、翌7年度に2トレンチを延長する調査を行い、7年度の延長部分



第30図 1号凹みと周辺の土層断面図 (1/120)

を6トレンチと呼び区別した。したがって、2トレンチといった場合は6年度分の調査をさし、6トレンチといった場合は7年度分の調査をさす。2・6トレンチという表現は、12年度分の調査、またトレンチ全体についての表現である。

a 採掘坑の土層堆積

2・6トレンチでは、第31・32図のような土層堆積が認められた。幾つもの土層が重なり合っているのは、採掘活動に伴って堆積した土層と考えられ、それらは、4つの層群にまとめられた。

第IV層群は、軟質ローム質土を主体とする、小さな単位の土層が重なり合って構成される。土層堆積は、斜面の傾斜に対し、平行するものと逆行するものとが観察された。こうした、小さな単位の土層は、それが廃棄の単位を示しているのではないかと予測された。

第V層群は、硬質ローム層のブロックがレンズ状に堆積する土層を主体とする。このロームブロック層は、黒曜石の採掘時に硬質ローム層を掘ったことを示している。ブロックとブロックの間には隙間が見られるところもあり、掘り上げたロームブロックを一気に埋め戻したものと考えられる。このロームブロックは、写真31に示した。形は紡錘形のものが多く、長さ7～14cm、幅6～12cm、厚さは4～9cmである。大きさはある程度の範囲にまとまっており、採掘道具の大きさと関連する可能性もある。また、ロームブロックの表面に何らかの工具痕が残されていることも考慮し観察したが、工具痕と判断されるようなものは認められなかった。

12年度の拡張区の調査では、第V層群の最下層で、小粒の黒曜石が多数出土した。ロームブロックの埋め戻しの前に、不要な小さな黒曜石を埋め戻した可能性がある。

第VI層群は、第IV層群に切られる層群である。ローム質土と褐色土が堆積する。

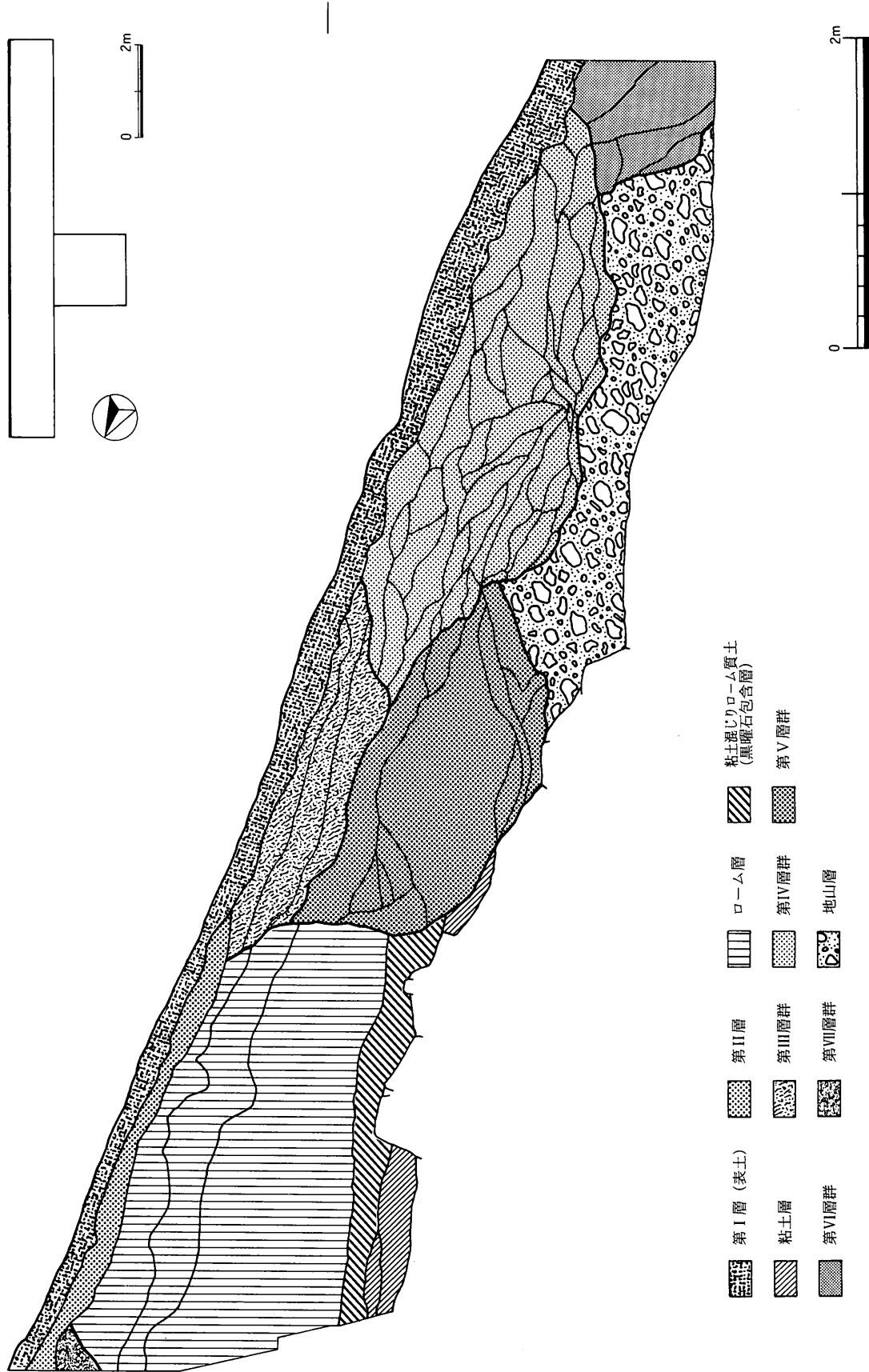
以上の第IV・V・VI層群が採掘址の覆土と考えられる。

第III層群は、小さな竪穴状の掘り込みに、炭化物を多量に含む土層が堆積している。この層群からは土器、凹石、剥片が出土している。12年度の拡張区の調査では、竪穴であることが確認された（第33図・写真26）。採掘坑の凹みを利用したか、あるいは新たに掘り込んだかはわからないが、「鉋床」をねらった採掘坑とは別の性格の遺構である可能性が高い。数量は多くはないが、遺物がまとまっていることも採掘坑とは異なる遺構であることを示唆しているように思われる。この第III層群とよく似た、炭化物を多量に含む層群の第VII層群が、2・6トレンチの北端でも観察されている。こうした遺構が採掘に伴って複数構築されていたことを示している。

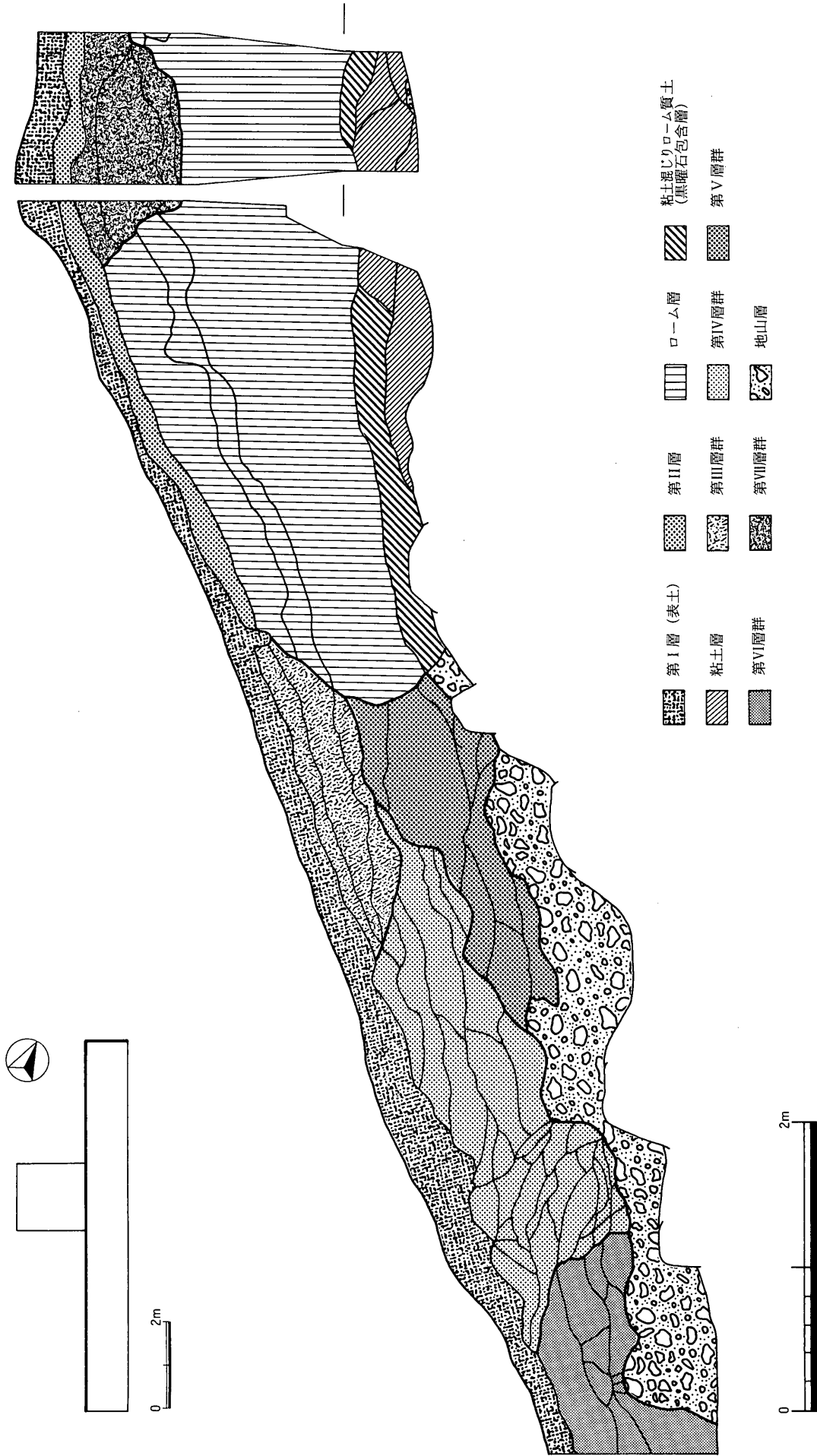
第II層は、ローム質であり、掘り込みに伴うものではないが、剥片などが出土することや、第III層群や第VII層群の上部に堆積していることから採掘に伴うか、採掘以降に堆積した土層である。

b 採掘坑の掘り込みについて

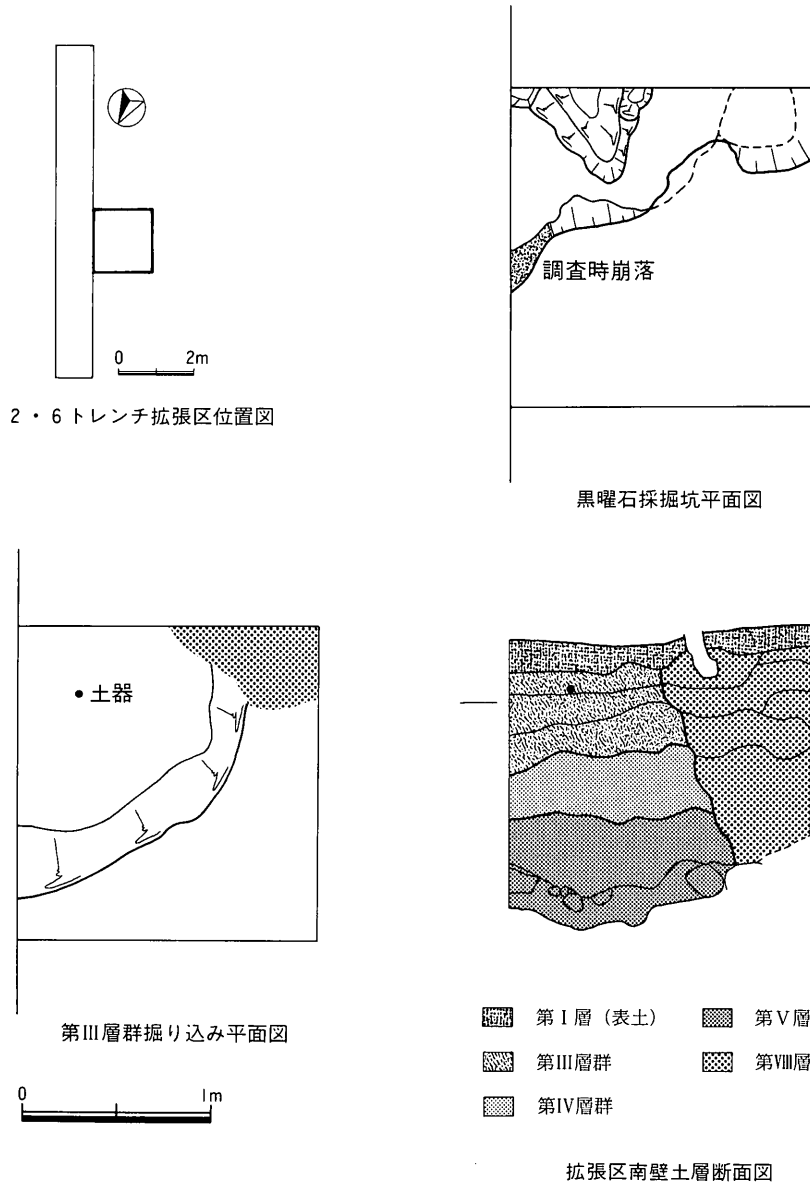
12年度の調査では、2・6トレンチの西側に拡張区を設定し、第III層群の掘り込みと第V層群の掘り込みを確認することにした。第III層群の壁の立ち上がり及び底面を確認したのち、第V層群を掘り下げ、採掘坑の立ち上がりと、底面を確認した（第33図、写真27～30）。第V層群は、土層断面で見られたとおり、硬質ローム層を掘り込んでいる。この硬質ローム層は、垂直方向にクラックを生じやすく、調査中も一部崩れてしまった。そうしたクラックの影響もあってか、壁面は凹凸が激しく、部分的にオーバ



第31図 2・6・6トレンチ東壁土層断面 (1/40)



第32図 2・6トレンチ西・北壁土層断面 (1/40)



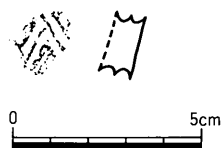
2・6トレンチ拡張区位置図

黒曜石採掘坑平面図

第III層群掘り込み平面図

拡張区南壁土層断面図

第33図 2・6トレンチ拡張区黒曜石採掘坑実測図 (1/40)



第34図 2・6トレンチ拡張区出土土器 (1/2)

ーハングしている。壁面に工具痕が残されているか観察したが、明らかに工具痕という痕跡は突き止められなかった。

底面は、締まった粘土質の地山であり、それを掘り込む浅いピットが検出された。底面上の直上は、断面図に表現することができなかったが、軟らかい、灰色がかったぼそぼそした土が堆積しており、その土に先述した、小粒の黒曜石が多数含まれる。その上部は、拳大程度の礫が積み重なるローム質土が堆積し、その上にロームブロック層がのる。したがって、この採掘坑の埋まり方の順番としては、小粒

の黒曜石を埋め戻し、その上に採掘時に出た礫を埋め、ロームブロックを埋めたということになる。こうした状況から、採掘坑を埋めている土層は、選別過程を経た土が、その選別の単位ごとに埋め戻されたものであるという仮説を立てることができる。

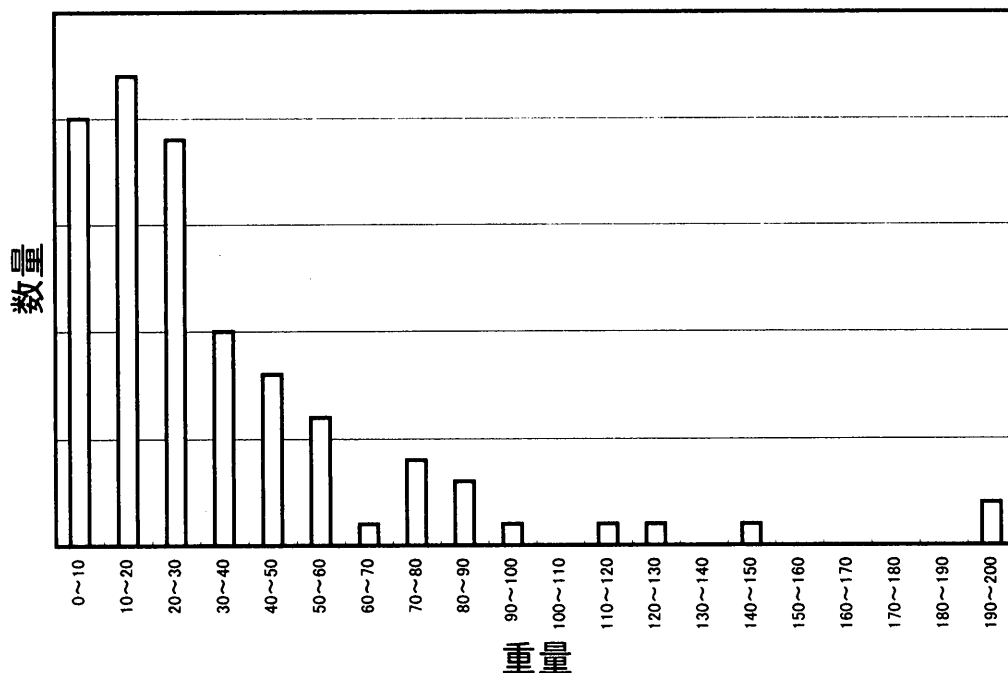
なお、第33図にこの拡張区の南側壁面の土層断面図を示したが、西側に、第III層群、第IV層群、第V層群を切る、別の採掘坑が存在することがわかった。

c 採掘坑覆土中の黒曜石分布について

5年度の2トレンチの調査では、先に述べたとおり、黒曜石原石が多数出土した（写真21～23）。調査当初は、原石がまとまって出土することから、それが鉱床の原石であると予想したが、結局、この原石は採掘坑の覆土に堆積したものであることが明らかになった。では、採掘坑の覆土に原石がまとまって含まれていることは何を示すのであろうか。それを考えるために作成したのが、第35～37図の、原石重量別分布図である。この分布図では、重量別に、平面分布と垂直分布を合わせて分布のまとまりをとらえ、それを実線で示した。この作業により、同じ程度の大きさのものがまとまりを持っていること、そうした重量クラスのまとまりがさらに重なり合って、一つの原石集中を形成していることが明らかになった。その原石集中がスクリーンで区別した6ヶ所のまとまりである。

同程度の重量の原石がまとまるということは、同程度の重量の原石をまとめる行為、すなわち大きさによる選別が行なわれていたことを暗示する。そして、同じ重量クラスのまとまりがさらに重なり合うということは、重量クラスごとに選別されたのちに、不要なものが一括廃棄されたことを示しているのではないだろうか。黒曜石の集中が幾つもあるということは、そうした一括廃棄がくりかえし行われていると考えられ、採掘・選別・廃棄のサイクルがくりかえし行われていたと推測できる。

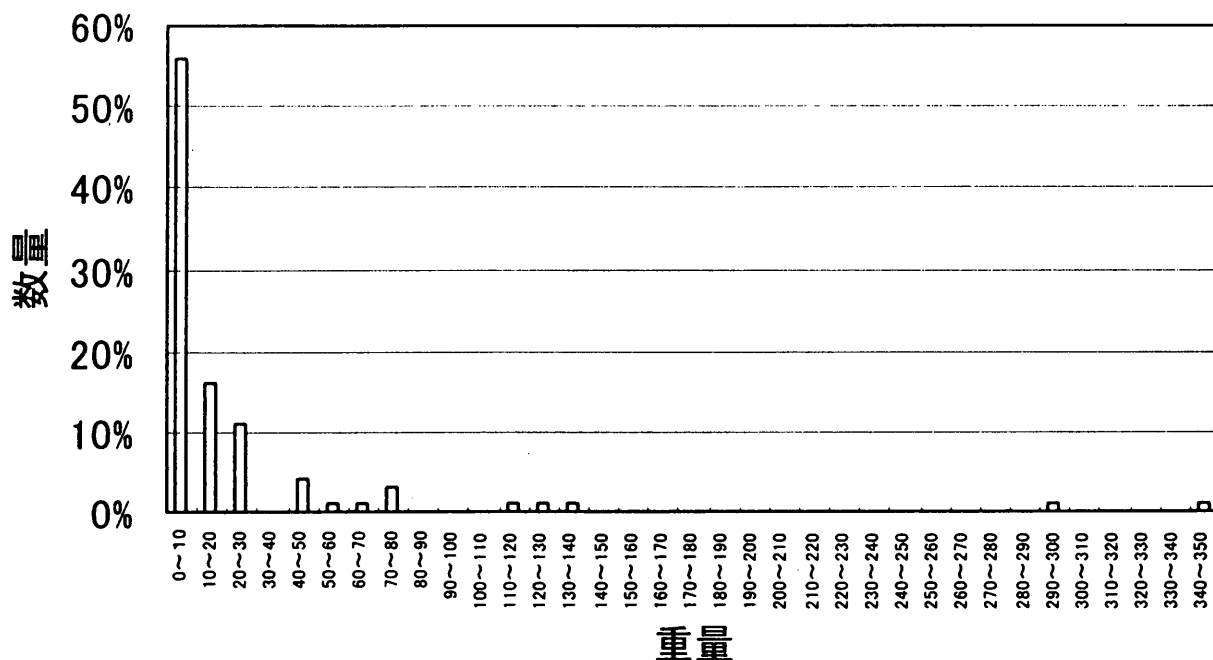
なお、廃棄されたことを端的に示した例として、複数のパンチ痕が観察される、約200gの原石が1点であるが出土している。何度叩いても割れなかったものは、「質に問題あり」として埋め戻されたの



グラフ1 2トレンチ採掘坑覆土出土原石重量分布

であろう。

採掘坑の覆土から出土した黒曜石の重量分布はグラフに示した。60g 以下のものが大半であり、とくに30g 以下のものが全体の約60%を占めている。こうした傾向は、次に述べる鉱床の黒曜石の重量分布と関係するようである。



グラフ2 6トレンチ鉱床出土原石重量分布

d 鉱床と原石

2・6トレンチでは、黒曜石が自然層に包含されている土層、すなわち、採掘にあたっての「鉱床」を確認することができた。それは、軟質ローム層、硬質ローム層の下層に堆積する、白色粘土が混じるローム質土である（第31・32図、巻頭カラー写真、写真17）。ロームブロック層を主体とする第V層群は、この「鉱床」を掘り抜いており、ここでの採掘活動が、この「鉱床」の黒曜石をねらったものであることが明らかになった。

では、この鉱床の黒曜石はどのような特徴をもっているのだろうか。

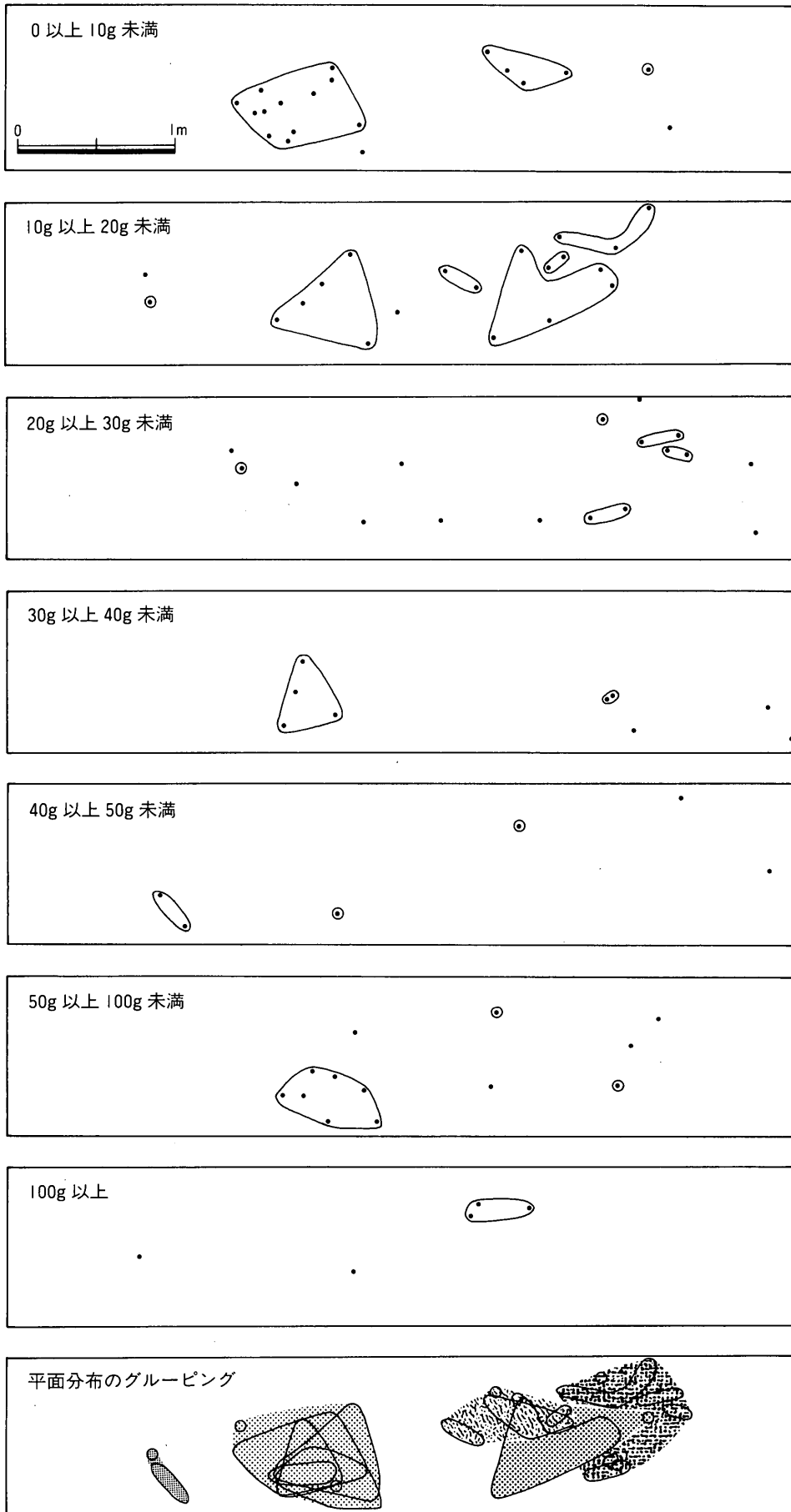
基本的な事柄として、本遺跡は黒曜石の原産地ではないことをおさえておきたい。本遺跡の鉱床に包含されている黒曜石は原産地からの転石であり、したがって角の取れた角礫あるいは円礫状であり、著しく扁平な板状のものから粒状のものまで様々な形状をなす。縄文遺跡でたまに見かける針のような形状の原石はここにはない。

また一見すると、人為的とも思える剝離面が見られるものがあるが、これらは原産地からこの場所に運ばれる間にできた剝離面である。同様にパンチ痕によく似た衝撃痕が多数見られるものが少なくない。

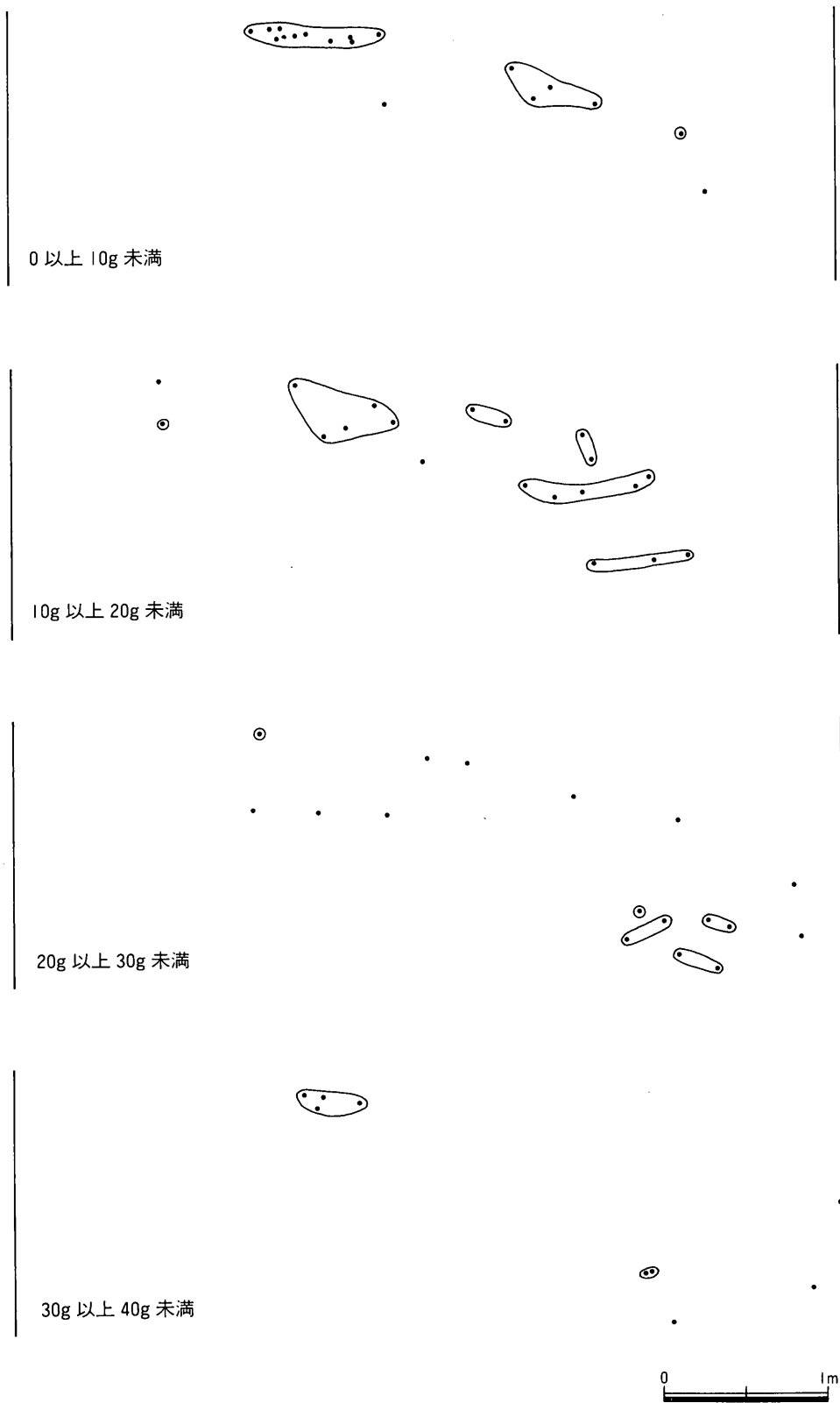
原石の見た目は、薄い飴色や灰色であり、白い縞が入るが、黒い縞は入らない。また、夾雑物をほとんど含まず、質は大変に良い。剝片は透明で、まさにガラスのようである。

大きさについては、自然層から回収した内の70点について、グラフで示した。

グラフから読み取れるように、本遺跡の自然層から出土する黒曜石のほとんどは30g以下の小さなものである。このデータには含めなかったが、コーヒースーガー状の5g以下のものも多量にある。ご



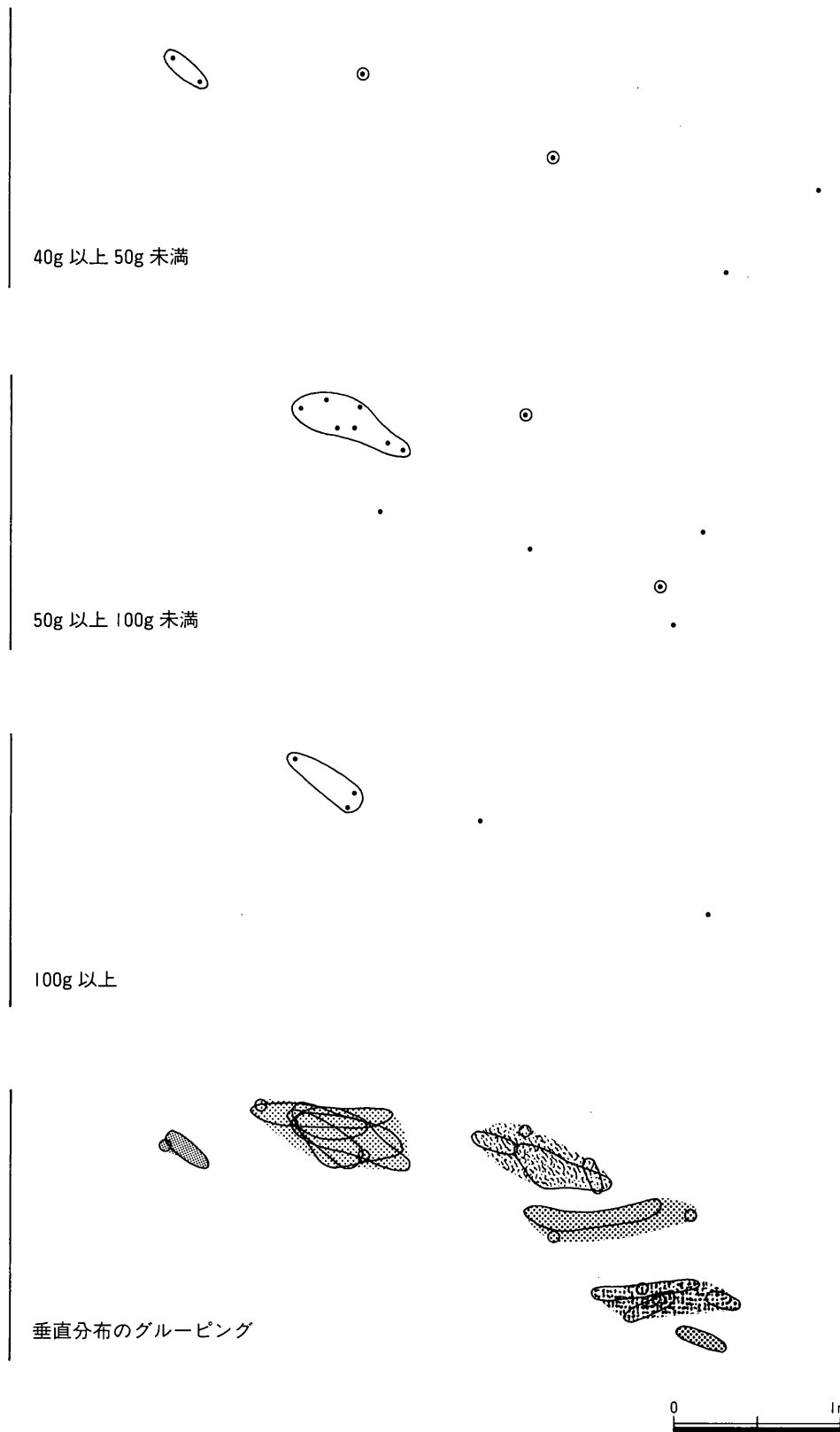
第35図 2 トレンチ黒曜石原石重量別平面分布図 (1/40)



第36図 2 トレンチ黒曜石原石重量別垂直分布図一I (1/40)

く限られた部分の調査ではあるが、この結果からすれば、東俣遺跡で採掘した人たちは、30g以下の小さな原石を多数、それよりも大きい原石を小数、手に入れたと考えることができる。

ここで、採掘址覆土から出土した、選別によって不用とされた原石と比べてみよう。グラフに示した



第37図 2 トレンチ黒曜石原石重量別垂直分布図—2 (1/40)

重量分布を見ると、鉱床とほぼ同じ比率であることがわかる。つまり、採掘が、この鉱床の黒曜石を対象としていたということである。また、どのサイズのものであっても、利用に適さないものがあり、それらは、採掘坑に埋め戻されたということになる。

e 出土遺物について

2・6トレンチからは比較的多くの遺物が出土した。とくに、12年度の拡張区から出土した土器は、小破片ではあるが、採掘の時期を知るうえで貴重な資料となった。

土 器

第34図の土器は、縄文時代前期末葉の土器である。地文には半裁竹管による矢羽状の沈線が施される。胎土は赤褐色を呈す。 (田 中)

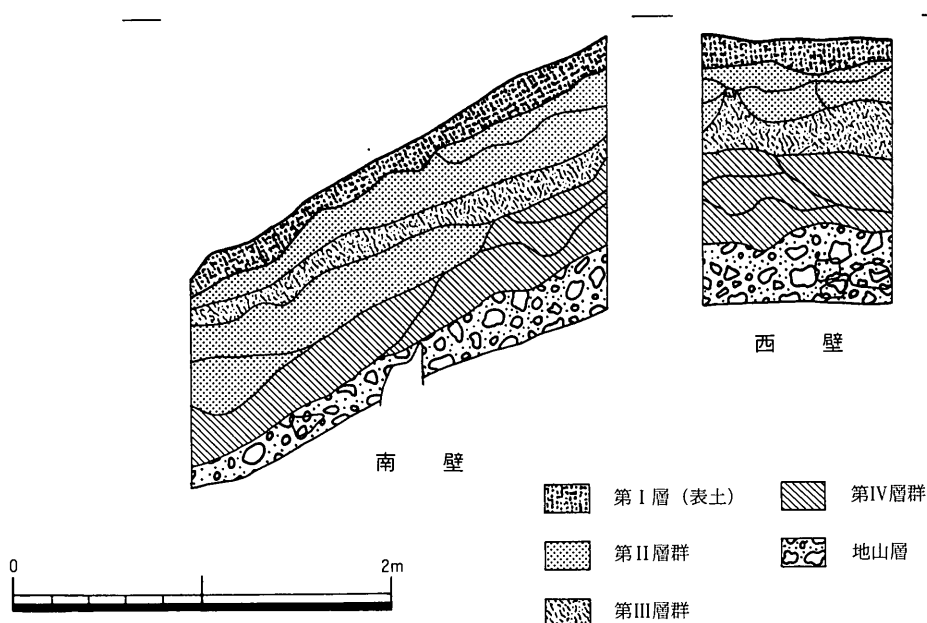
石 器

写真46～48に示したように、両極石器、剝片、石核が出土している。これらはほとんどが、透明で縞のない原石を素材としており、鉞床の黒曜石を素材としていていると考えられる。唯一、写真47下段右端の剝片が黒い縞をもっており、東俣遺跡以外の場所の黒曜石を素材としている。このように、遺跡外の原石を素材とする石器があるということは、たとえば星ヶ塔のような同時期の採掘場所を行き来する行動がとられていたと考えることもできそうである。この点については、今後さらに検討してゆきたい。

写真50は、5年度の2トレンチ第III層群から出土した凹石であり、写真51は6年度の6トレンチ第II層群から出土した凹石である。2点とも石材は安山岩である。この凹石は、採掘道具ではないことは明らかであり、採掘に伴う活動に使用されたものと考えられる。炭化物を多量に含む第III層群から出土したことも何か示唆的である。いずれにせよ、こうした採掘道具以外の道具が出土することは、土器の出土と合わせて、この場所が採掘を専らとする場所ではなく、日常生活の一部を伴っている可能性が高いことを示している。

(3) 3トレンチの調査

3トレンチは、「鉞床」の探索を目的に、凹みの集中部分と、1号凹みとの中間にあたる場所に設定した。ここでは、目的の「鉞床」は存在せず、第38図に示したような土層堆積が確認された。



第38図 3トレンチ土層断面図 (1/40)

表土下の第II層群は、褐色土であり、部分的に黄白色の風化した粘土ブロックを含む。黒曜石原石を多く含む。10g以下の小粒のものが大半であるが、30gから200g程度の大きなものも少量含む。その下の第III層群は、炭化物粒を多く含む褐色土であり、2・6トレンチの第III層群によく似ているが、黄白色粘土の風化したブロックを含む点が異なる。黒曜石の出土は上下の層群にくらべて極端に少なく、上下の層群と土層の形成過程や堆積の過程が異なると推測される。第IV層群は、ローム質土を主体とする層群である。プライマリーなローム層より明るく、白っぽい色調である。原石は少なく、すべて10g以下のものである。

3トレンチの第II・III・IV層群は、プライマリーな土層ではなく、黒曜石のあり方などからすれば、採掘活動に伴う、人為的な土層堆積であると考えられる。

(4) 5トレンチの調査

5トレンチは、凹みがどのように形成されているのかを知るために、単独で存在する9号凹みの長軸を貫くように設定し、12年度に調査を行った。

a 土層堆積

5トレンチの土層堆積は、第39図に示したように、小さな単位の土層が重層する状況が観察された。それらの小さな単位の土層は、特徴の類似からいくつかの層群にまとめることができる。

第II層は、ローム質土であり、2・6トレンチの第II層に対比されるものと思われる。

第III層群は、ローム質土を主体とする土層である。礫やロームブロックを含む。

第IV層群は、褐色土を主体とし、地山の礫を含む。上下2層からなるが、下層は地山の粘土質土を主体とする。上層は径1～2cmの黒曜石を少量含む。

第V層群は、見た目には灰色っぽく見える明黄褐色土を主体とする、粘性がなく堅く締まった、砂質を帯びた土層群である。3cm以下の黒曜石を少量含んでいる。灰色っぽく見えるのは、白色土粒子やブロックを含んでいることによる。

第VI層群は、第V層群とよく似るが、白色土ブロックが多量に含まれること、大きめの礫を含むことなど相違点がある。

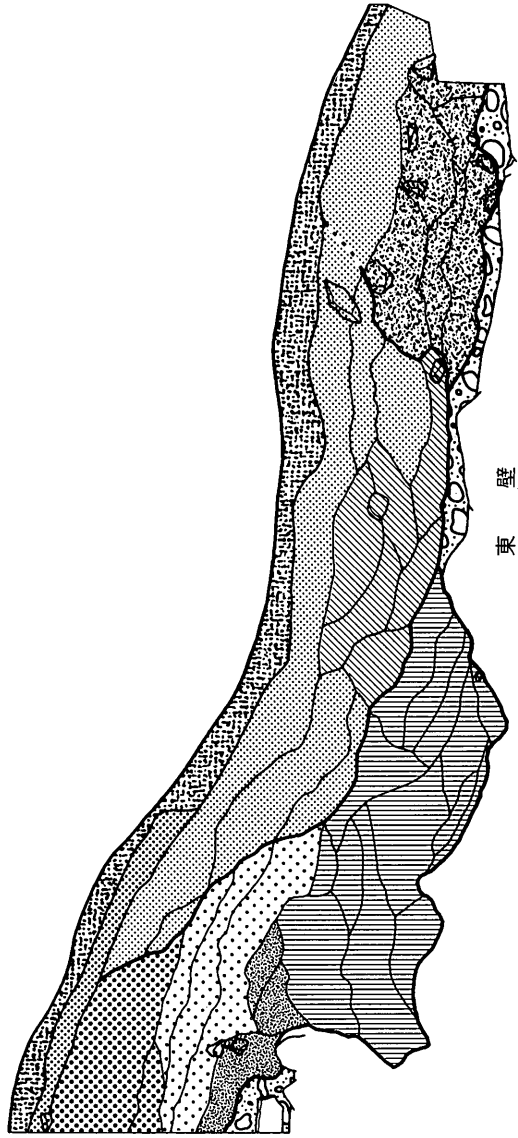
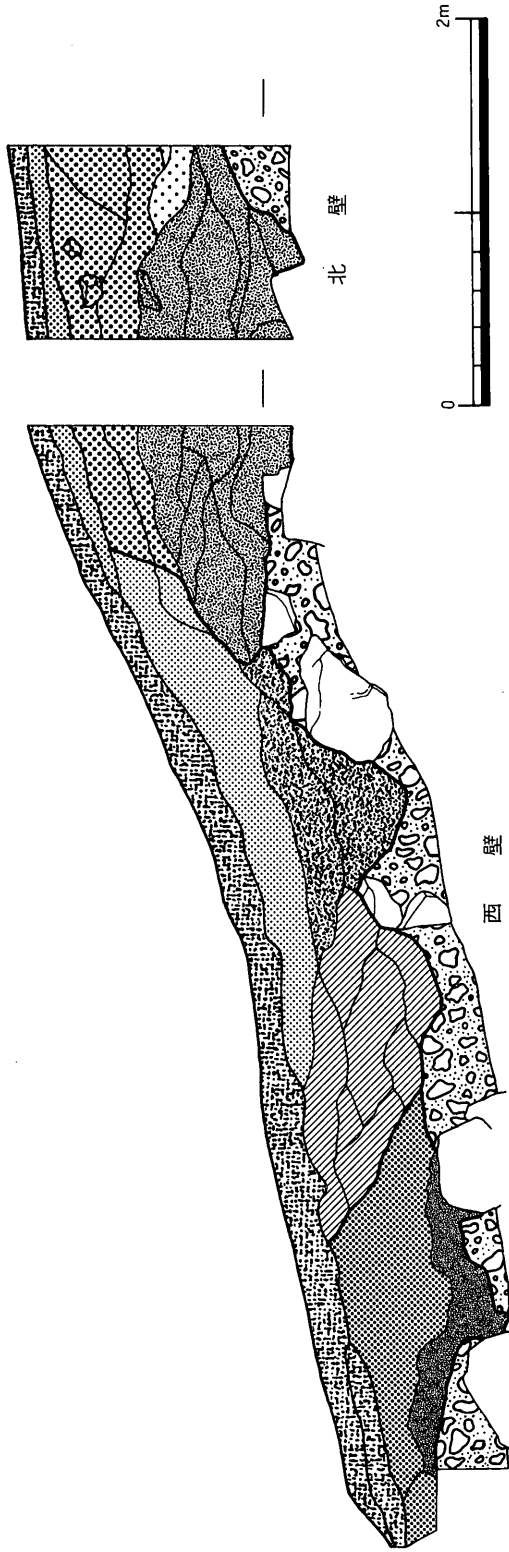
第VII層群は、ローム質土を主体とし、礫を含む。

第VIII層群は、地山の粘土質土層に、白色粘土や黄褐色土ブロック、礫などが混じった層を主体とする。全体に堅く締まっている。

第IX層群は、ローム質土と白色土とが混じる層群であり、3層からなるが、下層ほど白色土の量が増える。また、下の2層は赤褐色砂質土を含み、下層ほど量が多い。3cm以下の小粒の黒曜石を含む。粘性、締まりは弱い。

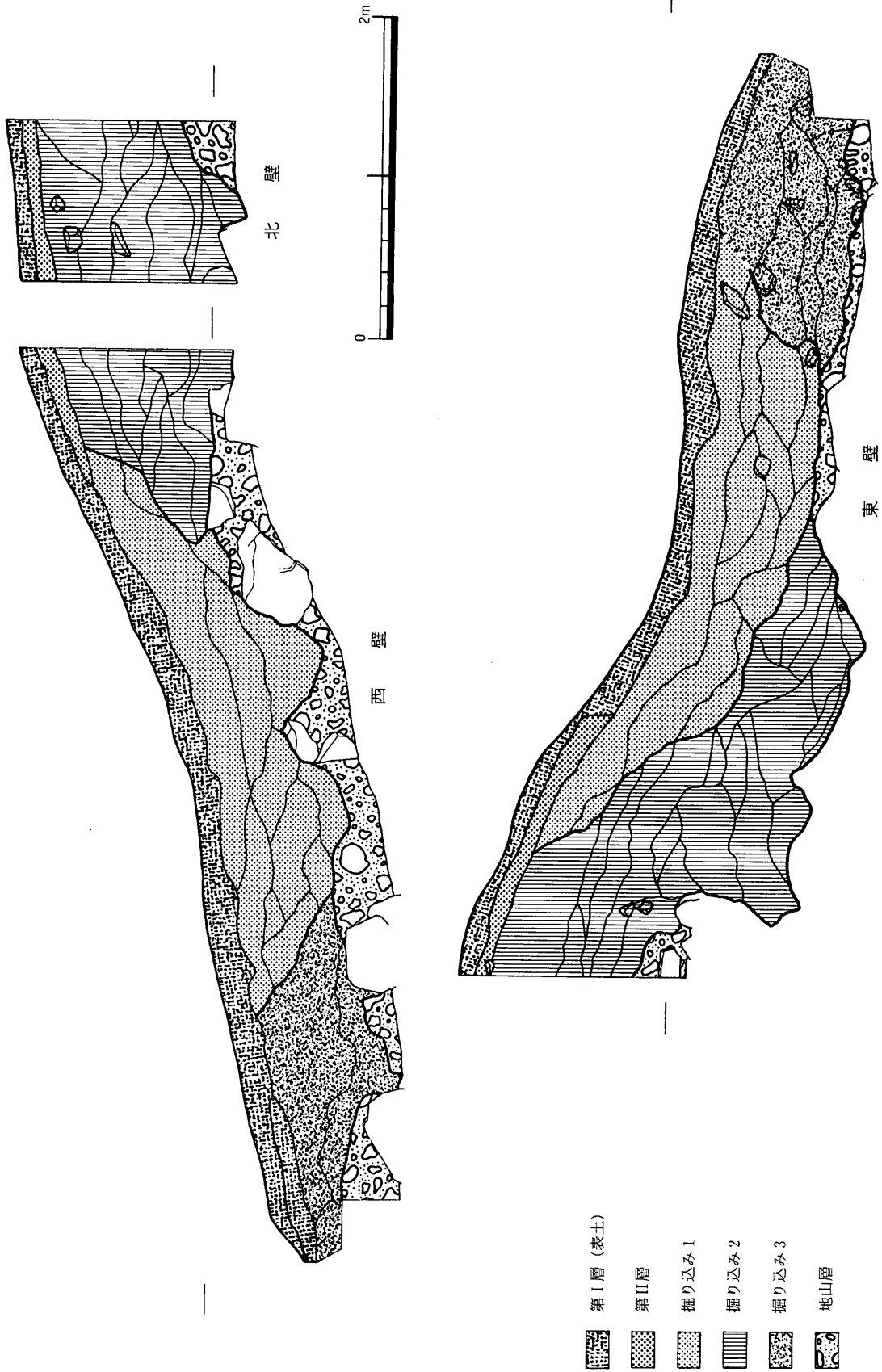
第X層群は、灰黄褐色砂質土と、にぶい黄褐色粘土ブロック、白色粘土ブロックが混じりあった土層が重層する土層群であり、灰黄褐色砂質土を主体とする土層と、にぶい黄褐色粘土ブロックを主体とする土層が交互に堆積している。全体に締まりが強い。黒曜石は含まれないようである。第X層群は、後述するようにピットを埋めている土層である。

第XI層群は、ローム質土に、堅く締まったロームブロックが多量に含まれる。ロームブロックの大き



- | | |
|----------|--------|
| 第I層 (表土) | 第VII層群 |
| 第II層 | 第IX層群 |
| 第III層群 | 第X層群 |
| 第IV層群 | 第XI層群 |
| 第V層群 | 第XII層群 |
| 第VI層群 | 地山層 |
| 第VII層群 | |

第39図 5トレンチ土層断面図 (1/40)



第40図 5トレンチ土層断面の3つの掘り込み (1/40)

さは5~10cm程度であり、コーヒーシュガー状の黒曜石を含む。

第Ⅶ層群は、白色砂質土を主体とし、堅く締まった黄白色砂質土のブロックを含む。コーヒーシュガー状の黒曜石を含む。

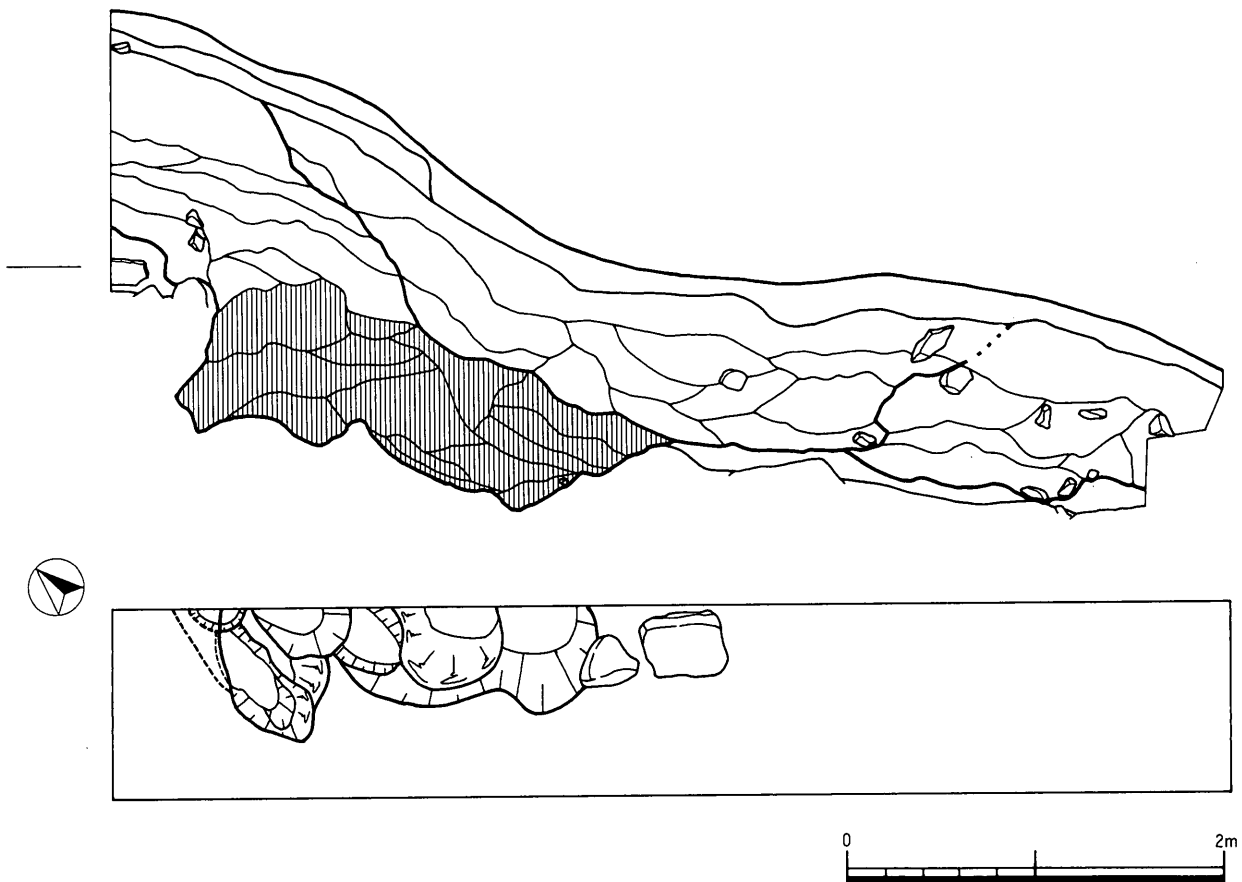
第Ⅷ層群は、白色土粒子、白色土ブロックを多量に含む褐色土層が主体であり、全体に白味を帯びる。にぶい黄橙色粘土ブロックを多量に含む土層がある。

以上の、表土層と地山層の間の土層堆積は、自然の一次堆積ではなく、人為的な二次堆積であると考えられる。

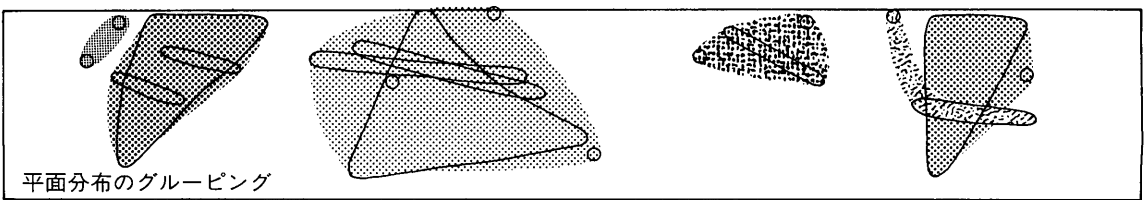
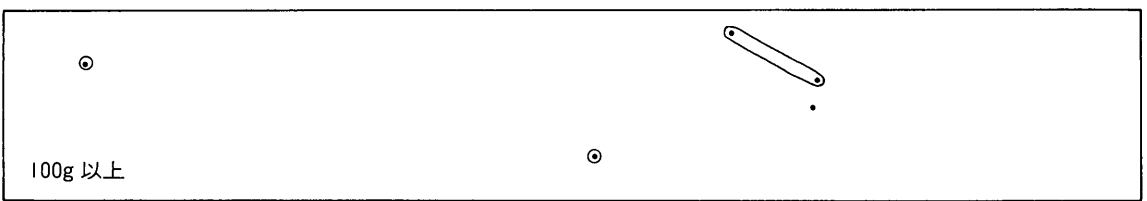
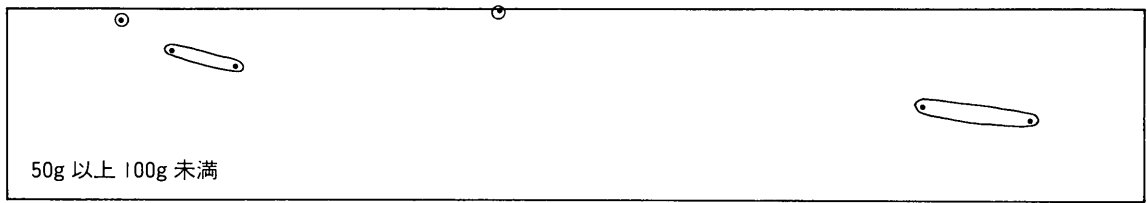
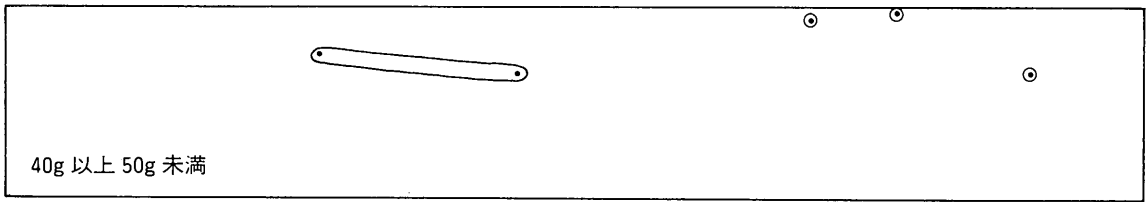
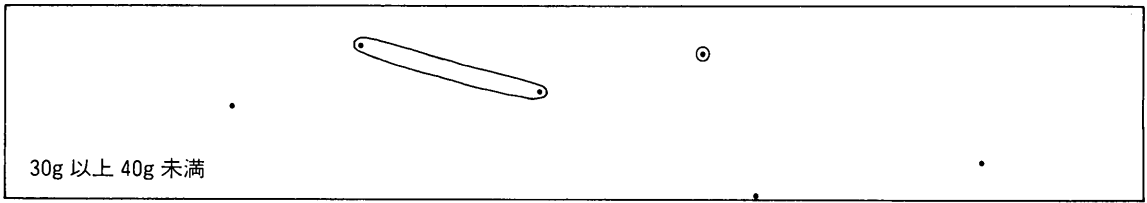
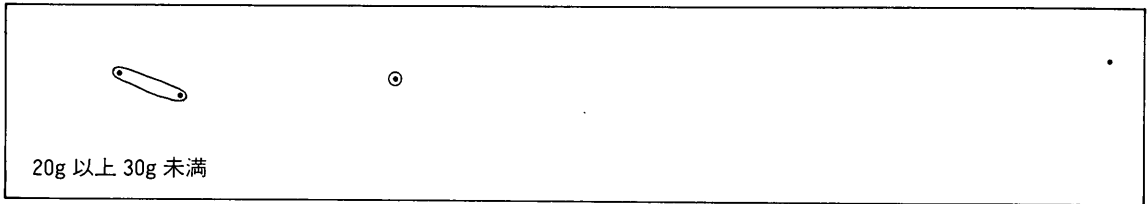
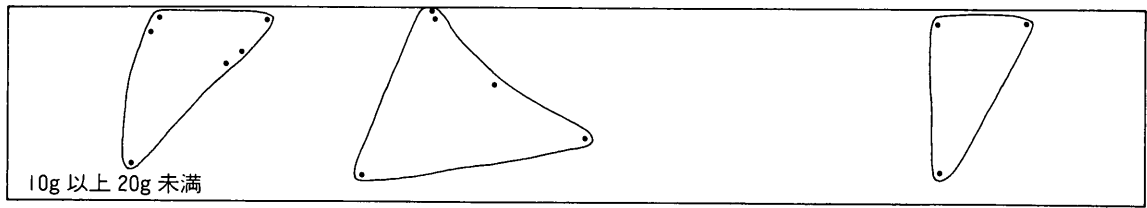
b 黒曜石採掘坑について

5トレンチの、表土層と地山層との間の土層堆積は、以上のように13の層群としてとらえられた。それはまた、第40図に示したように、3つの掘り込みに伴う層群として取られる。掘り込み1は、9号凹地の中央に位置する掘り込みであり、掘り込み2・3を切っている。掘り込み2と3は別のものと考えているが、あるいは一連のものであるかもしれない。

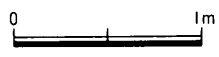
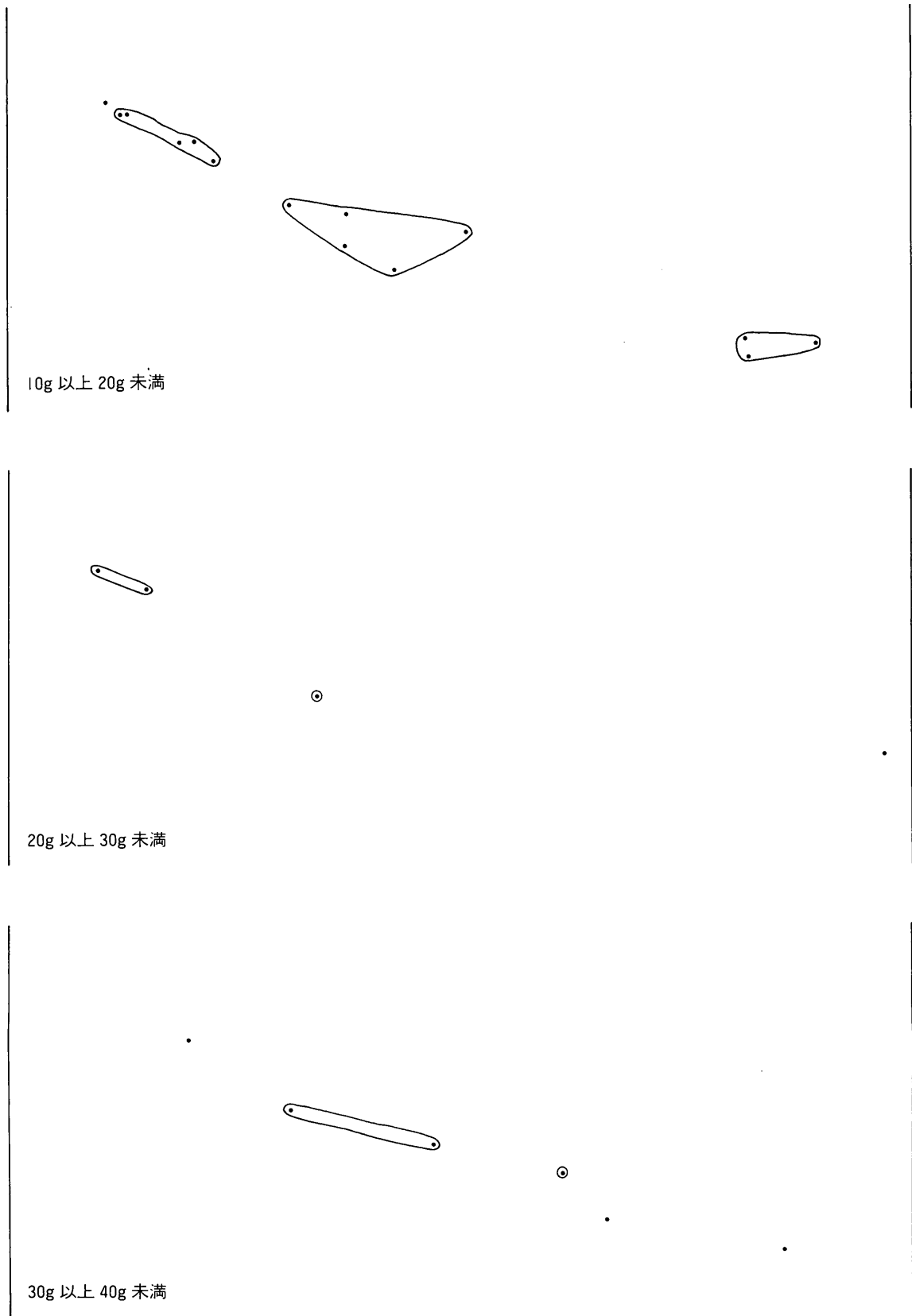
これらの掘り込みは、覆土中に量の多寡はあっても黒曜石を含んでおり、黒曜石の採掘坑であると考えてまず間違いのないであろう。ここでは、鉋床の存在はわからなかったが、それは、この3つの掘り込みが黒曜石の採掘坑であり、鉋床をすべて掘り抜いてしまったからである、と考えることができる。採掘坑の覆土にある黒曜石は、外部から持ち込まれないかぎり、鉋床から掘り出されたものであり、採掘坑の下層に鉋床がないということは、採掘坑が鉋床を掘り抜いていると考えるべきであろう。また、鉋



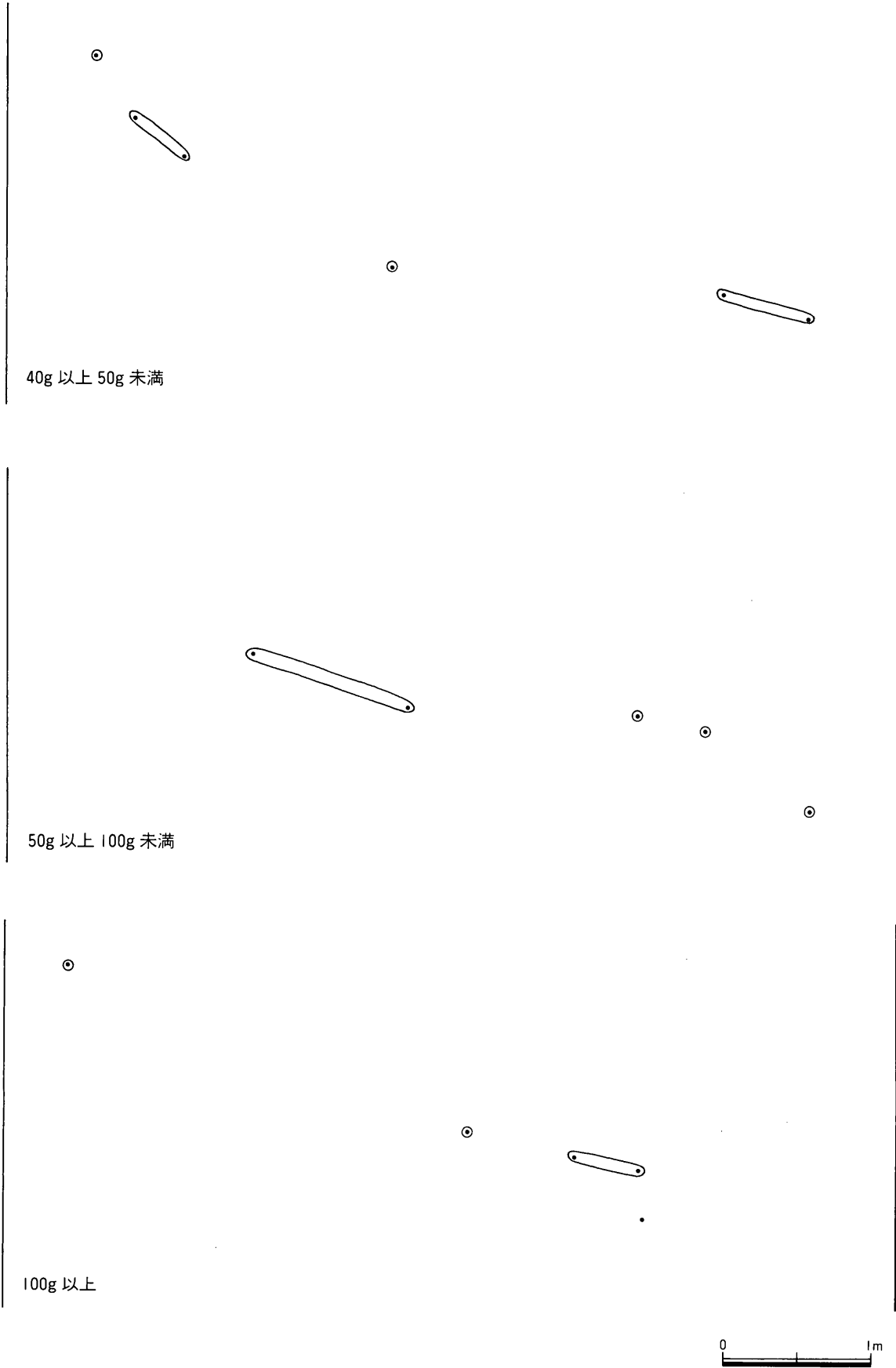
第41図 5トレンチピット実測図 (1/40)



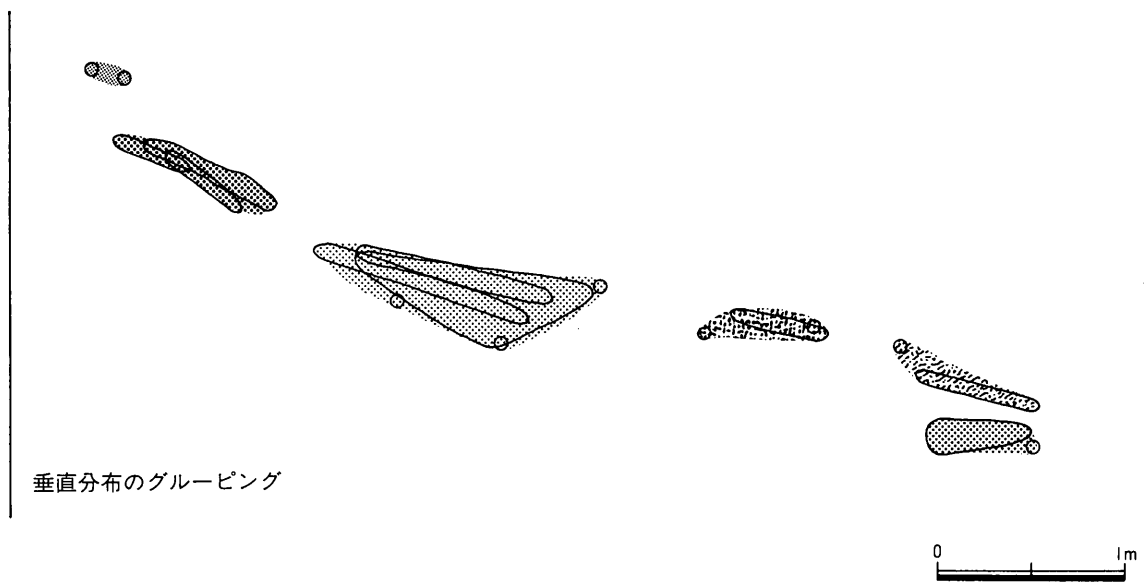
第42図 5 トレンチ黒曜石原石重量別平面分布図 (1/40)



第43図 5 トレンチ黒曜石原石重量別垂直分布図一 I (1/40)



第44図 5 トレンチ黒曜石原石重量別垂直分布図-2 (1/40)



第45図 5 トレンチ黒曜石原石重量別垂直分布図—3 (1/40)

床を掘り抜いているという点では、掘り込み2に伴う不整形なピットが（第41図）、執拗な黒曜石の探索を物語っているといえるのではないだろうか。さらに、西壁の土層断面で顕著なように、採掘活動は、大形の礫にあたると止っているが、礫と礫の間は深く掘り下げられており、このことからしても、黒曜石が確実になくなることが確認できるまでは掘り抜くという姿勢がうかがえる。

c 採掘坑覆土中の黒曜石の分布について

2 トレンチで試みたように、5 トレンチでも採掘坑覆土中の黒曜石の分布を調べてみた（第42～45 図）。出土位置を記録したのは、出土原石の一部であり十分な分析ではないが、しかし、ここでも原石はまとまりをもっている傾向がうかがえ、6ヶ所の集中としてとらえられた。おそらく選別の過程を経て、集中ごとに埋め戻されたのであろう。2 トレンチと同じ状況が5 トレンチでもとらえられたということは、採掘活動が、定まった作業工程を踏んで行なわれていることを示すのではないだろうか。

なお、5 トレンチの採掘坑覆土の原石は、節理面で割れているものが多いのが特徴である。なかには、600g 以上の原石があるが、節理が発達しているためか、採掘坑に埋め戻されている。

7 まとめにかえて

以上に述べてきたように、東俣遺跡は、縄文時代の黒曜石採掘遺跡であることが明らかになった。その根拠は、遺跡のある場所に、黒曜石を包含する地層があること、その地層の黒曜石を採掘した採掘坑があること、縄文時代の遺物が出土すること、である。そして、一片の小破片ではあるが、前期末葉の土器が出土したことから、この場所での採掘活動が、前期末葉であることが特定できた。ただし、採掘が前期末葉の一時期であるかどうかはわからない。今後引き続き解明していかなくてはならない課題である。

これまでの試掘調査では、採掘坑の確認などとともに、採掘活動の一端を知ることができた。すなわち、原石の採掘・選別・廃棄（埋め戻し）という一連の作業工程である。とくに、大ききごとの「選別」

は、集落遺跡出土の原石のあり方と照らし合わせ、理解することができる。たとえば、東俣遺跡とほぼ同時期の岡谷市大洞遺跡では、黒曜石原石が集中するブロックが5ヶ所検出されているが(市沢他1987)、それを見ると、305gから790gの大きな原石7個から構成されるブロックと、82.9gから170gの中形の原石4個からなるブロック、そして、9.2gから77.7gのもの7個、29.6gから97.7gのもの12個、34.0gから94.7gのもの7個、といった小形の原石から構成されるブロックとがある。したがって、大洞遺跡には、大・中・小の原石が搬入されているのであり、どれかに偏るということはない。重量クラスごとのまとまりをもって搬入されているのである。東俣遺跡では、採掘坑に重量クラスごとのまとまりをもって不要な原石が埋め戻されていたが、それは重量クラスごとのまとまりで搬出されていたことの暗示でもある。このように集落遺跡の原石の搬入状況と、採掘遺跡の搬出の状況が一致するということは、採掘遺跡における「選別」を裏付けるものと思われる。今後採掘遺跡の様子がさらに明らかになれば、集落遺跡の原石のあり方と採掘遺跡の原石の比較検討を通して、採掘活動から流通にいたる具体的な様相を明らかにすることができるであろう。

東俣遺跡の調査は、われわれが手がけた最初の黒曜石採掘遺跡の調査であり、何を、どのように調査をすればよいか、試行錯誤を繰り返しながら進めているところである。したがってここで報告したことも決して結論ではなく、一つの試みにもとづく仮説である。今後さらに調査を続け、仮説の実証をしていかなければならない。そうした仮説と実証を繰り返しながら、調査の方法を練り上げ、黒曜石採掘遺跡の実態に迫ってゆきたいと考えている。

V 星ヶ塔遺跡の調査

1 遺跡の位置

星ヶ塔遺跡は、霧ヶ峰火山塊の北西部にある鷲ヶ峰西方の、星ヶ塔山（標高1576m）の東斜面に位置する。遺跡は標高約1500～1540mの付近に広がる（第46図）。星ヶ塔山東斜面と鷲ヶ峰西斜面の鞍部に発する沢は、北流し、標高1390m付近で丁子沢に合流、西側へ方向を変え、砥川に合流する。したがって、諏訪湖盆からは、砥川をさかのぼり、丁子沢から鷲ヶ峰を東に見ながら、沢づたいに上れば星ヶ塔遺跡に辿りつく。

星ヶ塔は古くより黒曜石原産地として知られており、明治時代から工業用あるいは工芸品の材料としての採取や採掘が行われている。現在は、北側斜面において露天掘りによる黒曜石の採掘が行われている。

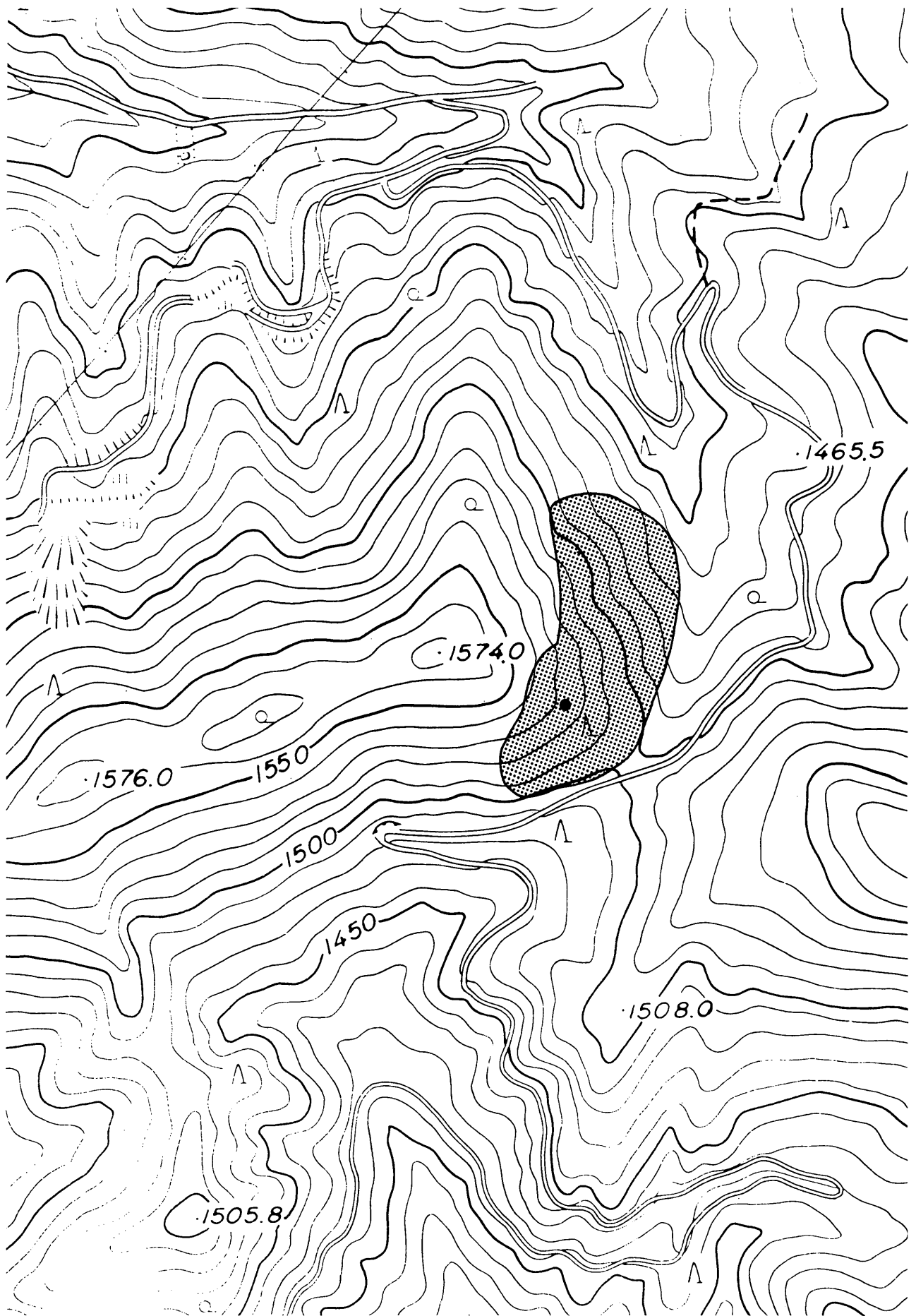
2 調査の経過

星ヶ塔遺跡の調査は、平成9年度から11年度にかけて行なっている。9年度の調査では、星ヶ塔山の東斜面において、凹み地形の集中する地点を確認した。この地点は『諏訪史第一巻』で「地面が少し窪んだところ」といわれた地点、また藤森栄一氏や中村龍雄氏が調査し、著書の中で述べられている、「凹み」の集中する地点と一致していた。9年度は凹みと、地表面が円形に盛り上がっている地形の広がりについて、南北約90m、東西約60mの範囲に広がっていることを確認した。藤森氏らの調査以降、星ヶ塔遺跡の黒曜石採掘址についての調査は途絶えていたが、9年度の再確認により、新たな調査を開始することができた。10年度は、凹みやマウンドの広がり調べること、土層の堆積状況を調べることを目的に、草刈、試掘調査を行なった。11年度は10年度に引き続き遺跡の広がり確認のための草刈り、土層堆積や採掘址の状況調べのための試掘調査を行なった。10年度の試掘調査は小規模な試掘坑であったため、土層堆積を十分に観察することができなかつたので、11年度は試掘の規模をやや大きくした。

3 凹み、マウンド地形の広がりについて

これまでに、星ヶ塔東斜面のうち、約2万㎡の範囲で地形観察のための草刈りを行っているが（第46図）、この範囲全域に、粗密はあるものの、凹みやマウンド地形が広がっていることが確認されている。この凹みやマウンド地形は、山の斜面が沢に落ち込む際から、山の中腹にかけて広がっている。南北への広がりには十分に予測され、今後調査範囲を広げ、確認してゆく予定である。

山の中腹を境に、上方には地表面に黒曜石がなく、凹みやマウンド地形もはっきりと認められない。この変換点にあたる中腹に、南北50m、東西10mのほぼフラットなテラスが形成されている。このテラ



第46図 星ヶ塔遺跡調査範囲 (ドットは試掘調査区の位置、1/5,000)

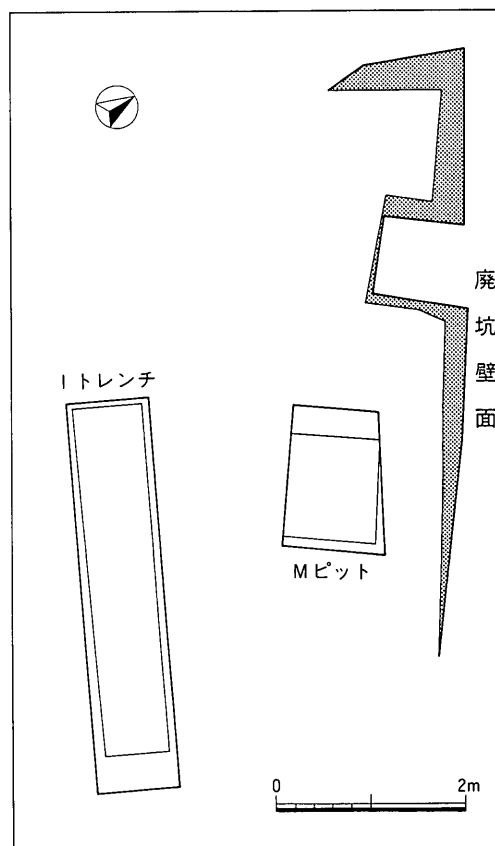
すが、鳥居龍蔵氏らの調査の際に、採掘に関わる小屋の跡と推定された場所であると考えられる（写真53・54）。

4 試掘調査

10年度は、土層堆積を調べるために、昭和時代の廃坑の壁面を若干削り取り、土層断面を露出させた。また、その断面に平行に試掘坑（Mピット…Mは調査者の宮坂をさす）を設定した（第47図）。その結果、表土と地山間の土層は、さほど厚くない小さな土層が積み重なっていることから、小さな単位の土層が繰り返し堆積したものであること、地山との境が明確であり、掘り込みと判断されること、土器や石器を含むこと、などから、廃坑及び試掘坑の断面に露出した土層断面は縄文時代の黒曜石採掘址の断面と判断した。

この土層断面の観察でとくに興味深いのは、黒曜石と流紋岩の破片からなる一単位の層が複数観察されたことである。現場の検討では、採掘で掘り出した黒曜石をある時点で選別し、不要なものをまとめて流紋岩片とともに廃棄したブロックと考えた。

11年度の試掘調査は、10年度の試掘坑のすぐ南側に試掘坑（1トレンチ）を設定し行なった（第47図）。11年度の調査では、10年度に確認された土層を断面だけでなく、平面観察でとらえることとし、そうしてとらえられた一つの層ごと、黒曜石や流紋岩のサンプリングを行なうこととした。この方法により、10年度、土層断面でとらえた流紋岩や黒曜石の廃棄ブロックを平面で確認することができた。また、一つの層の広がりや、層によって傾斜の違いがあることなどもとらえることができた。黒曜石や流紋岩のサンプリングは一つの層ごとに、現場でふるいにかけて行ない、現場作業終了後、水洗し、選別を行なっている。

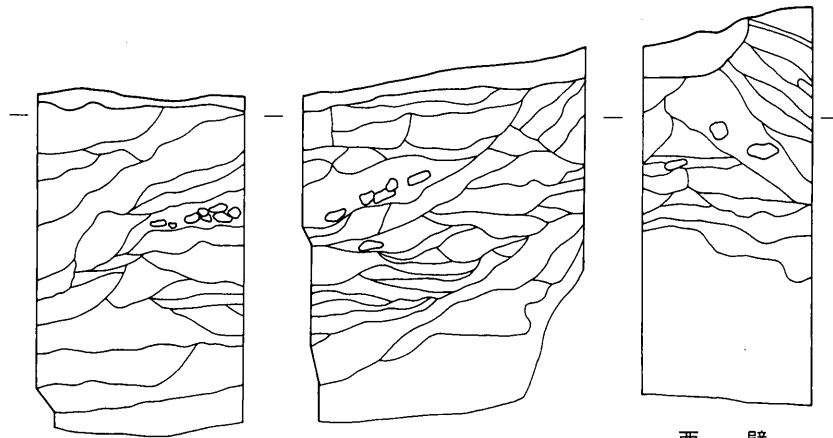


第47図 星ヶ塔遺跡試掘調査区 (1/80)

(1) Mピットの土層堆積

先に述べたように、Mピットの土層断面では、小さな単位の土層が重なり合っていることが観察された（第48図土層断面図、巻頭カラー写真）。それらの土層は、褐色土、暗褐色土、黒（褐）色土、黄褐色土、黄褐色砂質土、ベースと考えられる白色砂質土に区分される。本来最上層にあるべき黒色土が、ここでは褐色土や暗褐色土の下層に堆積しており、明らかに層位が逆転している。また、南壁に見られるように、斜面の傾斜と関係なく、水平に堆積している層もある（第48図土層区分）。

なお、堆積の傾斜の具合や、色調などの違いから、層群（あるいは掘り込み）の切り合いともいえるよ

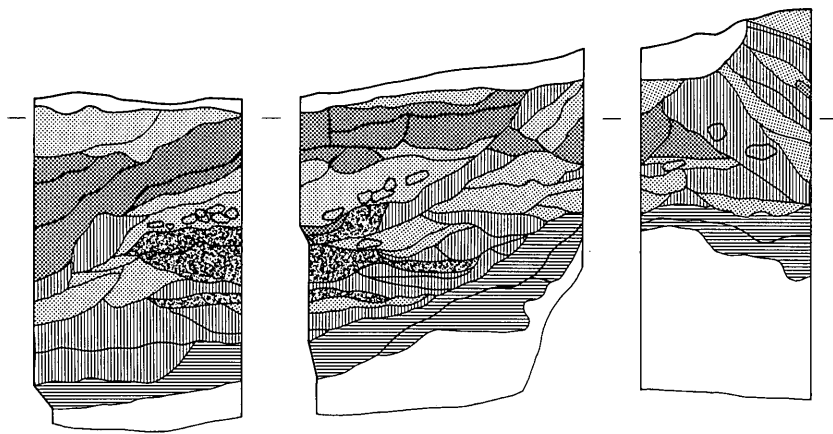


東 壁

南 壁

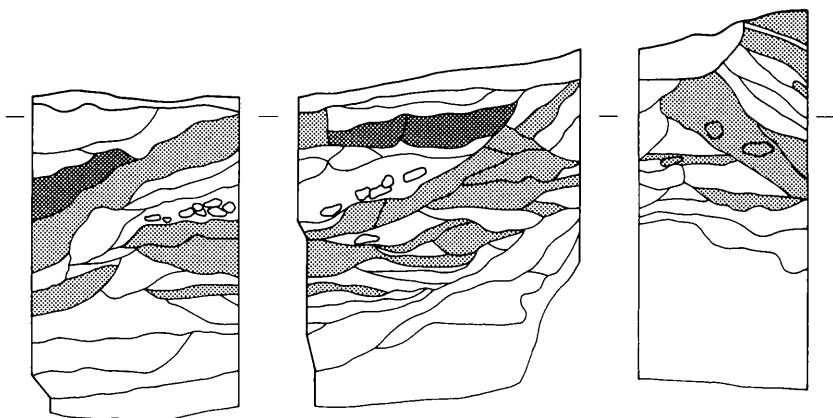
西 壁

土 層 断 面 図



- 褐色土
- 暗褐色土
- 黒(褐)色土
- 黄褐色土
- 砂質土

土 層 区 分

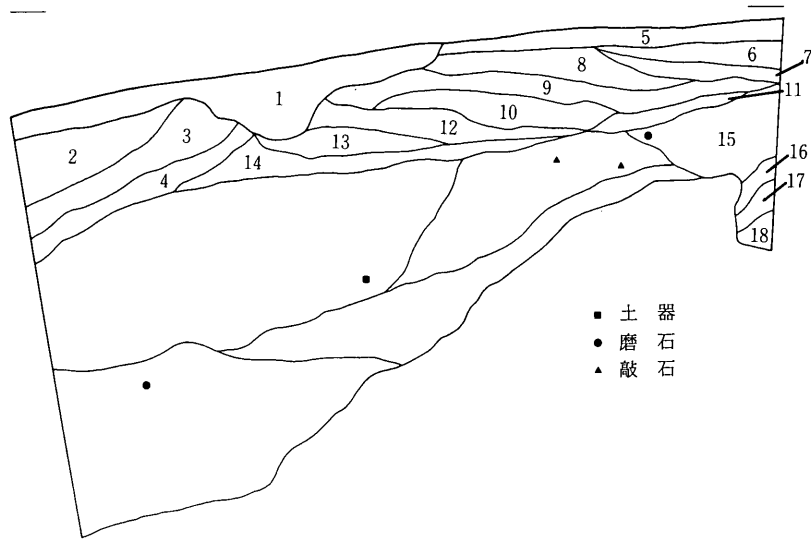


- 混土黒曜石層
- 黒曜石多量包含層

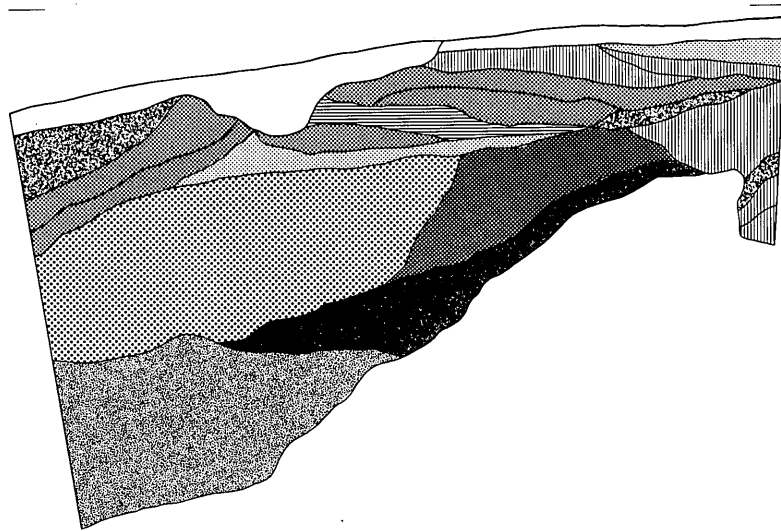
黒曜石の包含状況



第48図 Mピット土層堆積 (1/40)



土層断面図



- 褐色土
- 暗褐色土
- 黒(褐)色土
- 黄褐(橙)色土
- 砂質土
- A層群
- B層群
- C層群
- D層群

土層区分



第49図 トレンチ土層堆積 (1/40)

うな状況も見られるが、狭い範囲の調査であり、明確にはできなかった。

黒曜石の包含状況を図示したが、黒曜石を多量に含む層が何枚もあり、とくに「混土黒曜石層」ともいえる、黒曜石が主であり、少量の土が混じるといった土層も観察された（第48図黒曜石の包含状況）。また、黒曜石とともに流紋岩の破片を多量に含む層も観察され、不要な黒曜石と、採掘で出た流紋岩を一括して廃棄したものと考えられた。

以上から、Mピットの土層堆積は自然堆積ではなく、人為的な堆積であり、膨大な量の黒曜石からして、黒曜石の採掘に伴って形成された土層であると考えた。

（2） 1 トレンチの土層堆積

1 トレンチの調査は、まだ途中であり、土層堆積についても十分な観察を経ていない。したがって、ここでは詳細を報告できないが、Mピット同様に採掘に伴う人為的な堆積と考えられる状況であるので、概要を示しておきたい。

第49図は、1 トレンチの南壁の土層断面である。図面の右が斜面の上であり、自然な状態であれば右から左へ傾斜するはずである。しかし、Mピットで見られたような、斜面の傾斜とは関係なく水平や逆傾斜の土層が観察された。2～4層は斜面の傾斜の方向に傾いているが、6～14層は、ほぼ水平の堆積である。AからD層群は、細かな分層ができていないが、おおむね水平に堆積する小さな土層が重なり合っている（巻頭カラー写真、写真59）。今後の調査で、この水平堆積の形成過程を明らかにしてゆく予定である。

15から18層は、掘り込みを埋めている土層であり、トレンチの西側に採掘坑が展開していると考えられる。6～12層はこの採掘坑の覆土である可能性もある。

5 黒曜石原石

試掘調査では、膨大な量の黒曜石原石が出土している。大きさは、10g未満のものから100g以上の大形のものまでであるが、試掘で出土している原石の大半は50g以下であり、30g以下のものが圧倒的に多い。

原石の外観は、ザラつく褐色の表皮のもの、滑らかな黒色の表皮のものなど様々であり、その質感を一言でいうことはできないが、写真79のように、全体的な傾向としては、灰色の縞が入るものが多い点が多く、星ヶ塔の原石の特徴といえるかもしれない。剥片の状態でも、灰色の縞をもつものも多く認められる。色調は、薄い飴色の、いわゆる透明ガラスといったものや、青みがかかったものなどがある。ウツギ沢の原石のような点状の不純物はほとんど含まれない。

6 出土遺物

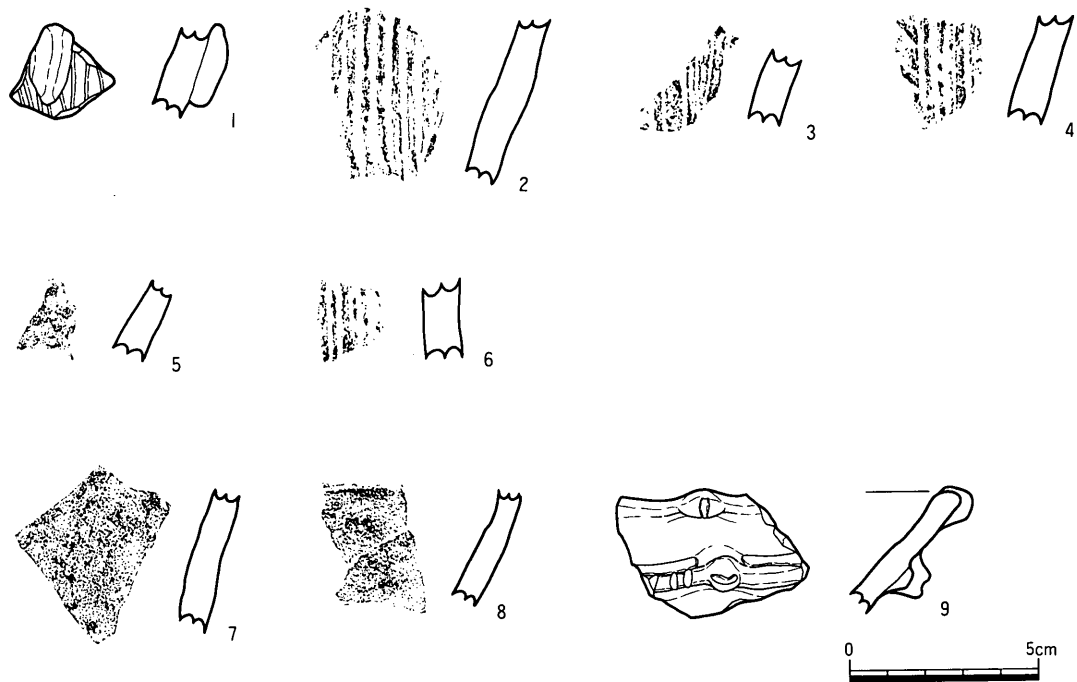
土 器

10年度のMピットからは、縄文時代前期末葉の土器片1点（第50図6）、廃坑の断面精査では、後期後半から晩期前半の土器片2点（第50図7・8）が出土した。いずれも黒曜石採掘坑の覆土と考えられる

土層からの出土である。

11年度のⅠトレンチからは、縄文時代前期末葉の土器片が5点出土した（第50図1～5）。

第50図9は、試掘調査区の上方の中腹テラスにあって、採掘業者が近年掘った穴から出土したものと思われる土器である。宮坂が平成5年に訪れた際に採集した。



第50図 星ヶ塔遺跡出土土器 (1/2)

以下、出土土器について記述する。

1～6は縄文時代前期末葉の土器である。いずれも深鉢の体部破片である。1～4・6は地文に半裁竹管による縦位の平行沈線が施され、4には矢羽状の構成がみられる。また、1には地文上に棒状の貼付文が施される。1～3の胎土は褐色を呈し、胎土・地文の特徴などから同一個体かと思われるが、接合関係にはない。4～6の胎土は赤褐色を呈し、白色の砂粒を含む。

7～9は縄文時代後期から晩期のもと思われる土器である。

7は無文の体部破片であり、外面は黒褐色を呈し炭化物が多量に付着する。8は無文の体部破片で、器壁は7 mm程度と薄く、ゆるやかに湾曲しながら立ち上がる。内外面とも丁寧に磨かれており、外面は黒褐色を呈す。

9は、縄文時代晩期のもと思われる土器の口縁部破片である。口縁部はゆるやかな波状を呈し、その頂部に瘤状の突起をもつ。口縁部下には棒状工具により押圧された隆帯が貼付され、隆帯の上位には隆帯に沿う太い沈線がひかれる。胎土は赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。 (田 中)

石 器

MピットやⅠトレンチからからは、黒曜石製の剝片、石核など多量の石器が出土している。とくにⅠトレンチのサンプリングでは、小さな剝片にまで目が行き届くようになった。いまのところ石鏃など縄文時代の定形的な石器は出土していない。自然面の残っている剝片が多いことから、石器製作の初期工

程を採掘とともに行なっていたと考えられそうである。これらの黒曜石製の石器については、基礎整理を進めている段階であり、今後分析をしてゆく予定である。

1 トレンチからはそうした黒曜石の石器製作にかかわる、敲石が出土している。棒状敲石2点、敲石と磨石を兼ねたもの4点が確認された(写真73・74)。また、小形で円盤状に整形された磨石が1点出土しているが、石器製作に関わるものであろうか(写真72)。

なお、黒曜石製の石器の中には、旧石器時代の尖頭器未製品が複数認められ(写真71)、尖頭器の調整剥片も多数検出されている。縄文時代の採掘坑が旧石器時代の包含層を壊しているのかもしれない。旧石器時代の遺物については、包含層の追及とともに、次回以降に報告することにした。

さらに、石器であるかどうかは現在も検討中であるが、採掘時に掘り出された流紋岩の中に、浅い凹み認められるものが多数ある。石の大きさやかたちはまちまちである。なんらかの作業に利用していた可能性を考え、観察を続けている。

7 調査のまとめと課題

以上、星ヶ塔遺跡の調査の概要について述べてきたが、今のところ草刈りがおもな作業であり、遺跡の内容を具体的に記述するに至っていない。部分的な試掘により、採掘坑の一部や、採掘に伴う土層堆積が確認された程度である。しかし、試掘調査で土器が出土したことにより、星ヶ塔における黒曜石の採掘活動が、縄文時代前期末葉にさかのぼることが明らかになったのは、注目される。いままでは、縄文時代後期・晩期の土器が出土していることから、縄文時代後期から採掘活動がはじまり、晩期に採掘が盛行するという見方が定着していたが、それをはるかにさかのぼる時期から採掘が行われていたことが明らかになったことは、重要である。また、東俣遺跡も縄文時代前期末葉の採掘遺跡であることから、該期が、採掘活動の盛行期であったということも十分に考えられる。

星ヶ塔遺跡については、今後も黒曜石採掘址の拡がり把握する調査を継続する必要がある。また、縄文時代に、どの層にある、どのような黒曜石を採掘していたのかを知るために、黒曜石の本来の埋蔵状況についても調査を行なわなければならない。個々の採掘の規模や、詳しい時期を調べる発掘も必要であろう。とにかく調査は始まったばかりであり、課題が山積しているのが現状である。今後そうした課題を整理し、それを解明する調査を実施してゆきたいと考えている。

VI 黒曜石原産地の鉱山化について

星ヶ塔の黒曜石の、とくに良質なものを、山越えてここまで出し、交易のために、まず、秘密に貯蔵したのである。だれが？ たぶん、この近くの前期末から中期初頭の村の人、指名するなら、踊場村、穴場村、唐沢村など、いまもう滅び去った村が浮かぶ。地点からいって、いちばん近いのが唐沢村、土器から時間的に考えると、踊場村である。

黒曜石は流れていった。

いろいろなものが、その道をつたって、またかえってきた。塩・貝・乾物をはじめ、いろいろなめずらしい土器などである。

オブシディアン・ラッシュ
黒曜石狂時代がおこりつつあった。(藤森栄一『古道』)

(1) 黒曜石原産地の鉱山化とオブシディアン・ラッシュ

藤森栄一氏は、洞窟の中から、トラック一台ほどの黒曜石と、諸磯c式土器とが発見された、諏訪市の「神籠石」を、「交易」のための「秘密」の「貯蔵」場所と呼び、周辺にある「諸磯c式土器」と同じ頃の遺跡の住人をその貯蔵をした人々と考えた。そして、大量の黒曜石が「交易」するさまを、ゴールドラッシュになぞらえ「オブシディアン・ラッシュ」と呼んだのである。

本書で報告したとおり、東俣遺跡、星ヶ塔遺跡の調査では、縄文時代前期末葉に黒曜石の採掘が行われていたことが明らかになった。それは、藤森氏のいう「オブシディアン・ラッシュ」のはじまりと同じ時期である。とすると、「オブシディアン・ラッシュ」は、黒曜石の採掘すなわち黒曜石原産地の「鉱山化」と深くかかわっていると考えることができそうである。

ここで目を中部高地の周辺に向けてみよう。縄文時代前期末葉では、北陸、新潟、北関東などで霧ヶ峰産の黒曜石が量的にまとまって出土する傾向がうかがえる。星ヶ塔遺跡で出土した諸磯c式土器と類似した土器が出土している、群馬県糸井宮前遺跡では、6 kg以上にのぼる多量の黒曜石が出土しており、産地推定分析では、ほとんどが星ヶ塔産と推定されている(鈴木ほか1986)。大工原豊氏によれば、群馬県内では、諸磯b式期以降黒曜石が激増するが、諸磯b式中段階までは和田峠産の黒曜石が卓越し、諸磯b式新段階から諸磯c式期にかけては星ヶ塔産の黒曜石が卓越する傾向があるという(大工原1998)。

新潟県では、黒曜石の利用が顕著な、角田山麓の縄文時代遺跡群で黒曜石の産地推定分析が行われ、遺跡群の黒曜石利用の時期別変遷が明らかにされている(金山ほか1995)。それによれば、前期末葉から中期前葉中段階に黒曜石が高い頻度で利用され、高利用多出遺跡、高利用寡出遺跡、低利用寡出遺跡の3類型に分けられるという。利用されている黒曜石は、星ヶ塔産のものが卓越している。また、角田山麓の「対岸の佐渡島の同時期遺跡でも信州産黒曜石の利用が顕著にみられるが、至近距離に位置する当地A類型(高利用多出遺跡…宮坂)の集団がその供給に関与したことも推定される」と述べられている。その後の中期前葉新段階では黒曜石の利用率は低下し、さらに後晩期になると利用率は「かなり低下する」という傾向がとらえられている。

北陸地方の黒曜石の石器については、平口哲夫氏がまとめているが、それによれば、石川県では真脇

遺跡、三井新保遺跡、徳前C遺跡で、前期後葉から中期前半に属する黒曜石製の石器が出土し、いずれも霧ヶ峰産と推定されている。平口氏は、「石川県内では縄文時代を通じて黒曜石製遺物の出現率は低いけれども、中期中葉～後葉の時期に微増し後期から晩期にかけての時期には前期後葉から中期前葉の水準よりもさらに低下したといえそうである」と述べている（平口1996）。ということは、後期から晩期よりも前期後葉から中期前葉のほうが出現率が高いということであり、産地推定分析の結果を加えると、搬入ピークの中期中葉から後葉よりも少ないが、前期後葉から中期前葉に、霧ヶ峰産の黒曜石がある程度まとまった数量、北陸に搬入されているといえそうである。

こうした、中部高地の周辺地域の状況を見ると、全般的に前期末葉に霧ヶ峰産の黒曜石の搬入が増加するという傾向が指摘できる。これは、前期末葉にはじまった「オブシディアン・ラッシュ」が本州中部地方におこった出来事であったことを示しているのではなかろうか。

このような、本州中部地方における黒曜石の増加現象は、黒曜石の安定的な供給を背景にしていると考えられる。その供給を支えたのが、「採掘」による安定的な数量の確保であったと考えたい。したがって、「オブシディアン・ラッシュ」は、黒曜石原産地の「鉱山化」と一体化した現象であったといえることができるであろう。

しかし、黒曜石が安定的に確保できるといっても、それを流通させる何らかの「仕組み」がなければ多量の黒曜石を広域的に運ぶことは不可能であろう。したがって、前期末には広域に物資を流通させるような、広域的な社会の仕組みが確立していたと考えたい。そうした社会の仕組みと黒曜石採掘の相関が、黒曜石の広域流通を可能にしたのではないだろうか。とすると、黒曜石原産地の「鉱山化」は、社会の仕組みと深く関係すると考えられる。

（2）オブシディアン・ラッシュと硬玉製品の出現

広域的な物資の流通ということでは、前期末葉の集落である、下諏訪町武居林遺跡の硬玉原石や石斧（いわゆる玉斧と呼ばれるもの）が注目されよう（下諏訪町教育委員会1979）。武居林遺跡は黒曜石原産地と諏訪盆地をつなぐ砥川の流域にあり、諏訪盆地では黒曜石原産地に一番近い前期末葉の集落である。その立地条件からすれば、黒曜石の採掘者のムラである可能性が高い。武居林遺跡と沢を挟んで隣接する、前期末葉から中期初頭の土坑が集中して検出された一の釜遺跡は、武居林遺跡と相互に関係をもつ遺跡と考えているが、その一の釜遺跡では黒曜石の貯蔵ピットが検出されている。そうした諸要素からすると、武居林遺跡を採掘者のムラと考えることもあながち無理なことではないかもしれない。このあたりについては、今後詳細に検討をしてゆきたいが、いずれにせよ、黒曜石原産地と密接に関わっていると考えられるムラで、硬玉の原石や石斧が出土しているということは注目できよう。

長崎元廣氏によれば、硬玉などを素材とするいわゆる玉斧は、縄文時代前期末葉に出現し、その後中期に盛行、後晩期にかけても東日本の広い範囲に分布するという（長崎1984）。武居林遺跡の硬玉製の玉斧は、まさに出現期のものに位置づけられよう。

また、安藤文一氏は、新潟県糸魚川市付近の硬玉原産地周辺地域では、硬玉製品の生産は前期中葉に遡ることはなく、前期末葉から中期初頭に出現すると推測している（安藤1995）。

硬玉製品の出現を前期末葉から中期初頭であるとすると、それは「オブシディアン・ラッシュ」のはじまりと同時期ということになる。安藤氏によれば、硬玉原産地周辺の前期中葉以前の遺跡では、硬玉

の小礫すら出土しないという（安藤前掲）。とすると、和田峠や霧ヶ峰における黒曜石原産地の「鉱山化」と、硬玉原産地の開発とは時を同じくしているということになるのであろうか。

本州中部地方におこった、広域流通物資をめぐるこの二つの出来事は、おそらく、相互に関連する出来事であり、黒曜石や硬玉といった広域流通物資を動かす、広域的な社会の仕組みの確立を背景におこった出来事であろう。そして、その関連の交点のひとつが武居林遺跡であると考えられる。

東俣遺跡、星ヶ塔遺跡の鉱山化は、その場所で局地的に起こった出来事ではなく、当時の社会の大きな動きの中で起こった出来事と考えるべきであろう。ここでは硬玉に注目したが、それ以外にも、たとえば、打製石斧の増加もこの時期の変化の一つにあげられる。今後あらゆる事象に目配りし、黒曜石原産地の鉱山化を体系的に考えていかねばならない。

（3） 中期への胎動

黒曜石原産地の鉱山化、「オブシディアン・ラッシュ」、硬玉製品の出現が相互に関連する出来事であることを以上に述べてきた。そしてその背景に、広域的な物資の流通を可能にした、社会の仕組みを想定した。では、その社会の仕組みとは何であるのか。いまここでそれに答える用意はないが、林謙作氏のつぎの指摘が、大きなヒントをあたえてくれるものと思う。

「縄文人は〈ハードウェア〉である労働要具そのものを発達させる代りに、〈ソフトウェア〉を発達させ、生産の水準を維持し、向上させたのである。〈ソフトウェア〉にあたるのは、呪物や呪術そのものではなく、彼らの作り上げた村落の組織、地域間の結び付き、そしてそこで展開される労働の組織である（呪物や呪術は〈ソフトウェア〉を運用する方法の主観的な表現とその媒介物である）」（林1986）。

林氏の言葉を借りれば、ここで述べてきた広域的な社会の仕組みとは、「地域間の結び付き」という言葉に置き換えられようか。とすると「地域間の結び付き」の発達が黒曜石や硬玉を流通させる原動力となったということが出来る。黒曜石の場合では、流通を安定的に行うために、複数の場所で採掘が行われているが、採掘・排土処理・原石の選別・粗割り・原石の搬出など、複数の工程を踏む一連の作業を効率的に行うためには、労働組織の発達が欠かせない。そうした労働組織の編成や地域間の結び付きを維持するのが、村落の組織であったと思われる。

本州中部地方の縄文時代前期末葉は、このような組織、すなわち人間相互における働きかけが発達した時期であり、それはまさに中期への胎動であったということが出来るのではないだろうか。そのような中期への発展を内在させた組織の発達が、新たな自然への働きかけである、黒曜石原産地の鉱山化を可能にしたのである。逆にいえば、前期末葉の黒曜石原産地の鉱山化は、中期の発展の前提となった一つの現象であるということができよう。あるいは、黒曜石原産地の鉱山化や、硬玉製品の出現、打製石斧の増加など、人々の、自然に対する新たな働きかけと、人間相互における働きかけの発達、といった構造的な変動をもって、縄文時代中期の社会構成の成立とすることも意味のあることかもしれない。

VII 結 語

平成5年度からはじまった黒曜石原産地遺跡分布調査では、「どこに黒曜石があるのか」を明らかにするための黒曜石分布調査と、「黒曜石を利用した人々の残した遺跡」の分布調査を実施している。黒曜石の分布については、おおまかに把握することができた。そして、黒曜石が分布する場所のうち、東俣遺跡と星ヶ塔遺跡では、縄文時代において、地上にある黒曜石だけではなく、地下にある黒曜石を掘り出して利用していることがわかった。

黒曜石の利用は、後期旧石器時代からはじまり弥生時代まで続くが、その長い時間のなかのある時期、採掘活動は行われていると考えられる。東俣遺跡では縄文時代前期末葉、星ヶ塔遺跡では縄文時代前期末葉、後期、晩期が今のところ明らかになっている採掘の時期である。ある特定の時期に採掘が行われている、ということは、採掘が行われない時期がある、ということでもある。なぜ採掘する時期と採掘しない時期とがあるのか。採掘する時期と採掘しない時期とでは何が違うのか。第VI章では、採掘する時期について素描を試み、縄文時代前期末葉の採掘は、黒曜石原産地における局地的に発生した出来事ではなく、硬玉製品の生産の開始や打製石斧の増加など、様々な出来事と連関することを指摘した。そして、そうした新たな自然への働きかけは、人間相互の働きかけの発達と一体化していると考えた。このような考え方からすれば、黒曜石の採掘はその社会構成の諸関係のなかで説明されるといえる。とすると、採掘しないということも、その時期の社会構成の諸関係のなかで説明されるべき事柄である。さらに、黒曜石原産地周辺に遺跡を形成する時期と遺跡を形成しない時期という、二つの対立するあり方も、社会構成の通時的変化の中で説明されよう。

黒曜石原産地の利用の仕方は、それぞれの時代、時期ごとの社会構成にもとづいて変化するのである。それゆえ、労働対象としての黒曜石原産地は、歴史的変化をもった存在なのである。したがって、われわれは、労働対象としての黒曜石原産地の利用の仕方を究明し、その変遷をとらえ、社会構成のさまざまな諸関係との連関を構造的に把握、再構成し、歴史の叙述へと進んでいかねばならない。そのようにして、統一された全体像を描き出すことによって、黒曜石原産地、黒曜石原産地遺跡の保存と活用の方角が見出せるのではないだろうか。そのような全体像を描くことを目指し、今後も山に入って行きたいと考えている。

引用・参考文献（第II章の周知の遺跡に関する文献をのぞく）

- 安藤 文一 1995「翡翠」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 市沢 英利・三上 徹也 1987「大洞遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 金山 喜昭 1992「先史時代の黒曜石研究史」『法政考古学』第17集 法政考古学会
- 金山 喜昭・鈴木 正男・前山 精明 1995「縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回研究発表要旨』日本考古学協会
- 絹川 一徳 1995「石器原石の獲得と石器生産」『展望考古学』考古学研究会
- 鈴木 正男・福岡 久・金山 喜昭・戸村 健児・関根 慎二 1986「糸井宮前遺跡の黒曜石分析」『糸井宮前遺跡』II 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大工原 豊 1998「黒曜石の産地及び年代の推定に関するコメント」『中野谷松原遺跡』安中市教育委員会
- 高見 俊樹 1998「黒曜石をめぐる研究史」『第12回長野県旧石器研究交流会発表資料』
- 戸沢 充則 1977「岩宿へのながい道」『季刊どるめん』第15号、『縄文人との対話』名著出版
- 鳥居 龍蔵 1924『諏訪史第一巻』信濃教育会諏訪部会
- 長崎 元廣 1984「縄文の玉斧」『信濃』36—4 信濃史学会
- 中村 龍雄 1977『黒曜石』上巻
- 林 謙作 1986「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学』5 岩波書店
- 平口 哲夫 1996「黒曜石遺物の過少地域と黒曜石原産地」『和田村の黒曜石をめぐる課題』和田村教育委員会
- 廣松 渉 1986「生態史観と唯物史観」『廣松渉著作集』第11巻 岩波書店
- 藤森 栄一 1963「原始時代」『下諏訪町誌』上巻 下諏訪町誌増補版編纂審議会編
- 藤森 栄一 1999『古道』講談社学術文庫
- 藤森 栄一・中村 龍雄 1962「星ヶ塔黒曜石採掘址」『古代学』11—1、『藤森栄一全集』第12巻 学生社
- 明治大学鷹山遺跡群調査団 1999『長野県黒曜石原産地遺跡群の研究』
- 宮坂 清 1997「和田峠周辺の旧石器遺跡の調査—下諏訪側—」『第9回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』
- 宮坂 清 1998「和田峠・霧ヶ峰の黒曜石原産地と遺跡群」『第10回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』
- 宮坂 清 2000「黒曜石原産地遺跡の調査から」『第12回長野県旧石器文化研究交流会発表資料』

版 图

1. 遺跡近景（北側尾根上から）（2000）
手前は18号凹み



2. 凹みの密集部分（北側から）（2000）



3. 11・10・8号凹み（北側から）（2000）





4. 調査開始時の 6 号凹み周辺 (1994)
背丈ほどもある笹を刈り取ることから調査は始まった



5. 笹刈り取り後の 6 号凹み周辺 (1994)



6. 笹を刈り取り明らかになった雑段状の地形 (1994)

7. 雑段状の地形（東側から）
（1994）



8. 雑段状の地形（1994）
右側の人物は6号凹み、左側の人物は3号凹みに立っている



9. 雑段状の地形（尾根上から）（1994）
中央の人物は3号凹み、右の人物は2号凹み、左の人物はマウンドに立っている





10. 3号凹み（東側から）
（1994）



11. 3号凹みとマウンド
（北側から）（1994）
右の人物は3号凹みに、
左の人物はマウンドに立
っている



12. 3号凹みとマウンド
（西側尾根から）（1994）
左の人物は3号凹みに、
右の人物はマウンドに立
っている

13. 15号凹み（南から）（2000）



14. 1号凹みと土層断面
（1994）

地表の凹みが土層断面の落ち込みに対応する



15. 1号凹み土層断面（1994）





16. 2・6トレンチ全景
(東側から) (2000)



17. 6トレンチ黒曜石包含
層の原石出土状況(東
側から) (1995)

18. 2・6トレンチ全景
(北側尾根上から)
(2000)



19. 2・6トレンチ北壁
土層断面 (2000)
画面右端が黒曜石採
掘坑の掘り込み



20. 2・6トレンチ北壁
土層断面 (2000)
黒曜石採掘坑の掘り
込み





21. 2トレンチ中層黒曜石原石出土状況(1994)



22. 2トレンチ上層黒曜石原石出土状況(1994)



23. 2トレンチ下層黒曜石原石出土状況(1994)

24. 2・6トレンチ南壁炭
化物を多量に含む層群
(第Ⅲ層群)土層断面
(2000)



25. 2トレンチ南壁第Ⅲ層
群凹石出土状況(1994)



26. 2・6トレンチ拡張区
第Ⅲ層群の掘り込み
(2000)





27. 2・6 トレンチ拡張区全景（北側から）（2000）

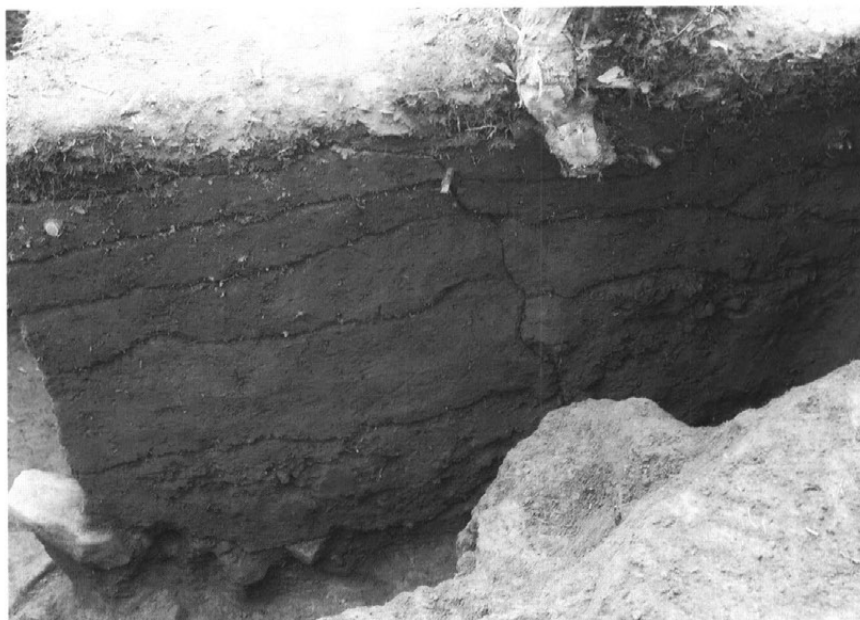


28. 2・6 トレンチ拡張区黒曜石採掘址の掘り込み（北側から）（2000）



29. 2・6 トレンチ拡張区黒曜石採掘址の掘り込み（東側上面から）（2000）

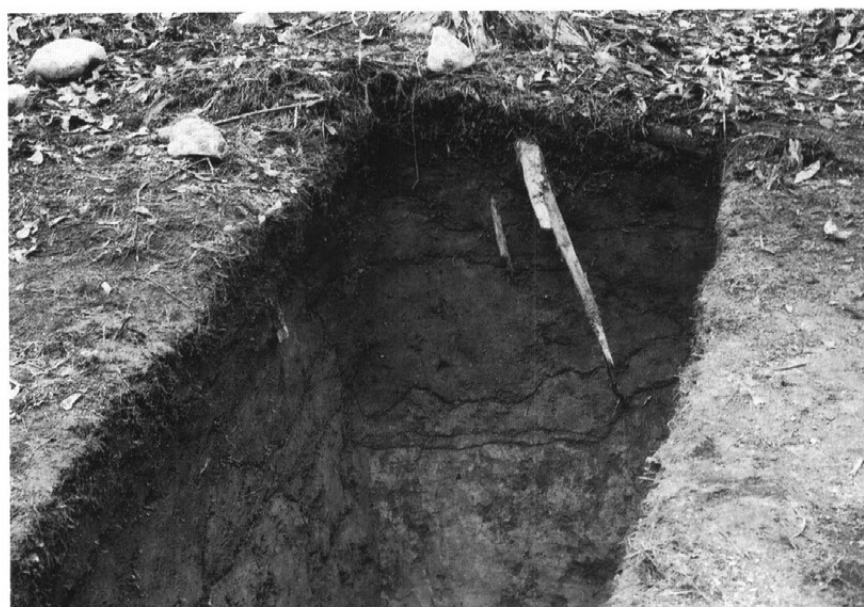
30. 2・6トレンチ拡張区
東壁土層断面 (2000)



31. 6トレンチの第IV層群に堆積
しているロームブロック
(2000)



32. 2・6トレンチ西端の
壁面で検出された、炭
化物を多量に含む土坑
状の落ち込み (2000)





33. 3 トレンチ黒曜石原石
出土状況 (2000)



34. 3 トレンチ西壁土層断
面 (2000)

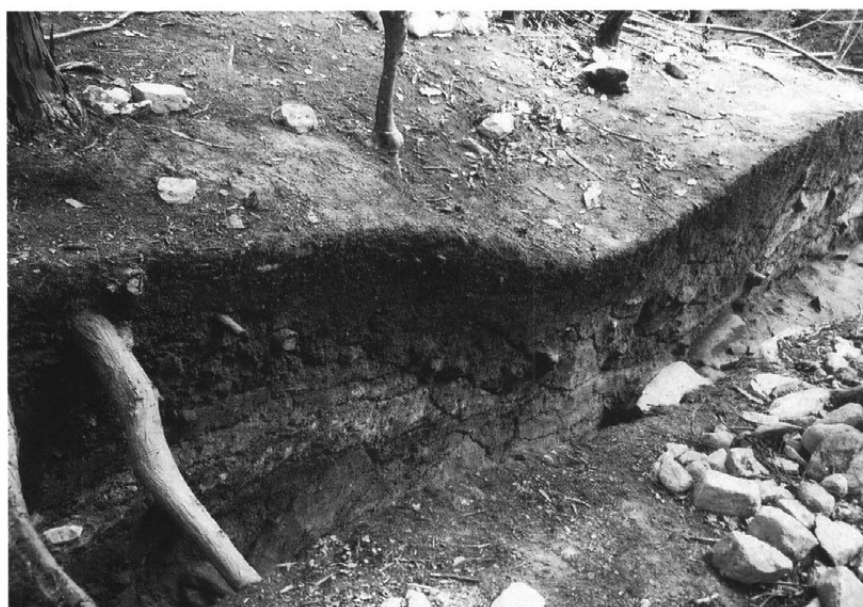


35. 3 トレンチ西壁土層断
面 (2000)

36. 9号凹み(東側から)
(2000)



37. 5トレンチ東壁土層断面
面(尾根上から)(2000)



38. 5トレンチ東壁土層断面
面(斜面下側から)(2000)





39. 5トレンチ東壁土層断面 (2000)



40. 5トレンチ西壁土層断面 (2000)



41. 5トレンチ西壁土層断面 (2000)



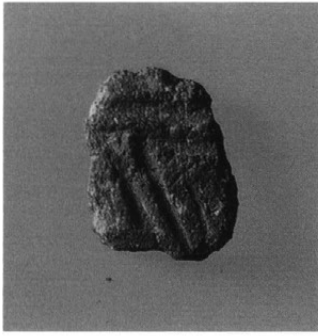
42. 5トレンチ地山を掘り込むピット (2000)



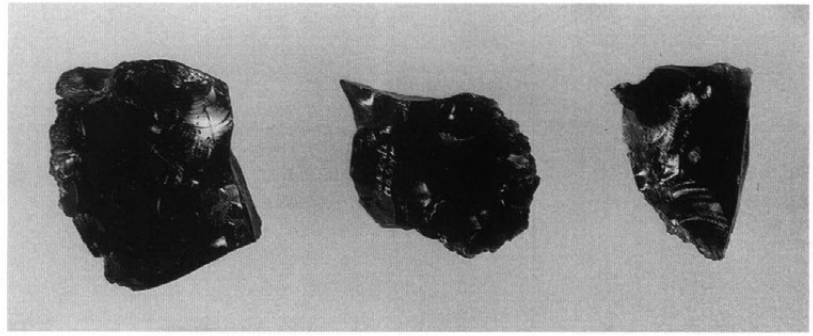
43. 5トレンチ全景 (2000)



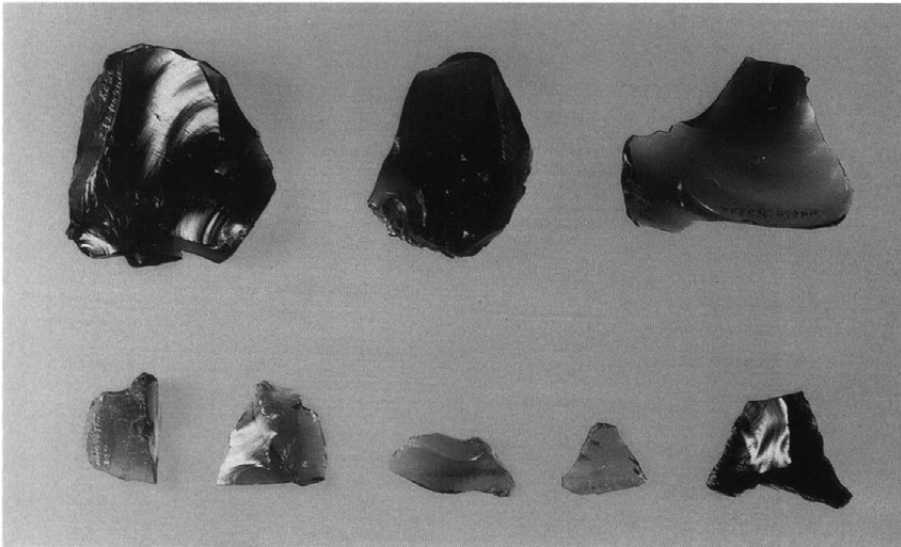
44. 5トレンチ地山を掘り込むピット (2000)



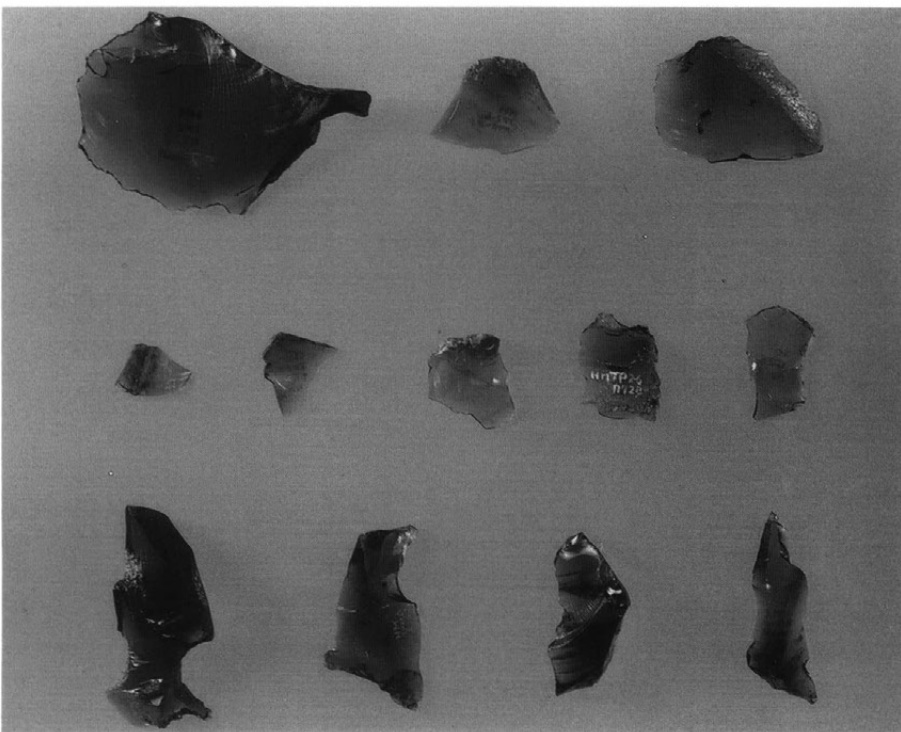
45. 2・6トレンチ
拡張区出土土器



46. 2・6トレンチ 石核・両極石器



47. 2・6トレンチ出土剝片



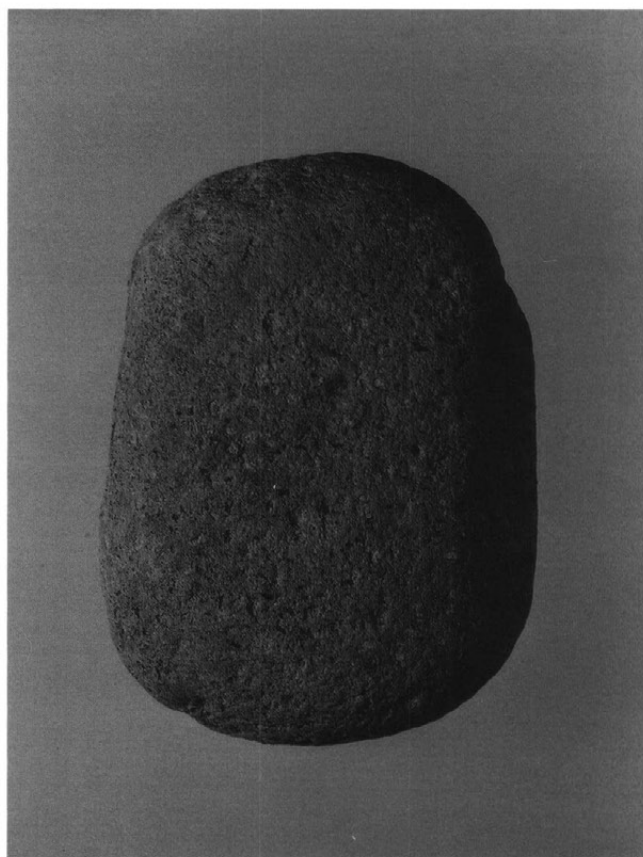
48. 2・6トレンチ拡張区出土剝片



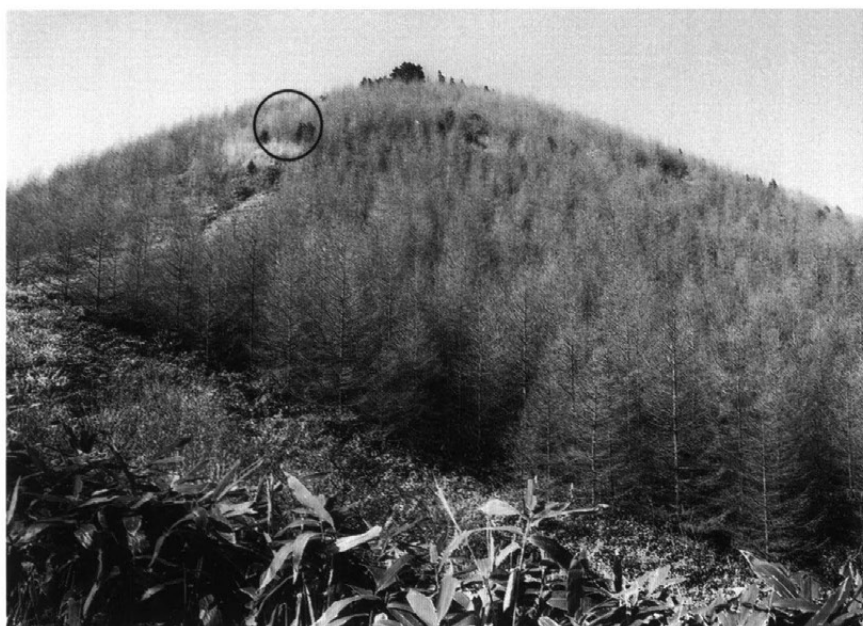
49. 6トレンチ黒曜石包含層出土黒曜石



50. 2トレンチ出土凹石



51. 6トレンチ出土凹石



52. 星ヶ塔遺跡近景（星ヶ塔林道から）（1997）
○の場所が試掘調査区



53. 中腹のテラス（南側から）（1998）
諏訪史第一巻で堅穴の跡と指定された凹みはこの場所と考えられる



54. 中腹のテラスと鷲ヶ峰（1998）
テラスに立つ人物は鷲ヶ峰を正面にしている

55. 凹みとマウンドが連なる地形 (1997)



56. 規模の大きな凹み (1997)



57. 上の凹みを横から見たところ (1997)
右端の人物が凹みの中心に立っている





58. 試掘調査区（北側から）
(1999)



59. Iトレンチ南壁土層断面
面（1999）



60. Iトレンチ南壁土層断面と掘り込み（1999）

61. Iトレンチ上層流紋岩
集中 (1999)

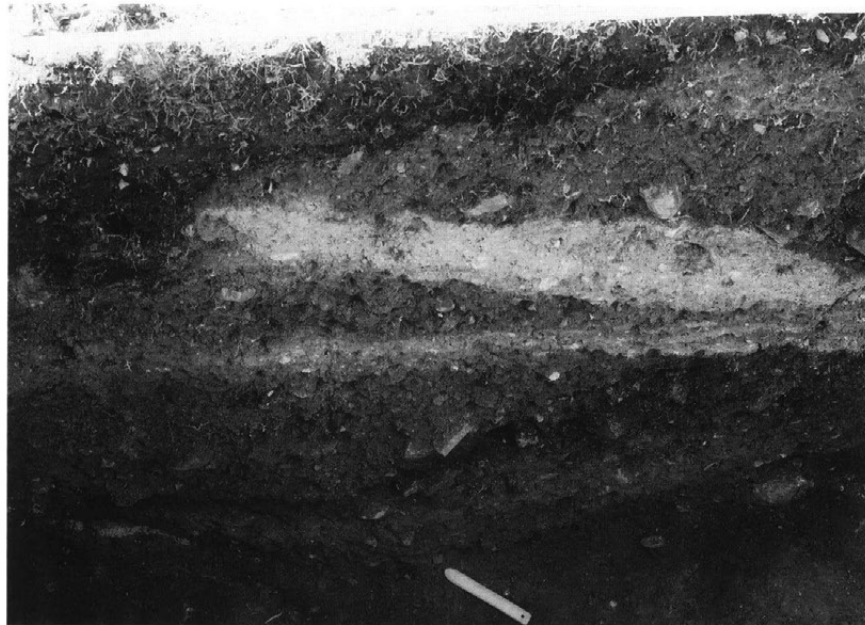


62. Iトレンチ下層流紋岩
集中 (1999)



63. Iトレンチ板状大形流
紋岩 (1999)





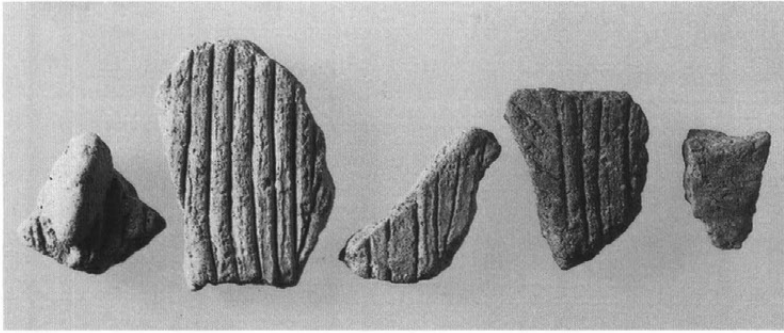
64. Iトレンチ縄文土器出土状況(1999)
竹篋の先に土器が出土している



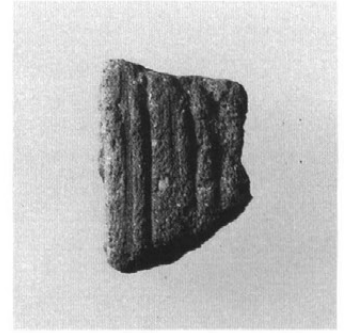
65. Iトレンチ磨石出土状況(1999)



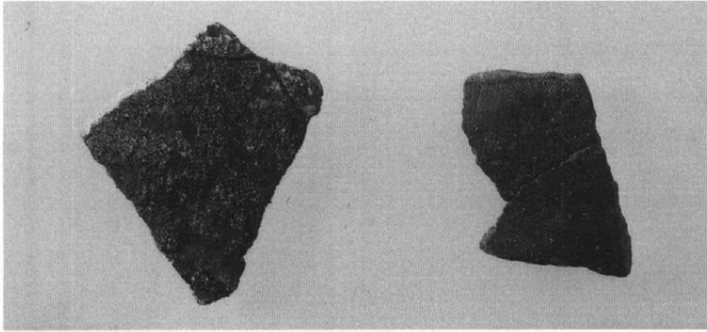
66. Iトレンチ敲石出土状況(1999)



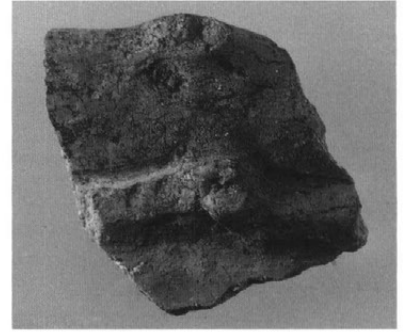
67. Iトレンチ出土土器



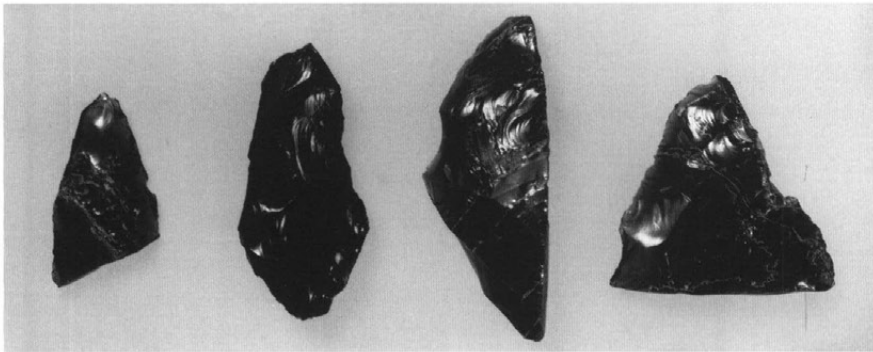
68. Mピット出土土器



69. Mピット北側出土土器



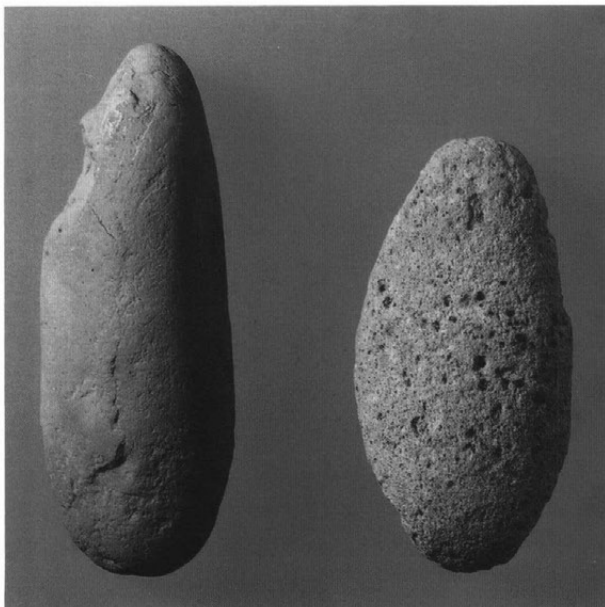
70. 試掘調査区上方出土土器



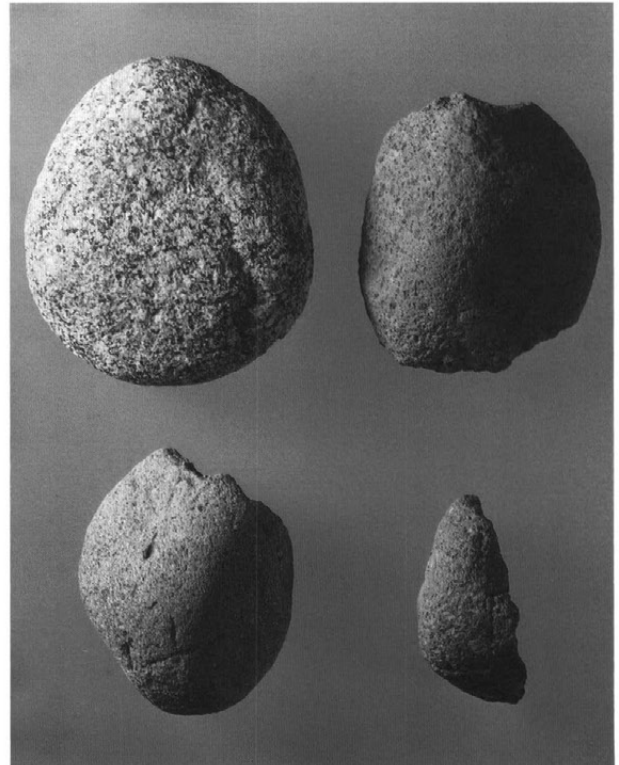
71. Mピット出土尖頭器



72. Iトレンチ出土円盤状磨石



73. Iトレンチ出土敲石



74. Iトレンチ出土磨石・敲石



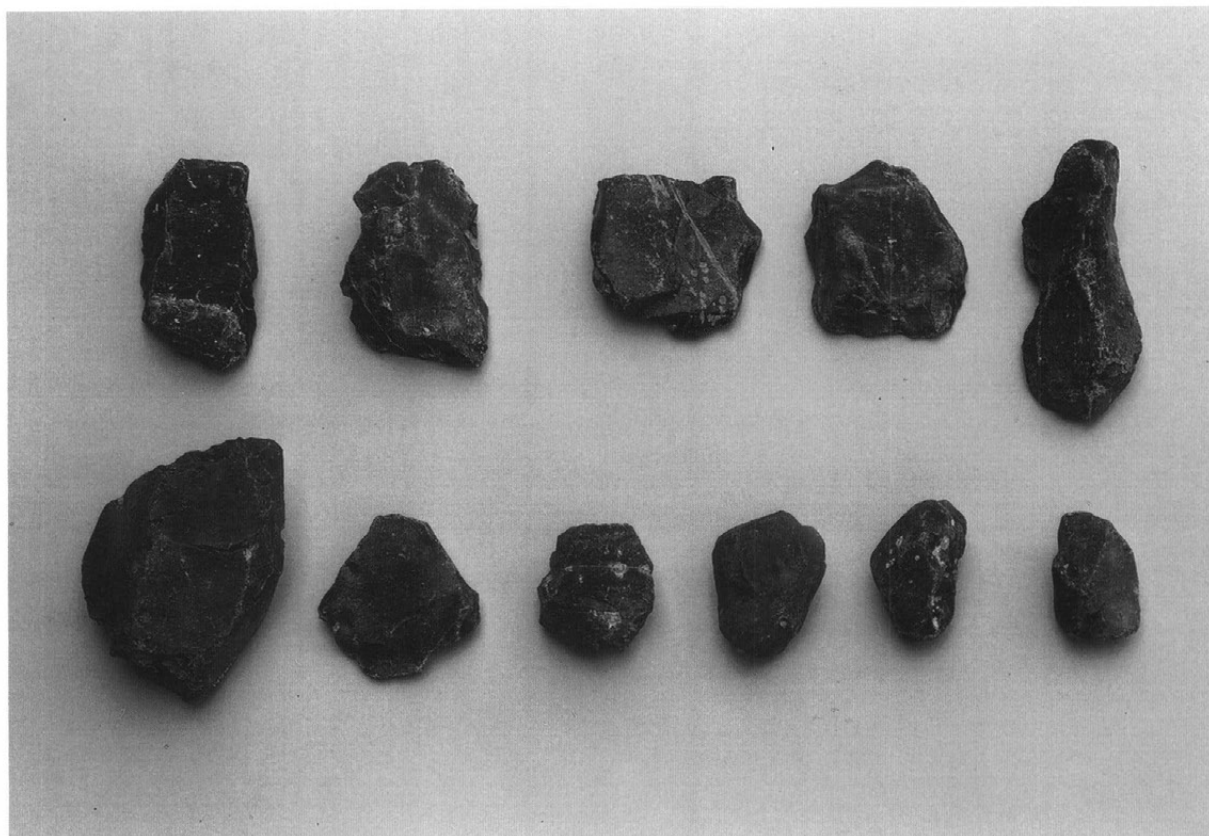
75. 星ヶ台C地点の白色土層（人物の右）



76. 星ヶ台C地点の白色土層中の黒曜石



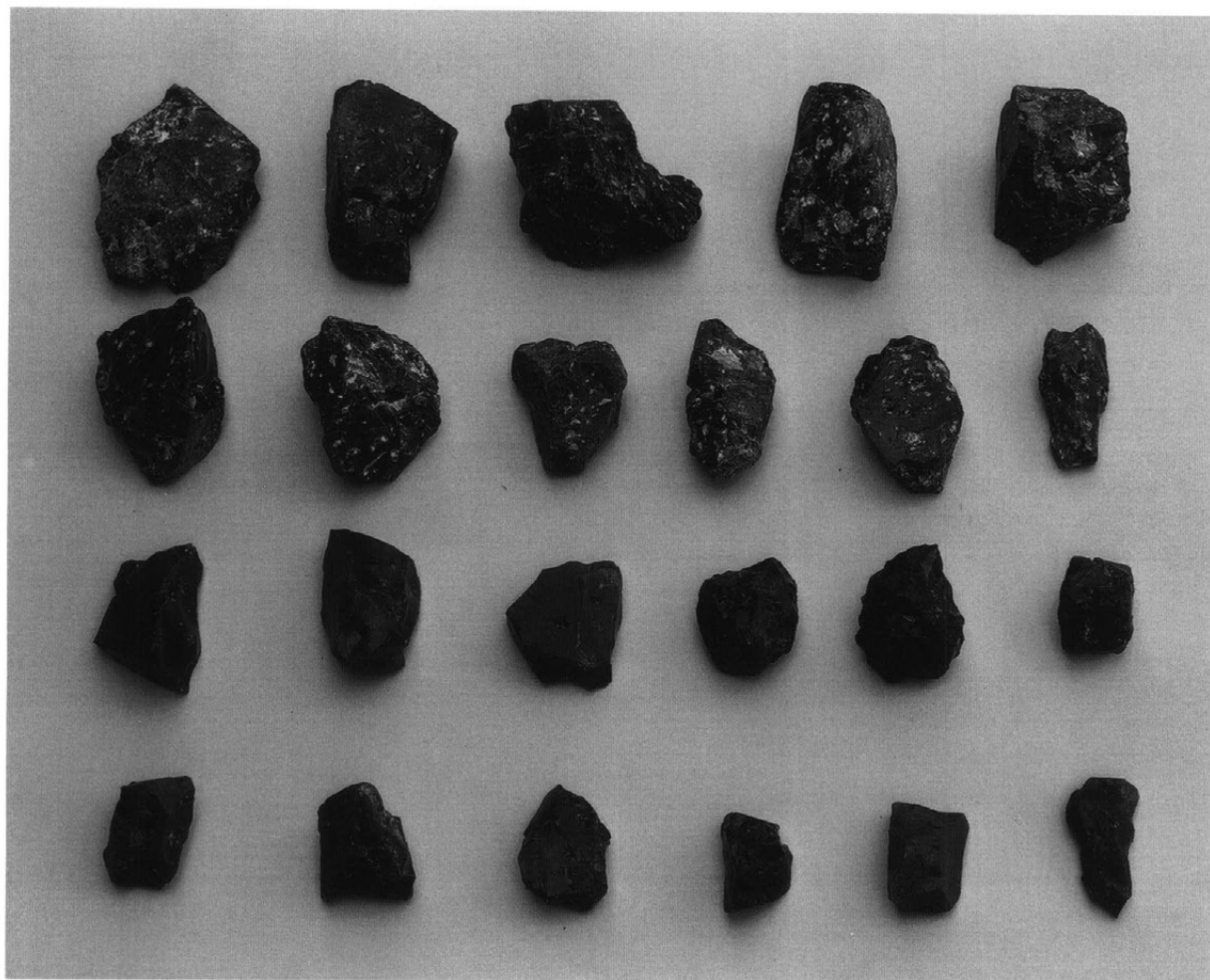
77. 観音沢の黒曜石産出状況



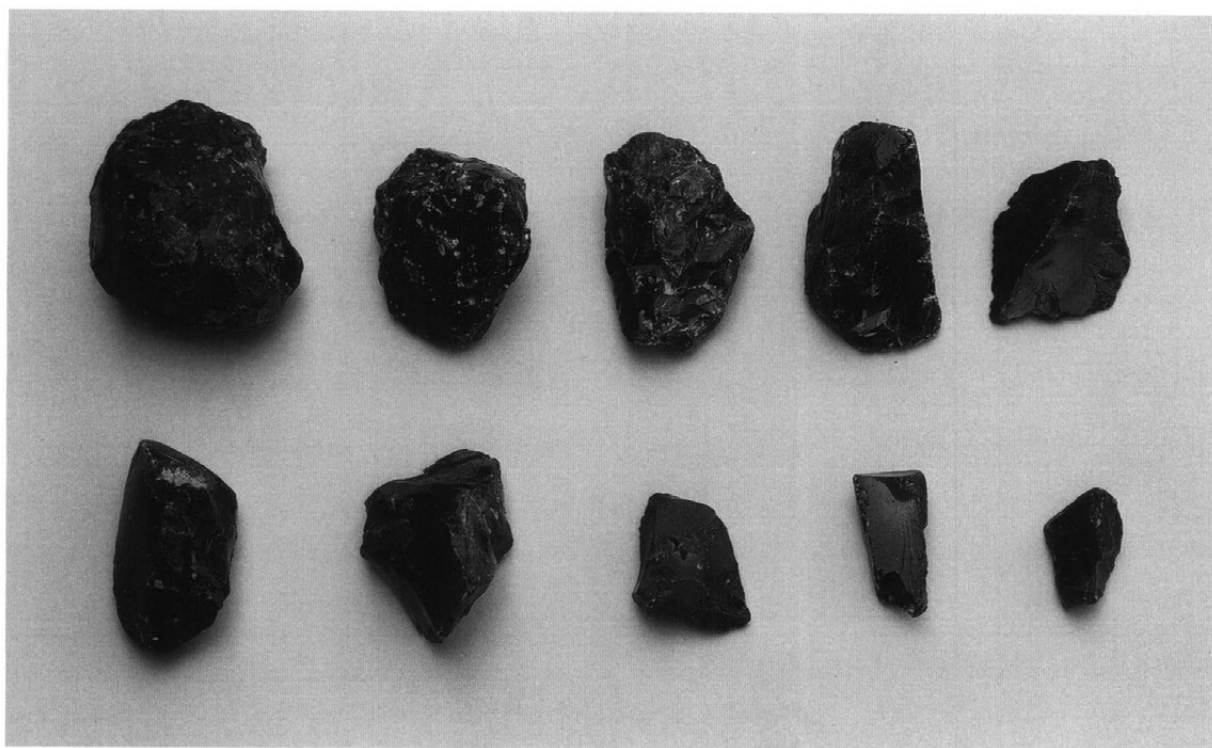
78. 砥川林道の黒曜石



79. 星ヶ塔Mピットの黒曜石



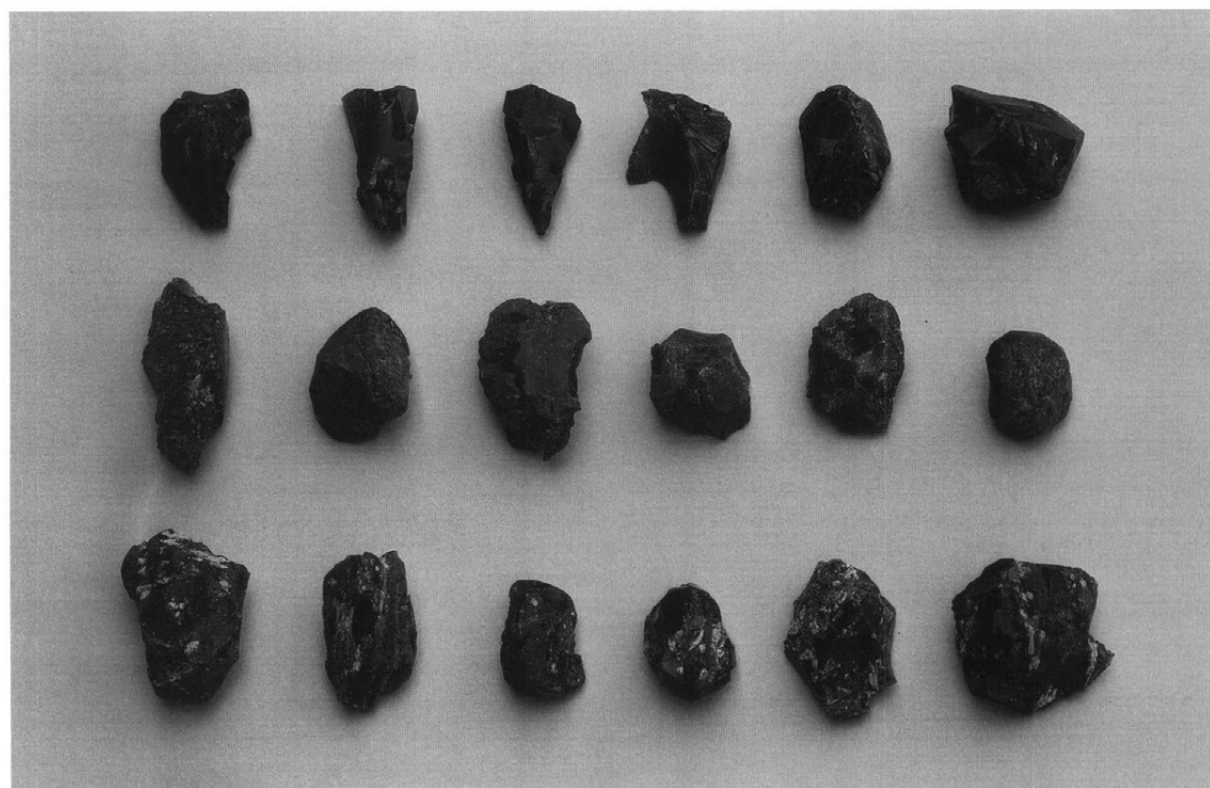
80. ウツギ沢の黒曜石



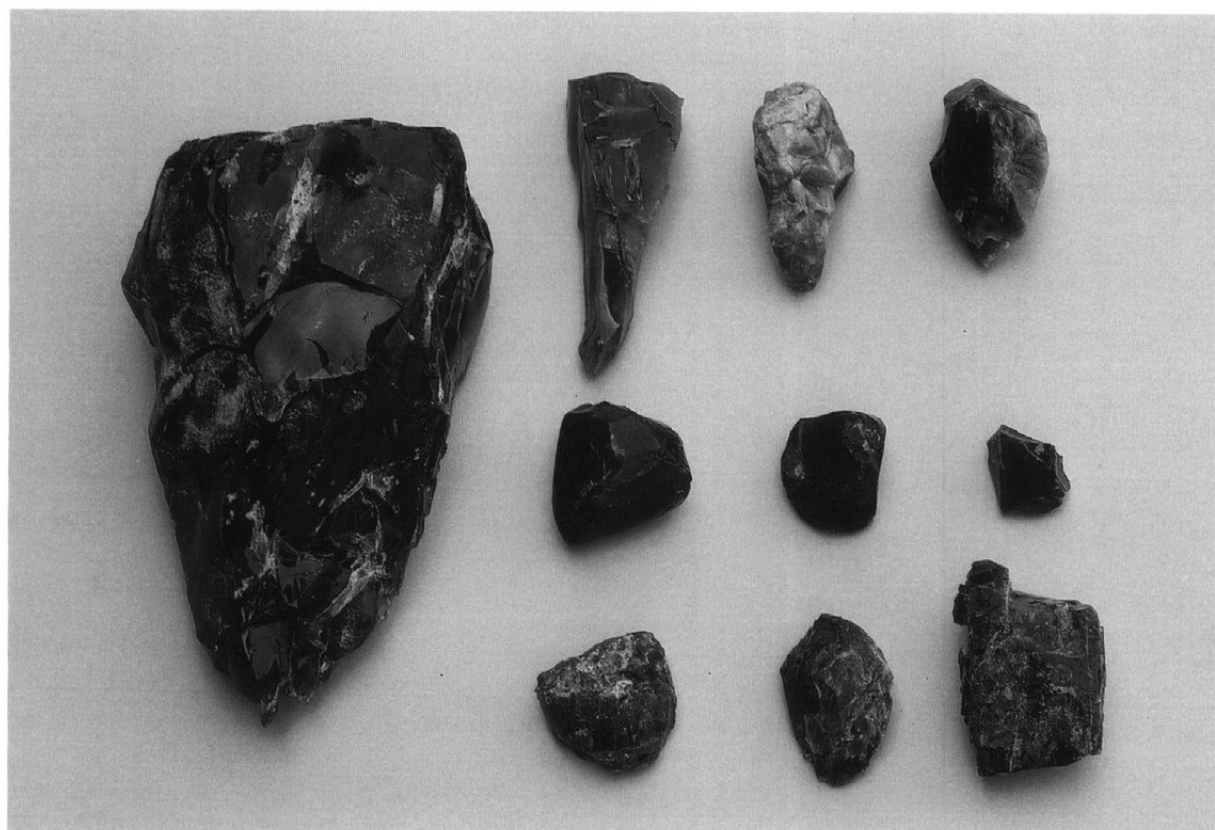
81. 萩原沢の黒曜石



82. 星ヶ台 A 地点の黒曜石



83. 星ヶ台 B 地点の黒曜石



84. 星ヶ台C地点の黒曜石



85. 観音沢の黒曜石

報告書抄録

| ふりがな | こくようせきげんさんちいせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ (わだとうげ・きりがみね) | | | | | | | |
|--------------|---|-----------|--------|---------------------------------------|-------------------|------------------------------|------------------------|------------------|
| 書名 | 黒曜石原産地遺跡詳細分布調査報告書 (和田峠・霧ヶ峰) | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 宮坂 清・田中慎太郎 | | | | | | | |
| 編集機関 | 下諏訪町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒391 長野県諏訪郡下諏訪町4611-40 Tel 0266-27-1111 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2001年 3月19日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 度分秒 | 東経 度分秒 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ひがし 東 俣 | ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 しもすわまち 下諏訪町 ひがしまた 東 俣 | 203611 | 116 | 36度 6分 22秒 | 138度 7分 45秒 | 199310) 200011 | 試掘坑 3ヶ所 | 黒曜石原産地 遺跡分布調査 |
| 星ヶ塔 | ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 しもすわまち 下諏訪町 ひがしまた 東 俣 | 203611 | 4 | 36度 7分 26秒 | 138度 8分 50秒 | 199710) 199912 | 試掘坑 2ヶ所 | 黒曜石原産地 遺跡分布調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 東 俣 | 黒曜石 採掘址 | 縄文 | 黒曜石採掘坑 | 縄文土器 (前期) 石器 | | 縄文時代前期の黒曜石採掘遺跡であることを確認 | | |
| 星ヶ塔 | 石器製作址 黒曜石採掘址 | 旧石器 縄文 | 黒曜石採掘坑 | 尖頭器 剥片 縄文土器 (前期・後期・晩期) 石器 | | 縄文時代前期、後期、晩期の黒曜石採掘遺跡であることを確認 | | |

長野県下諏訪町

黒曜石原産地遺跡分布調査報告書 I

— 和田峠・霧ヶ峰 —

発行 2001年3月19日

編集発行 下諏訪町教育委員会
〒393-8501 長野県下諏訪町4611-40
TEL 0266-27-1111

印刷製本 もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892
